

みちのく
いのり





講話集

みちのくの
いのり

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会

書名揮毫

第三十二回神道講演全國研修大会 東北大会 顧問

藤原隆磨

(岩手県神社庁 庁長・盛岡八幡宮 宮司)

【表紙写真】 盛岡八幡宮拝殿

第三十二回

神道講演全国研修大会 東北大会

と き 平成二十八年七月十九日～二十一日

ところ 盛岡 八幡宮

目次

御挨拶

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会 顧問

（岩手県神社庁 庁長・盛岡八幡宮 宮司）
藤原隆磨

序文

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会 会長
神道講演全国協議会 会長

落合偉洲
（久能山東照宮 宮司）

震災復興祈願祭 祭詞

私の履歴と神社との関わり

藤原隆磨 1

大 祓 ― 今ぞ大切なこと―

大竹久雄 29

氏神さま

廣野幸敬 35

当り前のありがたさ

小野日隆 41

食前・食後の作法

宮田修 47

「旧宮家の皇籍復帰」の声を挙げよう

神宮大麻をおまつりしましょう ―天照大御神の有難さについて―

神の恵みと祖先の恩とに感謝

となり

天皇の四方拝

自国の神話を学ぶ

女史二人

銀ねむの木

みなと祭

祇園の厄除素麺 ―三味線を通じて―

石塚智康 51

後藤大志郎 56

宮崎貞臣 65

染谷淑子 69

今井一雄 73

滝沢正太郎 77

小林晴美 82

工藤智恵 89

菊池重忠 95

下村知大 99

お母さんは何処に行ったの

国際神前結婚式後の挨拶

若者と神さま

みそぎ修法会

老いを生きる

大東亜戦争はアジア解放戦争だ

英霊が繋いだパラオの奇跡

被災地の神職として

社家として神社とどう向き合うか

御霊とともに

河本文夫 104

松野実和 111

小笠原 佐 120

西場俊介 126

中木屋 豊 130

菅原隆志 134

田川伊吹 139

榊原裕一 145

萩庄宏爾 149

佐々木美津子 153

心 掛 け

芦 原 高 穂

157

国 際 化 さ れ た 〃 神 道 〃

山 本 行 恭

168

上 杉 鷹 山 公 の ご 敬 神

落 合 偉 洲

180

神 道 講 演 全 国 協 議 会 役 員 名 簿

186

神 道 講 演 全 国 大 会 の あ ゆ み

188

あ と が き

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会 実行副委員長
神道講演全国協議会 副会長

山 本 行 恭
(椿大神社 宮司)

191

御挨拶

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会 顧問

藤原隆磨

(岩手県神社庁 庁長・盛岡八幡宮 宮司)

三十二回目を迎えました神道講演全国研修大会が開催されますことを衷心よりお祝い申し上げます、全国より遠路はるばる当宮へご参集いただきました研修生の皆様方を心から歓迎申し上げます。

さて、あの忌まわしい東日本大震災より五年が経過し、また、本年四月には、熊本地震災害が甚大な被害をもたらしました。お亡くなりになられた多くの御霊に心よりご冥福を祈り申し上げますとともに、未だ復興の道半ばにおります被災地の皆さま方に希望の光が差ししますこと切に願うばかりです。全国で頻発する激甚的な被害を伴う昨今の自然災害を、我々神職はどのように受け止め、氏子崇敬者の気持ちに寄り添うことができるか、今一度、神社、神職の務めを考えねばならないと存じます。

昨今の神社を取り巻く環境は、皆様ご承知のとおり、地方の過疎が全国各地で急激に加速し、さらには地域との関わり方や生活様式も大いに変貌してきております。そのような中で、氏子と共に神社を護持し、祭祀を継承し、伝統行事をどのように繋いで行くことができるか、やらねばならない課題が山積しております。

大東亜戦争終結より七十一年が過ぎました。アメリカの占領政策により、つくられた現行憲法下の弊害から、過度に個人主義が強調される現在の日本であります。このような中、天岩戸開きでそれぞれの神様が所役を決め、一つの目標に向かい一致協力する祭りの精神こそ、日本国民の本来持つ一体感の心であるとの確信を持ち、我が国固有の神社信仰は、どのような歴史的エポックをも排して、時代が変わっても日本人の気持ちに根付いていると信じ、氏子の皆様に説いていくこと、国家の修理固成も神職の大きな使命と考えます。仲執持としての使命を心におき、氏子崇敬者の皆様方に語りかけていく重要性を十分に理解され、会の目指す目標を受け継ぎ、真摯に講演研修に励む受講生の皆様にあらためて敬意を表する次第であります。

本研修会において、それぞれが更なる新たな気づきを感じ、実践に反映することができましたなら、なお喜ばしい事と存じます。

開催神社として精一杯御協力申し上げますが、不行き届きがありましたらご容赦を願
い、本大会が成功裏に終わられますようご祈念申し上げます、開催神社を代表しご挨拶
とさせていただきます。

序 文

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会 会長

神道講演全国協議会 会長

落 合 偉 洲

(久能山東照宮 宮司)

第三十二回神道講演全国大会は、平成二十八年七月十九日から三日間、岩手県盛岡市に
御鎮座の盛岡八幡宮御神域にて開催されました。全国各地北は北海道から、南は鹿児島ま
で文字通り全国より盛岡八幡宮の境内に結集して、まずは、神前にて東日本大震災及び今

年発生致しました熊本の復興祈願祭を斎行、参加者心を一つにしてそれぞれの地の一日も早い復興を祈りました。また大会会場には、熊本大震災に対する募金箱が設置され、集まった支援金は熊本県神社庁に送られました。

さて、神職の実践綱領である「敬神生活の三綱領」の最初に「神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと」とあります。この事は、神職にとつて祭祀の厳修が最も重要な実践目標であることを物語っているといえるでしょう。そして次には、「神のみこともち」として、「神々の御神徳」をより多くの氏子崇敬者に如何にして正しく判り易く説いていくかという実践課題が見えてくるはずです。

そのためには、神々の御神徳を文章で表現し、また氏子崇敬者に前に自分の言葉で語りかける挨拶や講演に磨きを掛けていく必要があります。そこで神職としての肩書や身分、そして年齢や経験に関係なく参加者全員がこの目的に向かって、真剣に取り組むのが、この伝統ある神道講演全国大会ということになります。

この研修会で発表するために、発表のテーマを決めて、構想を練り準備をして、参加者全員の前で発表し、講評をもらうという形で進められます。自分が発表している時のみならず、他の参加者がどのような演題からどのような手法で話が展開されるかなど、あらゆ

る角度から講演について学ぶことになります。

そして、大会が終わると、毎回その講録が事務局に集められて、講話集が刊行されることになっていきます。今回は、『みちのくのいのり』と題して刊行されることになりました。全国に足を運び、演壇に立ち神の道を説き、また神職の指導にご尽力いただいた佐古幸嬰先生、石井寿夫先生を始め諸先学のご霊前に本書を捧げて、更なる研鑽を誓いたいと思います。

最後になりましたが、研修会場を提供頂きました盛岡八幡宮宮司藤原隆磨様本研修会に格別の御支援御協賛頂きました東北六県神社庁様及び全国各地より御支援頂きました神社及び会員各位に対して厚く御礼申し上げます。

震災復興祈願祭 祭詞

掛介麻久母綾爾畏伎盛岡八幡宮乃大前爾恐美恐美母白佐久

我賀日本乃国波国内津々浦々爾八百万大神達乃大御恵乎
戴伎奉留美志久穩志伎安国奈礼杼時自久爾襲比来留災害波其乃
荒御靈乃荒毘奈里登国民等古与里畏礼敬比来多里志隨爾去志
平成二十三年三月十一日爾起里志東日本大震災乃齋志多留
甚志伎災害乃有様波家波壞礼海波荒礼土波裂介山波崩礼田畑波
流礼許許多久乃人々瞬間爾玉乃緒乃御命乃絶礼多留事登波
成里奴更爾波平成二十八年四月爾起里志熊本地震爾在里氏母
先乃大震災登違波奴災害乎齋志今母尚元乃如伎生活乎營牟
術無久人々乃心乃痛美乃消由留事無伎狀態爾在里介留波実爾母
悲志久由々志伎極美奈里然礼婆今度神社本庁総合研究所主催

第三十二回神道講演全國研修大会東北大会乎我賀大神乃
鎮里坐須此乃御垣内爾氏取里行布事登成里奴礼婆先須大前爾事乃
由乎告介奉里併世氏震災復興祈願祭乎仕奉良久登宇豆乃幣帛
獻奉里參来集布神職等赤伎心乎嚴乃玉串爾取里掛介氏拝奉留
狀態乎平良久安良久諾比聞食志氏今由往先長久続加牟復興乃
業爾日爾異爾弛牟事無久勤志美勵牟諸人等更爾波身罷里給比志
人々乃御靈安良久奈良牟事乎只管爾乞祈美奉留諸人等乃誠心乎
宇牟賀志登見看志給比氏再毘人々賀相賑毘相和美樂美乃尽久留
事無伎郷内爾立帰良志米給比別氏母今度集比多留研修生等爾波
各賀言葉以氏御氏子崇敬者等爾教化伎来多里志事々乎互美爾
教閉補比氏益々爾其乃業乎研伎修米高伎研修乃実乎挙介志米給比
我賀御国乃礎奈留惟神乃道乃正道乎広久世爾受継疑行志米
給閉登恐美恐美母白須



第32回 神道講演全国研修大会・東北大会 平成28年7月19日～21日 盛岡八幡宮

記念講演

私の履歴と神社との関わり

岩手県神社庁長

藤原隆磨

今回の研修会の開催にあたりまして、事務局の大竹さんより会場の提供だけでよろしいから受けてくれないかということで渋々受けたのですが、その後、ちょこちょこ小出しに依頼事が増えてきまして、終いには開催神社の宮司として講演が恒例だから、一時間講演の時間をとってくれとかですね。

そんな事で急きよこの場に立つことになってしまいました。

人には得手不得手がございます、私は人前で話をするのが大の苦手です。酒を酌み交わして好き放題、色んなことを論じたりするのは大好きなのですが、一方通行でこのような壇上からお話するというのは苦手というか不得意な分野でございます。

今日は論客のみなさまもいらつしやいますし、私の元上司でありました落合会長様は、全国を駆け回って講演活動を行っております。

また、プロのアナウンサーもお越しのようでございまして、これは受けるんじゃないかと後悔しながらこの場に立たせていただいております。

先ほど大竹事務局よりのご紹介の通り、演題はなしということとでございすけれど、なしというより考えていなかったというのが本場で、今もつても頭の中が空欄でございまして、どこに話が飛ぶか自分でも分からないような状態というのが現状です。

昨日は少し何か考えておかなくてはいけないなと思つたのですが、早めに到着した二名の事務局の人たちと、ついつい夕食をとりながら、食事はさておき、酒の方がしこたま進んでしまいました、全く組み立てを考えないまま二日酔いの今日の朝を迎えてしまいました。

私の話があちこちに飛んだり、支離滅裂になったり、あるいは時間までおそらく届かないとも思います。そうなったなら全て私を飲ませた事務局のせいでございますのでお許しをいただきたいと思ひます。

折角の機会でございますので、まずは当社の由緒を簡単にお話しさせていただきますいと

思います。

この地は、藩政時代には、盛岡藩と呼ばれておりました。

南部家がずっと拝領した土地でございます。

当社は、前九年・後三年の役に、源頼義・義家親子が奥州平定の為に、陸奥に軍を進められ、その時に戦勝祈願の為に、京都の石清水八幡宮を勧請して建立された神社と伝えられております。

建立地については当初からここにあったわけではなく、ここからまっすぐ門前を下ったところに川が一本ございまして、その向こう側に盛岡城がございます。この盛岡城があった所に、お城が築かれる以前から鎮座していたと伝えられます。

その八幡様がなぜ現在地にあるのかといいますと、ここを治めた南部家は、元々は、山梨県の南部町が出自でございますが、その元を辿ると、源氏の血に繋がるといわれ、河内源氏の祖、源頼義の三男の義光が南部家の祖とされ、義光の長兄嫡男が八幡太郎義家であります。

源家は八幡神を深く信仰された家柄といわれます。

前九年・後三年の役から時代が下って、源頼朝による奥州平泉の討伐がございました。

その戦に頼朝軍に仕えてきた武將に義光公のひ孫にあたる南部光行という武將がおり、軍功があつてこちらを拝領になつたといわれております。

南部家が最初に城を構えたのは、青森県の三戸というところで、岩手県と青森県の境くらいになります。そしてその時代の、南部家の氏神は、青森県八戸市にございます櫛引八幡宮です。

それからさらに時代が下りまして、豊臣秀吉の全国制覇に伴い、南部家には盛岡の地に城を移すようにという下命がくだりました。

伊達領と南部領の境は盛岡から南に五十キロほど南に下った水沢というところです。

これは、できるだけ伊達領との境に近いところに城を構えさせて、うしろからの威嚇というか、動けなくするために盛岡の地に移転をさせられたのが実情だったと思います。

話がちよつとそれますが、頼義・義家親子の話に戻らせていただきます。

先般、私どもの崇敬会会員を連れて東京府中の大國魂神社にお参りをさせていただきました。

そうしたらですね。前九年の役の際、府中大國魂神社に頼義・義家親子が陣を張り三日三晩の精進潔斎をおこない、戦勝祈願をしてからこの奥州の討伐に向かわれたということ

でした。

その御説明を宮司さんが、大変申し訳なさそうな顔をして説明してくれましたが、こちらもそういったところにも縁があるのだなと。

勉強不足で何も知らなかったことで、お参りをさせていただいて初めて、気が付いたこととでありました。

府中の大國魂神社のご説明のなかでもうひとつ教わりました。

この神社では、紙垂が右垂れじゃなく、左垂れなのです。

注連縄も太い方と細い方が逆にかかっている、さらに私ども神職という上位下位の序列も右側と左側が違って、私ども一般の神社という下座の方に宮司がお座りになって、反対側上位に職員が祭儀の時に着座なさるそうです。

色々、いわれを聞いてみましたならば、府中の大國魂神社は北向きに建っているのです。それはある時に社殿の向きをひっくり返したということなのです。

その名残を残すために、紙垂も注連縄とかそういったものすべて、そして作法も南向きのときのままでやっているのだということとありました。

これは、福岡の宮崎宮の大陸に向かった敵国降伏の扁額ではないですけど、北の鎮め、

北の護りという目的で府中大國魂神社が北向きに変えられているということを知ったのですが、そういった話も聞きながら、北国との関わり合いを東京で見つけたということがございました。

ちなみに、うちの神社もちょっと変わっておりまして、西向き社殿です。

神社は一般的に東向きか南向きが多いのですが、うちの神社は真西向きです。

どうしてか　ここはお城から見た方角が東なのです。非常にずばらな殿様が朝日の出る方角に氏神さまに鎮まりいただき、この所に来なくても拝めると、そんなことなのかなと、不謹慎におもったりしているところでございます。

実際には南北に向かう街道のそばにありますことから、非常時の軍事集結拠点と言う説もございます。

南部家の記録によれば、延宝九年に、こちらに新八幡宮が建立されて初めて祭礼が執り行われたとでています。

南部のお城が、八幡様が鎮座する場所に移ってきて築城され、お城の中に閉じ込められてしまったお社は、南部家が氏神様としては尊崇されたわけですけど、一般の庶民の方がお参りできない状態となったということです。

一六七〇年、関が原から七十年経ってからですけど、こちらの方に新八幡社、現在の盛岡八幡宮を建立して、御分霊をこちらの方に、それからお城の方に、本社をということで、二社八幡体制がこのときにできあがります。

このお社は横長の境内なのですが、これはここに神社が建立される前は、流鏑馬が目的の馬場です。ですから境内に入るとすぐに横長の流鏑馬の馬場が横たわります。

今でもこちらで、流鏑馬の神事が行われているのですが、現在のように神社ができる前には、お城からご神体を乗せた御神輿がこちらの方まで参ってきて、仮殿に安置されて祭儀を執り行い、流鏑馬の神事をご奉納して、そしてまたお城に帰るということを長く続けてきたのであります。

これは新八幡宮 現在の当社のことですが建立されてからも明治の時代まで続けられ、戊辰戦争でお城と神社が焼け落ちるまで続けられました。

神社も焼け落ち、ご神体はこちらの方に遷しているのですけど、お城に神社が無い状態となりました、お城から出てきて、こちらに来てというのをずっとやってきた名残で、現在も、普通ですと例祭が終わってから神輿渡御がはじまりますが、私どもの神社は、最初に神輿の神幸からはじまり、その次に例祭の神事、最後に流鏑馬の神事が三日間にわ

たり行われます。

盛岡は人口が約三十六万でありますけれど、市内が約十万から十五万かなと思います。合併やら何やらで在郷の家まで数えて三十六万とは言っていますけれど、大体、市内を見れば十万から十五万位ということですよ。

お正月の参拝の人数も公称では二十万だ、三十万だと言ってはいますけれど、正直それだけあったならば、もう少し私も楽かなと思っていますのですが、おそらく参拝者数は正月三が日で十万人位じゃなかるうかと思っていますところでございます。

盛岡市は南部家がこちらの方に移って来てから新しくできた街でございます、築城開始から五百年といわれております。

それから新しくまちづくりがされた新しい街であり、また市内に神社が少ない街です。普通でしたら一カ町に一社位あるのですけれど、特別な氏神意識というものを持った神社も少なくて、ほとんどが当社を氏神さまとして崇敬頂いております、ありがたいなと思っております。

市内には歴代の藩主が天満宮を勧請してきたりとか、あるいは水上安全の住吉神社を勧請してきたりと点在はするわけですけど、実際には新しいまちづくりの中に神社は組み込

まれていなかったのだろうというような街づくりがなされています。

お宮のことにつきましては、こんなところで留めさせていただきます。

ついででございますけれど、折角、岩手に参りましたので、岩手という地名のいわれをご紹介します。

ここから十分ほど行ったあたりに三石神社という、通称三石さんという大きな岩が三つ転がっている神社がございます。非常に一般庶民の信仰が厚かった神社でありますけれど、昔語りによれば毎夜毎夜、山から鬼が下りてきて、この市中の人々に乱暴狼藉をはたらく。これを懲らしめるために三石の神様が取っつかまえて、二度と人々に悪さをしないようにという誓文を書かせ、その約束手形として、岩に手形を押させたという。それが岩手の地名のおこりになっています。

ただ、ここは昔から岩手といわず盛岡といいました。

ここは旧盛岡藩です。そして明治初頭は岩手県ではなく盛岡県です。

盛岡県が岩手県に改名させられるわけですけど、これは明治維新の時に、当藩は賊軍というところに組み入るわけです。

戊辰戦争で敗れた盛岡は賊軍として扱われ、薩長は盛岡という名前をどうしても消して

いきたいという、そんな思惑があったのではなからうかと感じます。

盛岡城の城跡は公園になっているのでありますが、明治から盛岡城公園とは言えなくて岩手公園といっております。

数年前に市長がこれは良くないということで、盛岡城跡公園と、やっと数年前に名前を変えたところでございます。

また岩手というところは非常に、情報戦に弱い地域だと思えます。

先ほども話しましたが、奥州平泉の三代がなんで滅ぼされてかとみていくと、中央の情報をしっかりと取りきれていないということ、そして、明治の近代国家の誕生の時には、情報をしっかりとらず、奥羽列藩同盟なるもののにのっかり、薩長にこてんこてんにやられて、それでも懲りなくて今は、政治の世界で当県は、保守本流が数十年一度も勝てないという情けない県であります。

一体この先どうなるのかと思うのですが、県民はなかなか目覚めてくれないという、そういういった県民性を持ち合わせたところでございまして、政治面でも苦勞しているところがあります。

ここで 私の自己紹介を簡単にさせていただきたいと思います。

私、神職になるまでこの盛岡の街ではあまり良い行いをしてこない少年時代がございました。

およそ神職になれるようなことをやってこなかった人間であります。

そんな少年だったのですが、親父としては、神職のあとを継いでほしいと思ったのでしよう。当時國大、皇学館は受けても落ちたのでしようけれども、私としてはそんなところへは行きたくない。神主になるのは嫌だと言って、ほかの大学を受けたりして。

ところがそれを全部滑って転んで、父親に一浪させてくれないかと言ったならば、まかりならぬと言われ。ここ幸いとお前は黙って伊勢に行けということでも神宮研修所に行かされ、従って私は普通課程の出身でございます。正階から始まりました。

親父はきつとこの時しかないと考え、お前は二年間伊勢に行って修行して来いというこゝとで言ったわけですけど、これにも散々抵抗はしたのですけど、最後の一言はお袋の言葉でした。

自分の腹を痛めた子供には好きなことやってもらいたいけれど、嫁いできて生んだ子で、神職の家系を潰すとなつたならば、私はここで生きていけない。と言われまして、この一言が最後の決め台詞になりました。

二年間だけ修行したならば、好きなこととしていいかと言ったなら、親父は、好きなことやってよろしいと。それはたぶん策略だったのでしょう。二年間伊勢の地で白衣を着てやっているうちに、よそでは絶対生きられないような環境に、就職先もあるわけでもないですし、ということとで神職の道に已むなく入りました。

そのあとも、できるだけ親元から離れたいという一心で大阪の方に逃れましたところ、大阪天満宮の寺井種茂宮司さんに拾っていただきまして三〇四年修行させていただいたところでございます。

ここにまた、オチがございまして、大阪の現在の寺井宮司様、先代種茂宮司の弟さんにあたる寺井種伯宮司様ですが、今こちらにいらっしゃいます福島県の戸内宮司様とほぼ同期でございます。

戸内宮司様は全国神青協の会長をお勤めになっておられまして、ここでそんな話をしていいかわかりませんが、会長選挙があつたのです。

おひとり、西日本を代表して生田神社の今の名誉宮司加藤隆久先生、私が尊敬する大先輩のおひとりです。

東の方は、戸内先生。その選挙のそれぞれの責任者だったのが、実は私の親父であり、

向こうの選挙参謀が寺井宮司さんだったと大阪で奉職してからはじめて知りました。

奉職して直後、当時欄宜であった寺井宮司様と宿直がまわってきて、晩に食事をとりながら、お前は東北の藤原というがこの藤原だと言われまして、岩手の藤原ですと答えましたら、お前あの藤原の息子かとなりました、当時のことをしっかりと教えてくださり、そんなことから色んな縁がありまして、それから私の親父と寺井宮司はそれぞれに思いがあり、おそらく不通だったのでしょう。そこになぜか私が行ったことによって、それから非常に昵懇なるお付き合いを重ねていただきました。

どこにどんな御縁が転んでいるかということその時にしみじみと感じたところでございます。

その後私は大阪を出て、縁があり神社本庁に拾われて、二〇年間務めて平成九年にこちらの方に帰ってきたところでございます。

盛岡に帰る時も、落合会長様は当時神社本庁の総務部長として人事の方の担当としておりまして、私はその部下の秘書課長でありましたが、大変ご迷惑をかけながらこちらの方に帰ってきたいうことであります。

色んなところにご縁があります。

親父が癌であと何日もないという時、落合会長様が息子を帰すと言ってくるからと、わざわざ盛岡に足を運んで下さいました。

私の親父の枕元で息子を帰してもいいですかと言ったならば、首を横にふったということと云われてですね、よっぽど若い頃に私は酷いことをしたんだなと思いました。

それに追い打ちは あれほど神主になつてくれと言った母親が、こちらの方に宮司として帰ってくると言った時にまじめな顔をして、断りなさい、あなたがここに白衣を着て宮司だと言つて帰つて来て誰が認めるのですかと言うのです。一体、あの時の話は、なんだつたんだろうと思つたのですが、親というのはそんなものなのかな、そんな思いで帰つてきました。

それから約二十年経つわけでございますけれども、何とか皆さんに支えられながら、神社運営をさせていただいているところでございます。

さて、話はあちこち飛びます。折角でございますから、五年前の東日本大震災の時のことについて若干皆様にお話をさせていただきたいと思ひます。

私はその時、三月の十一日二時四十分です。ちょうど私どもの責任役員がお亡くなりになつて、お寺さんで葬儀の真最中で、揺れ始めたときは盛岡の市長が弔辞を読んでいる最

中でした。

なかなか揺れがおさまらない。非常に長いのでこれは大変なことが起こっているなと思つて、市長も弔辞が途中で止まつてそのあとどうしたらいいかわからない状態で、市長帰れとみんなから言われて、帰つていいですかなどといいながら慌てて帰つたというのが、二時四十分でした。

私は何を考えていたかというと、また不謹慎で、お寺さんに来ましたものですから、駐車場に車を停めていたのですけれど横に墓石があつたのです。あの墓石が自分の車に倒れたらどうしようとかくだらないことばかり考えながら、いえいえ 若干神社の施設がどうなっているか心配しながら、急いで帰つてきたということでございます。

当時、皆様の方がテレビの映像などでご承知だと思ひます。

盛岡は完全に停電を致しましたもので、地元の我々の方が全く情報のない状態でした。テレビが全く見られない状態で、車のテレビを夜までつけながら、そこから情報を拾うということとして、市内全部停電という状態です。

当然、おそらくガソリンもなくなるだろうということとして、おいそれと車のエンジンをかけておくわけにもいかない。そんな中、寒い冬、照明はない、暖房は効かない、トイ

レの水は流れない、どれだけ電気に頼ってきた生活をしていたんだろうなと、つくづくと痛感をさせられました。

三日ほど経ちまして、街の中から徐々に、電気がつきはじめ、一番最初に電気がつくところは県庁のあるところ、あるいは警察のあるあたり、官公庁に明かりがすこしづついてくる。ここはどちらかというと山の方のはずれ、境内で焚火をしながら夕方暖をとっていると、向こうの方で、ずうつと明かりがついてきている。うちの方は、いつくるんだろうなと思ひながら、焚き火で暖をとっている状態でした。

その時のみんなとの笑い話として、北朝鮮の人たちは韓国の方をみて、あつちは明るくていいななどという思いで夜を過ごしているのだろうな。などと話しながらこの境内で何日間か過ごさせていただきました。

避難所にもなりました。色々、お米やら何やら蓄えがありましたので、まず、それを全部吐き出すということで、冷蔵庫は電気も通らないので、やがて腐るわけですから一気に全部出すということで、三日間、四日間炊出しをしたりしていました。

そうこうしているうちに、神社に来るとうまいものが食えるらしいと噂を聞きつけて飯を食う時だけなぜか人が増えるのです。食事がなくなるとさらっと人がいなくなるという

ことが続きました。

色んな経験をさせていただきました。

被災地沿岸に繋がる道路が閉鎖をされていたわけですけど、これを突破してはいるしかないということで、被災地をこの目で見なければ何ともならないということで、とにかく、検問所を突破して入ろうということで、検問？で警察官の方に、自己責任で入るから、自分が責任を負うからとにかく中にいれてくれと頼み込んで被災地までに入っていました。

この行動が良かったのか悪かったのか、本来ならば、戒厳令とは言わないですけど、一般市民は完全に止めるべき災害だったろうなと今になって思います。

というのは、ただ家屋が倒れただけでなく、がらがらばんになっているわけです。ずたずたになってかき回されているのです。

その辺に、レジの箱が落ちていて、金融機関の金庫はそのままあったり、色んな金目のものが誰の物ともわからずに財産が散らばっているわけです。

これは緊急事態法などで人々の行動を制限しないと、きちつとした対応をとることが、絶対に必要な事態だったのだらうなと思いますながら被災地に入っていました。

非常に規律正しく動いたようには言われておりますけれども、実は、全員がそうではない。例えば、ガソリンスタンドを見ていると、オイルタンクにポンプをいれていたりしている人間もいましたし、前にずた袋を下げて、あるいは、リュックを背負って徘徊している人間も、何をやっているのか大体わかるような状態というのを、全員ではないですけどごく稀にそういう方も見たりしました。

そうは言ってもよその国とは違って、非常に規律正しく動いたというのは確かに事実であり、誇るべきことであります。素晴らしい民族だなとそのように感じたところでございます。

それから何日かして、神社本庁に状況を説明しお願いをして、そして神道青年会の方々にも協力をいただきましたまして、何とか救援物資を送って来てくれと。事は命を繋ぐことであって、その後の復興なんて今はどうでもいいから、命を繋いであげないといけないのだと神社本庁に協力要請をしました。

神社本庁、そして全国神道青年会の皆様が快く協力してくださり、第一陣が波打つ東北道やら一般道を使いながら、何十時間もかけてきていただきました。

その後に、青年会の方が十トンのトラックに荷物を満載して来てくれました。そういっ

たことがあります、意外と神社界は行政よりも早く岩手の場合には、動かさせていただきました。

岩手の青年会の諸君が境内に集まって、救援物資トラックが境内に着くたびに、自分の車を持ち寄って来て、仕訳などもどかしく、とにかく積めるものを積んで被災地の方に入りました。

行けばこれはいらないとか言われたりもあったのですが、いらないといっても隣にいるかもしれないから置いていくから分け合ってくれなどということもあったりして、廻りながらここでは水が足りなくなってきた、ここは焼け出されて着類がない、布団がない、薬がない、長靴がない、色んなものをみながら何回も何回も入らせていただきました。

その中で、岩手の仏教界のみなさんに、神社界はこんな動き方ができるのかと。その対処の仕方、迅速さに非常に仏教界の皆さんが驚かれました、曹洞宗の若い僧侶たちも何とかやりたいということでありましたので、それなら一緒に動こうということで、お寺さんの避難所も一緒に廻ったり、神社の社務所が避難所になっているところと一緒に廻らせていただいたりし、その活動の最中に、孤立してまだ自衛隊が見つけてないところも何か所か見つけて報告をしたりとか、そういった活動をさせていただきました。

なんだかんだでそういうことをやってきたわけですけども、私はその時に感じたのは、私はどうしようもない男であちこち流浪をしながら盛岡に帰ってきたのですけど、やっている内に一つ気が付いたことがあります。

それは、俺はたぶんこの時の為に盛岡に帰ってきたのだと思いました。

このときの為の仲間づくりだったのだなと。

というのは、今までの人生色んなことをやってきましたが、時には喧嘩をしたり、あるいは仲たがいをしたり、肩を組みあったりした多くの全国の仲間が真っ先に連絡を取ってきてくれて、何か足りないものはないか、何を送ったらいいか、どうしたらいいんだと、どんどんどんどん連絡を頂戴致しました。

それは九州から北海道、東京、大阪やら全国の縁ある皆さんから色んな電話を頂戴致しまして、どんどん荷物を送ってきてくれて、これをもって何とかがんばれと言われました。こちらの方も、今回だけは甘えさせてもらおうというのと好きなことを言わせてもらおうということ、金を持っていそうな神社の宮司には、発電機を五台ぐらい送ってくれとか、なんぼするんだ、そんなの二百万もあれば済むんじゃないかとか、この時に出さなかったら後悔するよとか、半分脅しながらですね、送ってもらったりして、ちゃっかりと貸し出

すときに、盛岡八幡宮と書いて、そっちへあっちへ持って行ったのですけれど、いつか却ってきたらうちの神社で使おうと思っていたら、実は一台も却ってこなかったという捕らぬたぬきではないのですけど、そういうこともあつたりして、非常に皆さんに助けられました。

その時にもう一つ感じたことは、五十を過ぎたくらいのときに、人間というのは人生を生きてきたことに対する通信簿がくるのだなと思いました。

それは、良き友にめぐり会い、良き師に出会い、良き仲間恵まれて、そしていい後輩を育てながら生きて行くということが、いかに大事なことかという。私、それまで全然気づかなかつたです。やっと、あの五年前の大震災の時に、そうやって支えてくれる、色んな声をかけてくれる、救援物資を送ってくれたり、色んなことをしてくれる大事な仲間がいたということをその時初めて気が付かされました。

人生の通信簿はこんなときにくるのだな。あのようなときに、世の為人の為にご奉仕というか、働くためにたった一人では何もできない。よき仲間、良き師にどれだけ恵まれるか、それが人生の通信簿なんだなと、そのように思ったのであります。

人生の通信簿は、俺、何点くらいだったのだろうか？

これでやっと、なんぼか合格とはいわなくとも五十点か六十点くらいもらえたのかなと
その時に思いましたし、ほんとに感謝を致しました。

バカをやりながら生きてきたけれども、こういった職業に就かせていただいた親父やお
袋に感謝をして、いい仲間めぐり会える職業に就かせていただいたと、その時つくづ
く思った次第でございます。

まだまだ、お話ししたいことが震災のところではあるのですが、この辺にさせていた
きたいと思えます。

せつかくですから私の神社に対する考え方を少し、私なりに申し述べさせていただき
たいと思いますけれど、今日、こうやって講演講師の勉強会としてお越しになっている皆さ
まを前にいうのもちょっと躊躇しますが。

先程の落合会長様の話を聞いていて、やはり人に語りかけていくということは、いかに
大事かということは、十分わかりながらのお話だと思つて聞いていただければと思います。
私は、神社は簡単にいうと雰囲気、気ですね。感じる空間 空気。これをつくっていく
ことが大事だと思っています。

間違っているかもしれませんが、一体、日本の国民が、八幡の大神様のご神徳をど

うのこのとか、お稲荷さんのご神徳をどうのこのとか、いちいちそんなことを頭の中に入れて境内にきているのだろうか。

それを私どもは説いていけないのではありますけれど、どれだけの人間がそれに耳を傾けてくれるのか、余程マニアックなそういったものに非常に興味を持った方は、寧ろ私たち以上に知識を持っている可能性もありますが、大方、九割から九割五分、九割九分くらいは、あまりそんなことを考えずに神社にお参りをしているのではないか、そういったことがあるんじゃないかと思っています。

それでは、一体どうしたらいいかというと、やはりそこに神様が鎮まっている、あるいは、何か特別な尊いものがそこにいらっしやる。この雰囲気というか、気をつくって行く、感じる空間を作っていく。

私は境内づくりの最初にそれが必要ではないかと思っています。じゃあお前の所の境内どうなっているんだ、なっていないじゃないかと言われたら大変恥ずかしいことではございませんけれど、気持ちとしては、まず来た時に、ここをどこか一般の俗世界とは違う、ここに来たならば何か気を感じるということ、何か特別な空気を感じるというものを作っていきべきじゃないかなと思って、奉仕をさせていただいております。

そういった中で私どもも問われれば神社の色々なこと、あるいはご神徳を申し上げていかなければと思うのですけれども、これを上目線で神様のご神徳、ご神徳と言つて、どれくらいの間がそれに耳を傾けてくれるか、それよりはまず、私は境内というものを、鎮守の杜というものをしつかりつくつていつて、そこに神社らしい雰囲気、そこに何か聖なるものがあるというものをつくる境内整備をやつていくということが先ずは大事ではないかと思つてゐるところです。

それと合わせて、そういった感じる空間作りを右の翼とすれば、左の翼として語りかけというか会話力を磨いたり、色んなことをやつていかなければいけない。口だけでは、神社に人はついて来ない。自分の想いとかそういったものを伝えていくためには、やはり鎮守の杜というものを基盤にしてその整備を行つていく。一般の方たちがそこにきてありがたいと神前に手を合わせられるような雰囲気、感じる空間をつくつていくということが大事だと思つてゐます。

実習などできた人にもよく言うのですけれど、一掃除二奉仕というだろ、お前ら下ばかり見て掃除をしてはだめだ、これから自分の神社に帰つたならば、竹箒を動かしながら顔挙げて木々の一本一本見た方がいいよ、すぐには見えない。でも、ここにある一本の木が

不要だとか、ここにこういう風な木が植わっていればいいな、ここにこういう風な花があればいいなとか、ここに水が流れていたらいいなというのは、おそらく毎日毎日境内に出ていけば、どこかでそういうことが閃く。それは一回や二回ではわからない。毎日毎日境内に出ていることによって、その神社の境内の持っている特性が見えてくる。

一掃除二奉仕というけれど、そのための境内清掃なんだと。だから、ただきれいにするためではなく、細部にまで目を凝らして、これから先三十年先、五十年先の境内の姿というものを自分の頭の中に描きながら境内にいるべきである。

境内に神職は常に出ていなきやいけない。その為の掃除だということを思いながらやりな。などという主旨のことをこちらの方で実習する神職のタマゴに言っております。

私は私なりにそういう風な考えで神社奉仕をさせていただいています。

この社殿は先代の宮司が明治の盛岡大火で焼けて仮殿であった百年位経過の拝殿を平成九年に新しく造成した神社であります。

その道半ばで先代の宮司は亡くなったわけでありですけど、明治の初年に大火で焼けた神社を仮殿のようなかたちで造っていて、それはそれで雰囲気があったのです。詫び寂びでいえば詫びの雰囲気はあったのですが、ただこれ以上もたないというのが、先の宮司の

判断だったと思います。

この社殿を造った時に、市民の皆さんから朱くしやがってとかですね。全然、おもらみがないとか色んな投書苦情もいただきました。

ただ、今やっておかなければ、五十年先、百年先に苔むした神社はできない。今は正直言って軽いなど私も思います。ただこれが年数をかけて傷がついていたり、擦り傷がついていたり、手垢にまみれてくることによって、五十年、百年経って行つたとき、おそらくそういう風な神社になっていくてくれるのだらうなど、そこに渡していくために、私どもは今、何をやっていっていかないといけないのかというつもりで、神社の方の施設を色々と直させていただいているところでございます。

私は、話することが苦手なので、どちらかというと境内造成とかそっちの方ばかりでいつも土方着で、その辺を走り回っている宮司であります。

もう一つ、神社は宗教面でだけ捉えられてしまいます。一応、宗教法人法による宗教施設ではあります。これは前の神道政治連盟の会長の宮崎先生のお言葉ですけど、神社というのは宗教面というのはもちろん第一義にあるのだけれど、宗教面、信仰だけじゃないんだ。それは神社のもっている一つの要素にすぎない。その中には、道徳的な生き方であ

るとか、教えとか、それから教育もある。あるいは、政治的な要素もある。そして、文化的なものもある。あるいは娯楽もある。こういったものをすべてを内包したものが神社であるから、神職はもつともつと、そういったところに目を向けて勉強していかなければいけないと、特に宮崎先生は、政治の世界で神道政治連盟の会長まで執られて、非常に素晴らしい感銘を受ける話をされる講師でございました。その方がおっしゃっているのは、私のもつともだなと思います。

信仰面だけをとっていくのではなく、文化的なもの、あるいは、そこに集まってくる者に対する楽しませる娯楽的なもの、あるいは伝統芸能を継承していくような文化的なものとか、あるいは神道の研究とか、郷土史とか色々なものが内包されているのが神社なんだと、それを目指していかなければだめだということを言われて、できないながらも、それをいつも頭の片隅に置いてやらせていただいております。

先ほど、大竹さんからご紹介ありましたけれど、私も不得意な分野でありましたけれど神道政治連盟の役を仰せつかることになりました。論客で言えば、芦原先生がそこにいらっしやいますし、前の神政連事務局長を執られた落合会長もいらっしやいます。私ごとときでいいのかなと思いつつもその役を仰せつかりましたが、私は政治から逃げるといふのは

良くないと思います。神職である前に一社会人である。私どもはもう少し、一社会人として社会にどういうふうに奉仕をしていくかという中には、やはり政治にも携わらなければ、それが国民の一人として当然の責務であると思って政治連盟の一翼を担わせて戴きたいと思っております。

私どもは、御皇室を中心とした国づくりをしていこうと神社本庁、神道政治連盟が表裏一体となってやっているその活動にご理解をいただきながら、そういった仲間を多く集めていくというのも一つの使命ではなからうかなと思っております。

話があちこちに飛んで全く基調講演にならないようなお話で大変申し訳なかったのですけれど、お話を綴じさせていただきます。貴重な時間を頂戴して大変申し訳ございませんでした。ありがとうございました。

大 祓 — 今ぞ大切なこと —

大 竹 久 雄

皆さま、本日はご遠路のところようこそご参拝をいただきました。

皆様は、ご参拝に先立ってお手水をされ、身も心もお清めされたと思いますが、このお手水は禊の簡素化されたものです。

お手水をし、心身を祓い清めて、一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居と、鳥居をくぐられました。

この鳥居は、世俗と神域との結界であります。

神域に入られ、参道を一步一步、洗心の思いで、ご本殿に向かわれ、参道では、鳥居をくぐる折々に、「清々しい」お気持ちになられたかと思いますが。

神氣満つるこの神域に身を置かれ、「清々しい」とのお気持ちは、言わば、神の氣をお感じになられ、お享けになられた証であります。

そして、祓殿にてお祓いをお受けになられ、更に祓い清められました。

お手水からお祓いをお受けになられるまで、全てが祓い清めであります。

神道は祓いに始まり祓いに終わるといわれる所以も、そこにあります。

別けても、この六月「水無月」は夏越の大祓の月でございます。

一年間の上半期、いわゆる一月から六月までの罪穢れを祓い清める神事であります。

参道に設けられました茅の輪をおくぐりになられたかと思いますが、この夏越の大祓は、当神社のみならず六月の三十日には全国津々浦々の神社に於いても執り行われています。

伊勢の神宮に於いても、月次祭として名称は違いますが、この大祓が執り行われております。

実は、皆様……。天皇陛下もこの大祓をなされているのをご存知でしょうか？

六月三十日の午後二時、宮殿『竹の間』にて、先ず、節折の儀が執り行われます。

※毎年六月三十日・十二月三十一日の両度（年二回）に行われる。

節折の「節（よ）」は、竹の「節（ふし）」という字で、「ふし」を「よ」と読ませます。

竹の節（ふし）と節の間をいう古語でありまして、君が代の「代」と同義語で、一定の時の区切りのを「節（よ）」というのであります。「折（おり）」は手偏の「折る」。

この節折りの儀は、「荒世あらよの儀」、続いて「和世にこよの儀」（※紅絹）の二儀が行われます。
「荒世の儀」は、悪祓あしのはらへ・荒魂の祓で、続いて「和世の儀」は、善祓よしのはらへ・和魂の祓といわれています。
また、悪祓は、悪しき事を祓った後、善き事を祈る意味で、善の祓いが行われますが、一言で言えば、「祓い」と「清め」であります。

午後三時から節折りの儀に続き、神嘉殿に於いて大祓が執り行われますが、「大宝令」では、節折も大祓も区別はなく、一連の儀式として、大祓に含められています。

平安朝の第六十二代・村上天皇の御宸記の「清涼御抄」に初見があることから、この頃から始まったと考えられています。

皆さんは、茅の輪をくぐり、形代にて罪穢れを贖い物として託され、祓い清められておられますが、天皇陛下は①御服②御麻③壺④篠竹この四種を贖い物としてお祓いにお使いになられています。

先ず一つ目はの御服は、六尺一寸（砲の長さ四尺・袴の長さ二尺一寸）の白絹を柳筥という木箱に入れ、陛下の御前に供すると、陛下は口氣を三度、吐きかけられます。即ち罪穢れを御服に移されるであります。

次に、御麻。榊枝に麻苧と八垂の四手を八枚付けたもので、陛下に供すると、陛下はお

手に取られ、お身体を右・左・右と三度お撫でになられます。

先程、祓殿で神職が、皆様を左右左と祓いましたが、陛下は、お身体をお撫でになり、罪穢れを祓い清められます。

次に細い小指大の色爽やかな篠竹九本をお使いになられます。

一本目は、御背丈。お身体の後ろからお当てし墨汁で標を付け、その標識を目当てに節を折る。二本目が左のお肩からお足まで。三本目が右のお肩からお足まで。四本目が左のお胸からお指先まで。五本目が右のお胸からお指先まで。六本目が左のお腰からお足まで。七本目が、右のお腰からお足まで。八本目が左のお膝からお足まで。九本目が右のお膝からお足まで。※一本から九本を説明。

最後は、壺（口径・三寸、縦五寸の赤土の土器の壺を陛下のお口元に供すると、陛下は、口氣を三度吹き入れられます。

陛下が何故、大祓いをなされるのか、天皇陛下は、国民の象徴として、一億二千七百四万三千人の総国民のご代表として、「おはらへ」をなされるのです。

この大祓の「大」とは、大きな祓いと書きますが、大小の「大」ではなく、「公（おおやけ）」という意味であります。

国家といえますと、日本の国民一億二千七百万三千人、一人ひとりが構成員となって国家となっています。

一家といえますと、おじいさん・おばあさん・おとうさん・おかあさん・お子様が家族の構成員となって、一家としています。

個人個人の私達一人ひとりが構成員となって、「公」となしているわけで、公私は不二一体であるわけです。

そう考えますと、先ずは個人個人・一人ひとりの「私」から大祓を為すことによって、一家という家族全体が祓い清められ、また、国民一人ひとりが祓い清めることによって、国家全体の「公」が祓い清められるわけです。

先ずは、皆さん、ご自身から祓い清めることが大祓いの第一歩であります。

先程、お祓いをお受けになられた祓殿には、「萬有神化」という扁額が掲げられていたかと思いますが。

これは、当神社の山本行輝先々代宮司の揮毫で、先々代宮司が、明治の時代、児玉源太郎大将の組織する大日本精神団に入団され、当時、伊藤博文首相のところにお遣いに赴かれました。

この話は、先代・山本行隆宮司より聞き及んだことですが、

その時、伊藤博文首相が、先々代行輝宮司に、「神主の使命は如何に有り哉!!」と問われたそうでございます。

先々代宮司は、「鳥居をくぐる者、皆氏子也。萬有神化・人間神化と化す也」と即答されたそうでございます。

先程、皆様は、お手水をされ、鳥居をくぐり、神氣満つる参道にて 神の氣を享けられ、更に、祓殿にてお祓いをお受けになりました。茅の輪をくぐり、形代に罪穢れを贖い、ご祈祷をお受けになりました。全て皆さんが、神化していく手立てであります。

今、混沌とするこの世の中、天皇陛下は、国民の象徴として、国民一人ひとりのご代表として、大祓いをなされておられます。

国家国民の平安を祈られる陛下の祈りであります。

陛下お一人に一億二千七百万三千人総国民のご負担をおかけするのではなく、国民の義務として皆さまお一人お一人が、大祓をしていいいただきたいと思う次第です。

本日は、ようこそご参拝いただきました。

氏神さま

廣野 幸敬

本日はお忙しい中、お集まりいただき、ご参列賜りました事、先ず以て御礼申し上げます。本年も、このような形ではありますが、無事にお祭りを迎え、恙なく終了致しました事、大変有難く存じます。

さて、原発事故による避難から五年の歳月が経過した今、この八坂神社とは、氏神様とは、我々にとってどのような存在なのか、震災発生当時を振り返りつつ、私なりの考えでお話しさせていただきます。

平成二十三年三月十一日、あの東日本大震災が発生しました。未だかつて経験した事のない非常に大きな揺れと、テレビに映し出される悲惨な津波の映像。五年と四ヵ月経った今でも、つい昨日の事の様に思い出されます。また、我福島県に於いては、人々が余震や津波の恐怖に不安を抱える中、更に追い打ちをかける様に、あの原子力発電所の爆発事故

が起きました。

不運にも、この八坂神社が鎮座する山木屋地区も、後に計画的避難区域となり、住民皆が避難しなければならない状況となりました。あの原発事故は、我々の平穏な暮らしはもとより、農業や畜産業など、古より脈々と受け継がれてきた山木屋地区の生活そのものを奪いました。更に、この山木屋地区にとって最も大切なものをも奪われました。それは祭りです。この山木屋地区に於いて、一説に四〇〇年前から行われてきたという八坂神社の三匹獅子舞。毎年変わらずに行われてきたこの祭りが、あの事故により、いとも簡単に行う事が出来ない状況となりました。また、これにより、次世代への引継ぎが行われないまま時間だけが経過し、三匹獅子舞の存続が危ぶまれるという状況でもあります。

地域から祭りが無くなる。これは一体何を意味するのでしょうか。祭りというのは、様々な意味を持つ言葉であります。祭るとは、神様を待つ事。そして神様に対しお供え物をしてお祭りを行う事。そして、このお祭りをを行う事で、人と人との繋る、つまり繋めるという事。地域が地域である為には住民同士が共有する何かが無くてはなりません。例えば、これを会社置き換えて考えると、会社が会社である為には、同じ会社に勤める社員がいて、その社員皆が同じ目的に向かって働いているという事、これにより会社が会社として

成り立ちます。では、地域で考えるとどうでしょうか。地域が地域である為には、同じ土地に暮らす人々がいて、ここまでは会社の場合と同じです。しかし同じ土地で暮らすようにも、それぞれの家ごとの生活があります。会社に勤める人がいれば、自分の畑を持ち農業に勤しむ人もいます。会社の例えで言う所の、同じ目的に向かって、という事にはなりません。ここで、この土地の人々を纏り、地域が地域である為の共通の目的となるのが、祭りだと思えます。地域とは、単に同じ土地に暮らす人々の集まり、ではありません。地域が地域である為には、地域の中心として神社があり、同じ氏神様の鎮まる土地に暮らす人々、すなわち氏子がいて、その氏子皆が協力し合いお祭りを行うという事、これにより地域が地域として成り立つ、地域とはこのようなものだと思えます。つまり神社とは、氏神様とは、我々日本人が、個人や家族の枠を超えて、土地ごとの集団の生活を形成していく上で必要不可欠であり、地域の象徴であるという事です。この日本の象徴が天皇陛下であるように、地域の象徴は氏神様であります。地域の象徴である氏神様の祭りができないという事。これは、地域が地域である為の目的を失い、地域住民を纏める術を失う事を意味します。

あの震災から五年四ヵ月が過ぎ、この山木屋地区も間もなく避難指示が解除される見通

しがついてきました。しかしながら、八坂神社の氏子である、山木屋地区の住民のほとんどが、他所の地区に家を建て、新たな生活を始めています。それまで当たり前だった地域の横の繋がりは段々と薄れてきており、震災以前の山木屋の生活に戻す事は不可能であります。しかし、このままで良いのでしょうか。私の立場として、住民皆に山木屋に戻れとは言えません。皆それぞれの生活があり、それぞれの決断の上に今の状況があります。それを理解したうえで私が申し上げたいのは、どこの土地に暮らそうとも、皆八坂神社の氏子であり続けるという事です。本来であれば、氏神様の鎮まる土地に暮らす人々を指す、この氏子という言葉ですが、今の山木屋の状況に於いて、必ずしもそうとは限らないと思います。大事なことはそれぞれが八坂神社の氏子であるという意識を持ち続けるということです。氏子地域に住まなくともその神社に崇敬の念を寄せる人々を指す、崇敬者という言葉があります。今現在他所の地域で暮らし、恐らく今後も今の生活を続けるであろう山木屋の人々、つまり元々の八坂神社の氏子の方々を、この崇敬者という言葉を用いて表現するのは、八坂神社の神職として、八坂神社の一氏子として、非常に寂しく思います。ですから、本来の意味とは違えども、皆さんは八坂神社の氏子であり続ける、そのように私は思っております。そして、このような状況だからこそ、皆が八坂神社の氏子であると

いう意識を持ち、祭りをを行うという事にとっても大きな意味を持つと思います。

我々の避難生活が始まり、八坂神社の例祭は、役員さんや総代さん、世話人の皆さん等の関係者のみで、祭典を行うだけとなりました。避難中に関していえば、これはやむを得ない事であります。しかし、今後山木屋の避難指示が解除された際、この状態を続けていつてはいけません。何としてでも、以前のように盛大に祭りをを行い、神社に獅子舞を奉納し、氏子の皆さんが神社にお参りに来るという、当たり前前の状況にしなければなりません。先程も申し上げた様に、残念ながら震災以前の山木屋にはもう戻らないと思います。いくら除染が完了しようが、避難が解除になろうが、元々の山木屋に戻らなくては、それは復興ではなく、復旧に過ぎません。つまり、この山木屋にとって、復興とは限りなく不可能に近い事であります。これが現実です。

しかし、そんな中でも一日だけ以前の山木屋に戻る、これを実現する力が祭りにはあると思います。八坂神社のお祭りの日、この日だけは皆が山木屋に帰る。そして、以前のように家族みんなで神社にお参りをする。以前のように、境内で奉納される獅子舞を見る。子供たちは屋台の焼きそばやチョコバナナを食べ、くじ引きや型ぬきを楽しむ。これにより、故郷というものを忘れず、山木屋を離れようとも八坂神社の氏子なんだという意識を

持ち続け、いつか本当の復興に繋がるんじゃないかなと思っています。

山木屋地区にとって、かつて山木屋で暮らした人々にとって、氏神様とは、心の故郷であり、そして復興のきっかけであると信じています。

以上、本日の祭典に際しましての、私よりの挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。

(福島県 八坂神社 禰宜)

当り前のありがたさ

小野 日隆

今月も月次祭によるこそお参り下さいました。こうして毎月のお参りを欠かさずにお続け頂いております事まことに有難く、何よりお神様が喜んでおられる事と存じます。どうぞ、今月も皆様にとつてすばらしい一か月になりますよう重ねてお祈り申し上げます。さて、皆様方には、毎月、氏神様の御神徳やら年中行事やらお話をして来ましたが、今月はちよつと趣向を変えて、当り前のありがたさと題したお話をしたいと思います。

水は高い所から低い所へ流れます。当り前ですよね。今日は、この当り前の事、そしてその事がどれだけ有難いかというお話をさせて頂きます。この当り前という事は、人で言えば足で歩き、手で作業をし、口でしゃべる。日常何気なくする当り前の事です。しかし、このことが叶わない人も世の中には沢山います。体の機能に障害を持つ人が沢山います。実は私も昨年の三月に不覚にも脳出血に倒れ半年間の入院生活を余儀なくされました。

したが、後遺症として右手の麻痺が残ってしまいました。実際にこのような状況になって思う事は、「当り前のありがたさ」という事です。字を書くとか、リンゴの皮をむくとか、ポケットの中から小銭をつまみ出すとか今までは何も考えずに過ごしていた日常が、全く別世界になってしまいました。こうなってしまうと、極極当然、当り前の事がどれだけ有難い事か、どれだけ素晴らしい事かということを感じて毎日になったのです。今日は、この「当り前」について、その「当り前」がどれだけ有難いか、そんな話をさせていたいただきたいと思います。

私が、昨身体調を壊し、半年の入院生活の後、長年勤めた護国神社を退職し、御先祖様にご奉仕して参りましたこのお社の宮司としてご奉仕を始めたいきさつは就任当時お話しさせて頂きましたが、今日は改めて、発病以来半年間の、入院、リハビリの経験を踏まえ、そのことで学んだ事をお話しさせていただきたいと思います。

思いもよらない発病から、半年間の入院生活は私に多くの事を学ばせてくれました。不自由な体であくまでも前向きに必死にリハビリに励む入院患者、そんな人たちを、正に愛と忍耐とで治療、支援に当られる療法士の先生方、それを優しく見守られるご家族を見た時、人は皆決して一人じゃない、多くの支えによって生かされているんだ、みんなの御蔭

で生かされているんだ、何より神様の御蔭を、お力を頂いているんだということが実感できました。世の中では福祉福祉と声高に叫ぶ人が沢山いますが、どれだけの人が本当の事を分かっているのでしょうか、理解しているのでしょうか。私自身今回の一連の経験をして知る事、納得することばかりでした。車椅子に乗ってみなければ分かりません。杖をついてみなければ分かりません、目隠しをして歩いてみなければ分かりません。当り前が当り前である中で暮らせることの有難さは中々理解できるものではないと思います。私たちは、何気なく過ごしている日常の中にある、「当り前」という事を、そしてその「ありがたさ」を改めて考える必要があるのではないのでしょうか。当り前と言いましうか、普通の平凡な生活の中に、その日常の中に、有難さを歌った和歌を紹介したいと思います。

皆さんは橘曙覧という人を御存じでしょうか。越前の国、今の福井市に生まれた幕末の国学者であり歌人ですが、その曙覧の和歌で「たのしみは……」で始まる五十二首の歌をまとめた「独楽吟」という歌集の中からいくつかを紹介しましょう。

「たのしみは 妻子(めこ)むつまじく うちつどひ 頭(かしら)ならべて 物をくふ時」

「たのしみは あき米櫃に 米いでき 今ひと月を よしとするとき」

「たのしみは まれに魚烹(に)て 児等皆が うましうましと いひて食ふとき」

「たのしみは 朝おきいでて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見る時」

いかがですか。何気ない日常をさりげなく歌ったものですが、日常の、当り前の風景がほのぼのと、温かく伝わってきますね。こんな歌もありますよ。

「たのしみは とほしきままに 人集め 酒飲め物を食へといふ時」

「たのしみは 心をおかぬ 友どちと 笑ひかたりて 腹をよるとき」

独楽吟五十二首どの歌をとつても、何気ない日常の一風景ですが、曙覧の心の豊かさが伝わってきます。福井藩主の松平春嶽公に古典の師となるべく出仕を求められたほどの学者ですが「藁屋（わらのや）」と号した粗末な家を住まいとしお金や物は無かったが、誰からも邪魔されず好きな時に好きなことをして生きたのです。あの正岡子規に、源実朝以後歌人の名に値するものは曙覧ただ一人と激賞された熱烈な純忠愛国の士でもありました。

「潔き 神國風（かみのくにぶり） けがさじと こゝろくたくか 神國の人」

「大君の 醜の御楯と いふ物は かかる物ぞと 進め真先に」

「皇國の 御ためをはかる 外に何 することありて世の中にたつ」

どの歌も、敬神尊王の至情溢るる歌ばかりです。独楽吟の、当り前を感謝する歌とは趣

を異にする激烈な歌であります。そんな国士も家族団欒で食事が出来ることを感謝し、友人との歓談を喜び、咲く花に幸せを思う、正に「当り前」の有難さを日常の中で実感しそして満足するのです。元治二年（一八六五）二月二十六日に藩侯松平春嶽公自らが曙覧の家を訪れた時のエピソードを一つ。曙覧の家は、壁は落ちかかり、畳は擦り切れ、雨も漏りそうな茅葺の粗末な家でしたが、春嶽は「おのれは富貴の身にして、大厦高堂に居て、何一つたらざることなけれど、胸に萬巻のたくはへなく、心は寒く貧しくして……うしろめたく、顔赤らむ心地」がしたと述懐しています。このように曙覧は当代一流のインテリにもかかわらず、終生貧しく、書齋も土間にむしろをひいた狭い所でありましたが、分に安んじ、足るを知って、世に求めるところが全く無かったのです。数年前幸せの国、ブータン国王が来日した時に豊かさを量る指標としての国民総幸福量という言葉が話題になりましたが、正に曙覧の生き方そのものではないでしょうか。

ひるがえって私たちの周りを見渡して如何でしょうか。欲に目がくらみ、大事なものを忘れて、私利私欲に走る人がどれだけ多いことか。欲に絡んだ事件事故がどれだけ多いか。今こそ、豊かさとは何か、幸せとは何かを考え直そうではありませんか。何気ない日常の中に、当り前の中にある、豊かさを、幸せを実感してください。愛をもって相手を思いやる、

感謝の心を以て人に接する、そして常に感謝の言葉を述べましょう。そうすればきっと今の生活が、より豊かなものになると思います。「当り前のありがたさ」に感謝しましょう。これからお帰りになる時に、お神様にありがとうございます、家に帰ったら家族の方にありがとうございます、道で近所の方に逢ったらありがとうございますと言いましよう。それでは、これをもちまして月次祭にあたつての挨拶とさせていただきます。今月も、どうぞ皆様、お健やかであられて、穏やかな毎日が送られますようお祈り申し上げます。お氣を付けてお帰り下さい。今日もこうして皆様方と当り前の有難い時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。

(大分県 八坂社 宮司)

食前・食後の作法

宮田 修

かつて新聞やテレビでこんなことが伝えられたことがある。ある学校で母親が怒鳴りこんできたというのだ。その人は「私は、給食費を払っている。従って私の子どもは給食を食べる権利がある。食事の前後のいただきますやごちそうさまを言わせないでください。」と主張したというのだ。マスコミは、こんな母親が「出現」したと面白おかしく報じていた。この人は、食前食後に「いただきます」「ごちそうさま」を言うのかまったく理解していない。論外としか言いようがない。申しあげるまでもないが、「いただきます」「ごちそうさま」は、人間が生きるために奪った動物たちの命や食事を作ってくれた人への感謝の気持ちを表すものである。私は、日本人の素晴らしい伝統であると思ひ当然のことと疑うことはなかった。この当たり前のことを知らない人が現れたのには驚かされた。ところが神主の修行の中でよりもっと素晴らしい食事の作法を知ることになった。実に丁寧な作

法である。私は、恥ずかしながらそれまでまったく知らなかった。

食事の作法は、食前感謝から始まる。まず静座をする。静かに座るのだ。その後一拝をする。頭を下げるのである。そして一回手を打つ。一拍手である。

この後 和歌を歌う。

「たなつもの百（もも）の本草もあまてらす日の大神のめぐみえてこそ」と節をつけて唱えるのだ。そして「頂きます」と言って食事を始めるのである。この和歌は、江戸時代の国学者本居宣長が作ったものだ。「たなつもの」とは、元々は米のことであつたが後に五穀を意味するようになった。ここでは畑や田んぼでできる作物を表すと考えて良いだろう。作物やたくさんのお木や草は、空に輝いておられる日の神さまの恵みを受けているからこそ立派にできたのですよ。日の神さまの有難さを忘れてはいけませんよという意味である。感謝の気持ちをもちましようとお教えている。

食後も感謝することを忘れていない。今度は、端座——きちんと座りなさい。同じように一拝一拍手そして

「朝よいに物くふごとに豊受の神のめぐみを思へ世の人」と同じ本居宣長の歌を歌い、ごちそうさまと言って食事を終えるのである。「豊受の神」は、五穀がきちんとできるよ

うにとお役目を果たしている神さままで、伊勢の神宮の外宮に祀られている神さまである。食事を摂るたびに豊受の神さまの恵みを思い起こしなさいと諭しているのだ。

この作法に初めて出会ったのは、神主の学校に入り、初めてのスクーリングの時だった。通信教育では年に二回、のべ八日間学校での授業がある。ご神前で神主がどのように振る舞うのか実技を中心に教えてもらうのである。自分の神社でお祭ができなければ神主としての務めを果たすことはできない。中にはいわゆる社家の人もいてある程度知っている人もいるが、私はまったく何も知らない。必死であった。一生懸命授業を受けた。午前中の授業が終わり、昼食の時間になった。この昼食、決して大袈裟ではなく私は感動してしまった。当番の人が一人ひとりの机にお弁当を置き、お茶も入れる。その後生徒全員が着席する。一言の私語もない。実に静かである。背筋を伸ばして座っている。もちろん私もそれに倣った。生徒の準備が終わったところで、当番が先生の控室に向かう。当番を先導に先生方がお座りになる。一呼吸あって、当番が大きな声で静座 一拝一拍手と言い、全員が頭を下げ、手をつつ。パンという音も実に良く揃っている。そしてまた当番が「たなつもの」と先唱する。その後全員で「たなつもの百の木草」いただきますと言ってお弁当を食べ始めるのだ。箸を進める間、誰ひとりとして話をしない。静かに箸を進める。全

員が食べ終わつたのを見計らつて、また当番が大きな声で、端座　一拝一拍手と言ひ、その後「朝よいに」が始まるのだ。それまで私は、「いただきます」「ごちそうさま」を単に習慣として声に出していたようだ。本当に心の底から感謝していなかったのではないかとその時、大いに反省させられたのである。

人間は、所詮動物である。常に自分の心に語りかけ、自分の行いを正していないと動物の中にある野生が目覚めてしまう。すぐに不遜になつてしまう。先人は、そう考えたのだらう。食事のたびごとに「感謝」の心を思い起こさせる作法をとり入れたのだ。形を整えることで心が芽生えろと考えたのだ。私に限つて言えば、あのスクーリングの昼食を契機に食事に対する考え方が大きく変わったと思う。それまでは極端に言えば、食事は単に飢えを癒すための食糧だった。今は違う。この料理を作つてくれた人は誰だらう。この魚を捕つた漁師は？また調理してくれた人の苦勞は？さまざまに思い巡らしながら食事をするようになったのだ。それこそが感謝することだと思えるようになったのだ。以前より自分が豊かになつたように思えるようになった。有難いことである。

「旧宮家の皇籍復歸」の声を挙げよう

石 塚 智 康

天皇陛下におかせられましては、ご即位から二十八年の間、宮内祭祀は厳粛に執り行われ、ただひたすら国家の安寧と国民の幸福・世界の平和を祈念され、御心を砕いてこられました。

とりわけ戦没者の慰霊には格別のお気持ちが生かされるものと拝せられ、パラオ・サイパン島を始めとし慰霊の旅を続けてこられました。

また大規模自然災害による被害をお聞きになられるとお見舞いに訪れられ、被害者を励ましておられます。

更には毎年の植樹祭・国民体育大会に御臨席の際には各地の福祉や産業の実情など親しくご視察になってこられました。

天皇陛下には八十二歳、皇后陛下には八十一歳のご高齢になられ、今でも宮殿や御所で

のご公務は昨年でも二五〇回を超え外国のご訪問、国内各地の行幸啓は七五回を超え、宮内庁はこの度両陛下のご年齢にふさわしいご公務の在り方を検討し、見直しを図られ、お取り止めや皇太子殿下にお譲りになるものを整理されることになりました。

そのうち私たち皇居勤労奉仕団への御会釈もお取り止めになるかもしれません。まあそれは両陛下のことを拝すれば致し方ないでしょう。

長い御在位を願うことなら当然でしょう。

さて、十日ほど前に参議院議員選挙が行われました。

与党は憲法改正は公約には言っていませんが、野党は憲法改悪反対を叫んでいました。国会議員の三分の二が揃えば憲法改正の発議はできます。

しかし具体的に議論一致は困難を極め、法案提出までにはかなり時間が掛かります。また国民投票でどうなるか判りません。

イギリスの様に世界の大方の見方を狂わせ首相を辞任に追いやったくらい、国民投票の一票で動く現実を知りました。

ですから憲法改正を叫ぶ前に、日本のために早く改正して頂きたいのは、

『日本国天皇の皇位継承を早く決めて皇室典範改正』をして頂きたいのです。

現在の皇位継承は皇太子殿下・秋篠宮文仁殿下・秋篠宮悠仁殿下の順で継承なされるのですが、将来に亘り安定した皇位継承を定めておく必要があります。

わが国は先の大東亜戦争で敗れて、GHQから昭和二十二年十月四日付けで「皇族の財産上における特権の剥奪」指令により、十一宮家五十一人が皇籍離脱を余儀なく強制的に降下させられました。これは旧宮家を皇族として認めてしまうと、将来日本国民がまた天皇忠誠心を結集して戦争を起こす事、を恐れての皇族潰しに他ならなかったのです。

このとき十四宮家だった昭和天皇の弟宮、秩父宮・高松宮・三笠宮の三宮家のみ残して十一宮家、伏見宮・山階宮・賀陽宮・久邇宮・梨本宮・朝香宮・東久邇宮・北白川宮・竹田宮・閑院宮・東伏見宮に、当時の宮内府次長は「万が一にも皇位を継ぐべきときが来るかも知れないとの御自覚の下で身をお慎みになつて頂きたい」とお願いされています。

この言葉を旧皇族の方々は重く受け止められて、その中の竹田宮の竹田恒泰氏は、野田総理が女性宮家を提案した時、反対のお考えでこう書いておられます。

「女性宮家についてはほぼ全員が違和感を持っています。そして皇統の安定的維持という事についてみな真剣に捉えており、皇位は伝統に則り男系により継承されるべきと考えられている方々が全員です。」

また、いざ皇籍復帰を求められる可能性もあるという事は、それなりに責任を果たす覚悟をしている方も沢山居ます、私の調べた限りでは、旧皇族の一族には 四宮家に未婚の男子が九人居ます。そのうち悠仁親王に齡の近い未成年が四人居ます。

結婚した若い夫婦も数組居ますので近いうちに何人もお子さんが生まれるのではないかと期待しています。」と書いていらつしやいます。

また三笠宮彬子女王殿下は「女性宮家創設には違和感があります。男系で続いている旧皇族の方々にお戻り頂くとか、現在ある宮家を養子として継承して頂くとか、他にも選択肢もあると思います」と発言されていらつしやいます。

結婚を控えた成人皇族の最年長の方の発言は重いものがあります。

正にこれが正しいものと受け止めます。

国民の総意に基づかないで強制的に臣籍降下させられた、皇統の血を引いていらつしやる男系男子の旧皇族の方々の皇籍復帰が最も正しい皇位継承の方策です。

旧宮家のうち継承に相応しい方々に皇籍の付与をお認め頂き国会で決議、皇室典範改正して安定した皇位継承がなされるよう願う者です。

その為には一人や二人で声を出していても届きません。神社界の皆様もこれから社頭で

お祭りで種々な機会で『旧宮家の皇籍復帰を』と広く呼び掛けて戴きますようお願い申し上げます。

これが広く国民的意思に挙がりますようお願いしています。どうぞご理解ください。

共に声を発しましょう よろしくお願い申し上げます

ありがとうございます。

(鳥取県 山根神社 宮司)

神宮大麻をおまつりしましょう

―天照大御神の有難さについて―

後 藤 大 志 郎

はじめに

皆さまおはようございます。

本日はご多忙の中、八幡神社の世話役会にご出席いただき、誠に有難うございます。ただ今、自治会長の皆様に、八幡神社・世話役の委嘱状をお渡しいたしました。

八幡神社の維持運営は、神職、総代、そして世話役の皆様の協力、ご尽力により行われております。

この度は、世話役としてのお勤め誠に苦労様ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。

この後、総代会長や事務方から、世話役としてのお仕事についてご説明やお願いをいた

しますが、その前に、私から「神宮大麻（伊勢神宮の御神札）」についてお話をさせていただきます。

1 神宮大麻とは？ 天照大御神の御存在とは？

伊勢神宮は、日本全国をお守りくださっている、日本人の総氏神さまです。

神宮大麻（伊勢神宮の御神札）は、年末になると毎年、全てのご家庭で受けて頂くことになっていきます。一体、八百円でお願いしています。

ところで何故に、神宮大麻を全国、全てのご家庭で受けて頂くのでしょうか？

天照大御神は、

「太陽神」――万物を育み慈しむ太陽にたとえられる限りなく貴い神様です。

また、「皇祖神」――日本国の中心である皇室の御祖神です。

大御神が「太陽神」であられること、「皇祖神」であられることは、多くの国民が良く知っていることです。

また、伊勢神宮が日本全国をお守りくださっている、日本人の総氏神さまであることも、多くの国民が知っていることです。

しかしながら、「どうか神宮大麻をお受け下さい」「天照大御神をおまつりください」と

お願いするのですが、神宮大麻の頒布数は伸び悩んでいる、減少傾向にある、というのが現状です。

「神社の御神札は一つでいいんじゃないですか」と言われることが度々あります。

また、「八幡神社の御神札は地元の神社だからお付き合いするけど、どうして伊勢神宮の御神札まで買わなければならないのですか」

と言われることも良くあります。

伊勢神宮は全国の神社の中で特別な神社であること、天照大御神が至尊至貴の神様であること等々をご説明するのですが、知識としては聞いていただけても、実感としてはなかなか分かっていただけないというのが実情です。

そこで、これから皆さんと一緒に、

それでは天照大御神の「ご神徳」は何であり「御神恩」は何なのか。

すなわち、「天照大御神の有難さとは何なのか」。

平たく言えば「大御神の御利益は何なのか」、「大御神をおまつりすれば、私たち日本人にとってどんな良い事があるのか」、ということを考えてみたいと思います。

2 「美しく貴い国・日本」

◎皆さんにお尋ねします。

皆さんは、「日本の国が好きですか？いかがですか？」

「日本は良い国である」、「素晴らしい国である」と思いますか？

それとも、「日本は悪い国である」、「恥ずかしい国である」と思いますか？

どうしてこのような事をお尋ねするかと言うと、

このことは、天照大御神の「御神徳・御神恩」が何であるのか、「大御神の有難さは何なのか」ということと大きな関係があると考えるからです。

皆さん、私は日本の国が大好きです。

皆さん、日本は「素晴らしい国である」「美しく貴い国である」と私は思っています。

【国土】 緑豊かな島国。四季があり温暖で、暮らしやすい国土。

【国民】 温和、勤勉で、礼儀正しい国民。

【歴史・伝統・文化】 三千年の悠久の歴史の中で育まれてきた優れた伝統と文化。

【美しく貴い国柄】

日本こそは、世界中で一番、平和で穏やかな、「浦安の国」である。

日本は、国民が一つの家族のように、仲良く助け合つて暮らすことの出来る、「浦安の国」である。

この「浦安の国・日本」の中心には、常に、国民を吾が子のように慈しみ愛される歴代天皇の御存在がありました。

そのような天皇を国民は親のように慕い、天皇と国民は固い絆で結ばれ、君民一体となつて、家族国家、大木国家、道義国家といわれる国を造り上げてきました。

◎もう一つ、東日本大震災の時の出来事を思い出してみましよう。

5年前の東日本大震災の時に、日本では略奪や暴動が起こることなく、皆が忍耐強く秩序を守りました。

自分自身も被災者であり、自分のことさえ精一杯の状況にありながら、お年寄りや弱い人たちに思いやりの手を差し伸べている姿を見て、世界中が感動しました。

そして、あの時、外国に住んでいる日本人は、その国の人達から、

「日本人はどうしてあんな行動がとれるのか」と口々に質問されました。

ところが、質問された日本人は、

「そうするのが日本人だから」とか、「日本人は昔からそうだから」などと答えるのがやつとで、上手く説明できなかったということがありました。

いかがでしょうか。

同じ質問を受けたら、皆さんならどのように説明されるでしょうか。

実はここにも、天照大御神の「御神徳・御神恩」「有難さ」を考えるヒントがあるのではないかと思えます。

3 天照大御神の「御神徳・御神恩の有難さ」

◎それでは天照大御神の「御神徳・御神恩」、分かり易く言えば、私たち日本人にとっての「有難さ」「御利益」とは何なのでしょう？

一言で言うところ、それは、

「日本という美しく貴い国」を私たち日本人にお授けくださったことである。

このことこそが、全ての日本人に対する天照大御神の「御神徳・御神恩」であり、「有難さ」である。

それ故に、私たち日本人は、全国津々浦々の家庭で神宮大麻をおまつりして、大御神に感謝の祈りを捧げたてまつるのである。

そのように申し上げたいのであります。

◎「美しく高貴な国・日本」、「浦安の国・日本」。

その中心には常に、「歴代天皇の御存在」がありました。

そして、「天皇を戴く国・日本」、その大本をお定めくださったのが天照大御神であります。ほかならぬ大御神こそが、

「地上の国・日本」を「天上の国・高天原」のような素晴らしい国、立派な国にするために、大御神の血筋を引かれた方、大御神と同じ御心を備えられた方、天孫・瓊瓊杵尊を日本国の統治者として差向けられたのでした。

そして、「天壤無窮の神勅」を授けて、

「天と地が窮まりなきものであるように、天孫の御位と日本の国は永遠に栄えていくであらう」と祝福されたのであります。

これ即ち、「天孫降臨」の大御業であります。

まとめ 「大御心を仰いで」

◎「天照大御神」なかりせば、「天皇を戴く国・日本」はあり得ませんでした。

◎「天皇を戴く国・日本」なかりせば、「浦安の国・日本」、「美しく貴い国・日本」はあり得ませんでした。

◎そして、「浦安の国・日本」、「美しく貴い国・日本」なかりせば、

私たちが日々享受している平和で豊かな暮らし、日本人みんなが日々生き生きと努め励むことの出来る社会、それはありませんでした。

◎私たちは、天照大御神の御神恩に、天皇陛下の御聖恩に、心からの感謝を捧げたいと思います。

そして、その大御心にお応えして、より良い国づくり、「浦安の国づくり」に更に励んで参りたいと思います。

◎最後に、世話役を務めて頂く自治会長の皆様にお願いたします。

① まず、「日本がいかに素晴らしい国であるか」、「立派な国であるか」、地域の皆さんと大いに語り合って下さい。

②　そして「日本という素晴らしい国を授けてくださったことが、天照大御神の御神徳・御神恩であり、有難さである」、そのことを皆さんに話してあげて下さい。

③　その上で、「それぞれのご家庭で神宮大麻（伊勢神宮の御神札）をおまつり頂くよう」お勧め下さい。

（鹿児島県　岩川八幡神社　宮司）

神の恵みと祖先の恩とに感謝

宮崎 貞臣

四月十四日に発生した「平成二十八年熊本地震」で被災されました皆様に対しまして、衷心よりお見舞い申し上げます。

私が、奉仕致しております福岡県は筑後地方の三島神社又は、兼務神社も鳥居のズレ、灯籠の倒壊等被害が出ておりますが震源地付近の被災されました方々の事を思うと当社の被害は、被害に入らないほどのです。

又、東日本大震災でこの東北の地は、大変な被害を受けております事衷心よりお見舞い申し上げます。

さて私達が、愛してやまないこの日本という国は、古の昔から自然災害で多くの人的或いは物的被害を受けてきました。

我々の御先祖様は、自然と共に共存共栄して生きてこられるなかで、自然の脅威に恐れ

崇め暮らしてきたことだと思ひます。人間が、

自然の中で生きて生かされていることをすぐ忘れてしまひがちですが、昔も今もそのことには変わりありません。

人は生かされて、そして、命あるものには必ず終わりがある。この世に、今生きていること自体が奇跡であり、神様の恵みであり同時に祖先がいなかったら、自分自身がこの世に存在すらしていなかったのです。

私は、神主の家に生まれはしましたが、次男でしたので兄が神主を継ぐと思ひ育ちました。

父が、他界して宮崎家の本業（家業）を継ぎ十二年、干支が一周してしまひましたが平成十六年九月二十六日 父明大人命十年祭（年祭 平成二十六年九月二十六日 祭主 宮司 宮崎貞臣）、平成十七年一月十四日母方、祖父幡掛正浩大人命十年祭（年祭 平成二十七年三月二十九日 母 和子 長女 紗菜 参列）

私にとって、宮崎家の家長、幡掛家の家長の十年がすぎ、やっと喪があげた気持ちになり書けるような氣になりました。

どこから書けばいいのかわからないが、入口は神葬祭である。

神道の家でしか行われなしましてや神主になればいいというものでもない（神道の家でも特殊な家）。

ご先祖の年祭を経験し、ふと気がついた。

宮崎信敦大人命のご霊爾に水沼足根信敦命？意味がわかりませんでした。

父明が、亡くなる前に松本値臣氏に依頼して現代語に直した、宮崎家 家譜

一、始祖（もとつおや） 国乳別皇子

二、国乳別皇子是れ水沼別の始祖なり。倭名鈔に曰く「筑後国三潞郡美無万（みむま）」
その後は、水沼を姓とし広池を氏とする。西牟田氏入部の後 氏を宮崎と改め大宮司となる。

意味がよく理解できませんでした。

とにかく悪い頭では考えがつかないので、体験をもとにすればいいのではと考えました。
父明の魂は今どこにいるのか？

墓？

家？

宮崎家ご霊前？

ここだ！ここにいます！何年いるんだろう？大体、五十年ぐらいかな？いや百年祭かな？
その後は氏神様に鎮まるのでは？

日本人の神観念・死生観はよくできていることに気づいた。
だから何なのかといわれればそれまでですが

神様をそして、ご先祖を信じた結果見えてくる光が真実。

三島神社の御祭神事代主様を伊豆の三島大社よりかんせいされる以前よりお祭りして合祀したご祭神は、国乳別命（景行天皇の皇子）水沼ノ君の正体である。

御神徳に感謝、大神様の御開運をお祈り申し上げ、神明奉仕に御神威の発揚に勤しみま
す。

（福岡県 三島神社 宮司）

となり

染谷 淑子

みな様、今日はご参拝いただきましてありがとうございます。何日か前にも駅で地震があり驚きました。昨年の四月二十五日のネパール大地震の際には天照神社合祀浅間神社の例祭が執り行われた際に義捐金の募集を、となりの村々の神社の総代さんのご協力をいただきまして取りまとめる事ができました。早速、ネパール大使館へ、宮司と各協力神社の総代さんでお届けいたしました。その後、おもいがけず駐日ネパール大使公邸にて義捐金をお届けした各団体・個人の方々と共に食事会にお招きいただき、皆様と楽しく歓談してまいりました。日本の駐ネパール大使ご夫妻も日本に帰国されており、皆様への感謝の言葉をいただいて宮司と各協力神社の総代さんと出席の皆様一同恐縮した事でした。「少額で申し訳ありません」と申し上げたところ、「額ではなく日本人の心をいただく事が出来て感謝している」と大使閣下がお話くださいました。また、「地震の多い日本の国の人

たちだからネパールの人々の大変さがよく理解できて、このように、はげましてくださって大変うれしい。」と述べられました。

幸いにも私どもの地域は永らく平和に貧しく暮らしてまいりました。私どもの古老のおはなしによると「となり蔵がたてば、こちらは腹がたつ」と言って、自分より他人の富や福は気にいらぬ風潮があります。しかし、この地域は全体に貧しい地域であつたろうと「安心」しています。貧しい地域のほうが苦しさやつらさが多いだけ人の事情も理解するのではないでしょうか。

思い起こせば平成二十三年三月十一日、三時四十六分に発生した東日本大震災の際には千葉県の海側にも被害があり、又、利根川沿いのとなりの町も地盤沈下や屋根の被害が多くみられました。まことに申し訳ない事ですが、古来よりこの地域は大きな事のないところで神社は石灯籠が倒れたり、一社の御殿が氏子の住む地域の方向に位置をずらした位でした。まことに被害にあわれた地域の皆様には申し訳なく、胸が苦しくなる毎日でした。その中で、宮司様の判断でお正月のご神饌と奉納であがつた御餅を干して碎いた「あられ」と食用油・トイレットペーパーを放射能の影響で交通封鎖になる一歩前に被災地にお届けでき、喜んでいただけました。あの年の六月ころはまだ余震が続いていて募金の実施はで

きませんでした。十月の諏訪神社の例祭では多数の氏子の皆様が義捐金を喜んで下さり日本赤十字社へ送付いたしました。

日本は地震の多い国柄です。日本の中で安全なところがないかと聞いてみましたが、日本中全部に活断層があるので「あきらめるように」といわれました。私たちは今を大切に生き、暮らしていきたいと願いますが、今、何事もなくても明日はなにがあるか予測はできません、心得て生活いたしましょう。今日の生活に先人の知恵や教訓をどう生かしていけばよいでしょうか。身近な例では電気の契約量を減らしてみました。ブレーカーが落ちて電気が一定量以上つかえなくなりました。戦後の日本はとなりの朝鮮動乱の軍需の前はいつもそのような状態で雪の日などは大変でした。今日のこのときは、明日に続く約束は何人にも保障されてはいないのではないのでしょうか。

今年も昨年に引き続き六月三十日の「浅間さま」ではとなりの村々の総代さんのご協力により四月十四日以降の熊本地震の義捐金を募集いたしました。まことに有難いことに多数の小さいお子さんがおずおずと恥ずかしそうに義捐金の箱に手をさしのべてくださり、協力くださる姿に、お育てになられたご両親様をはじめご家族様のご家庭における様子をさぞかし、浅間神社の姫神様も御子神様を育て、愛しむようにごらんになられたのではな

いかと拝察いたしました。このような美しい日本の国のお祭りでのありさまと、地震と風水害の多い自然環境のなかから、何度もちあがり希望をもって、太陽ののぼる朝日に手を合わせる日本人の「こころ」は、今、国の内外を問うことなく世界の困難に立ち向かっている人々にも向かっています。その事を日本人に自覚させてくれたのは、阪神・淡路大震災や東日本大震災によせられた世界中の人々の「こころ」だったのではないのでしょうか。「となり」に向けられた「日本人の心」は、また、日本を「となり」と思う「こころ」になって反ってくると思います。

ありがとうございます。

(千葉県 諏訪神社 欄宣)

天皇の四方拝

今井 雄

皆様、新年明けましておめでとう御座います。新年を迎え種々の行事が全国津々浦々において取り行われています。初詣という一般的な儀礼のほか、四方拝や歳旦祭など宮中の儀礼、共同体の儀礼、年賀、お年玉など家庭での儀礼と、極めて多様であります。

ここに参詣されました皆様と共に只今、当神宮の歳旦祭が斎行されましたこと、重ねてお祝い申し上げます。

さて、皇居におかれましては、この歳旦祭に先立って斎行されますのが四方拝であり、宮中で一番最初に行われる祭祀であります。しかも天皇陛下お一人でなされる宮中で最も重要な祭祀の一つとなっております。これら宮中での祭祀は、秘儀とされ、一般人はおよそ知る必要もないものだと言われ、この四方拝は、天皇陛下自らの手でなされる秘儀中の秘儀とされる祭祀であります。

天皇陛下は、自ら皇居において稲作をされ、その姿を開放されるなど「開かれた皇室、国民とともに」という御心からこの宮中祭祀までがサイトやネットに掲載されるようになり、今や、全世界に発信されています。そんな中、日本国民として「是非、知っておくべき大切なこと、ありがたいこと」として、年頭に当たり、この四方拝について話したいと思います。

宮中では、大変多くの祭祀が行われていることから、御代拝ごだいはい（代理人が祭祀を代行すること）が認められております。しかし、この四方拝だけは、このご御代拝が認められていません。御代拝が認められないということは、御不例ごふれい（天皇陛下の体調が優れないことや天皇陛下が喪に服しておられる期間）などの場合に限られ、四方拝が斎行されないということでもあります。

この様な天皇陛下自ら行われる四方拝の目的とは、何なのでしょうか？

そうです、国家・国民のため、天皇陛下は、元旦の早朝、その年の属星ぞくしようち、天と地、四方の神々、山陵さんりやう（天皇陵）を拝み、年の災いを祓い、豊作を願う儀式をされているのです。この儀式こそ四方拝であり、飛鳥時代に始まり、平安時代に正月の祭祀として定着し、現在まで永遠と続けられているのです。まさに国民の元首として国民のためにこの年の国家、国民の

安泰、五穀豊穰などをお祈りされています。

時は、元旦の早朝、午前五時三〇分（旧暦元旦の寅一刻とあり）、所は、皇居の宮中三殿の西側にある神嘉殿の南側の庭にかがりを焚き、屏風を立てて地面に畳を敷くことで作られた御座ござです。なんと寒中の庭、しかも畳という所で、その時を待ちます。

因みに宮中三殿とは、皇居の吹上御苑に祭祀されている三つの神殿をいい、中央に賢所（天照大神を祀る）向かって左に皇霊殿（歴代天皇の霊を祀る）、向かって右に神殿（八神・天神・地祇を祀る）となっています。

一方、天皇陛下にあられては、大晦日の夜、御湯みゆで玉体ぎよくたい（天皇陛下の身体）を潔斎（清められ）、「黄櫨染御袍こうろぜんのごほう」の装束を召され定刻、寒中の庭にお出ましになられ、御座に着かれるのです。

「黄櫨染御袍」とは、天皇のみが着ることを許される特別の装束で平安時代から用いられています。日の光が当たると太陽のように輝くといわれている特別なものです。

厳かに最初は、北方の天に向かつて、属星を七回唱え、再拝に続いて呪文を唱えられた後、四方の天神地祇（天の神々及び国の神々）、それぞれの方角を再拝され、最後は、山陵（天皇陵）を再拝され、儀式は終わります。

属星（属性とも書く）とは、北斗七星の七つの星に年の干支が割り振られていて、その星の名字を唱えるということであり、再拝とは、深く拝む動作を二回繰り返すということです。因みに本年は、申年ですから廉貞星^{れんていせい}ということになります。

四方拝の起源は、明確には判っていませんが、今から一、四〇〇年前の皇極天皇の御代に「雨乞いのために四方拝を行った」という記述が日本書紀に残っております。

当然のことですがこの四方拝は、明治四十一年に制定された皇室祭祀令により戦前まで国家行事として行われておりました。終戦後は、この皇室祭祀令が廃止され、天皇陛下の私的な祭祀として明治時代の作法に準拠して続けられています。

東北と九州の被災地に赴かれた天皇陛下、被災者の前で膝をつかれてお言葉をかけられているお姿に、この四方拝のお姿が目に見えます。本年の国家、国民の安泰と五穀豊穡を祈念しつつ、年頭のご挨拶と致します。ご静聴ありがとうございます。

（岐阜県 朝日大神宮 宮司）

自国の神話を学ぶ

滝沢 正太郎

今年の上半期の罪穢れを祓い、これより迎える下半期の無事、健康を祈る夏越の大祓式、これにて滞りなく納めさせて頂きます。ご参列の皆様におかれましては、これより本殿前に備えてございます茅（ちがや）で作られた茅の輪をくぐって頂きますが、その前に少しお話をさせて頂きます。

毎年この時期、全国各地の神社で茅の輪くぐり神事が行われますが、なぜ茅で作られた輪をくぐるようになったのでしょうか。その由来は、奈良時代に編纂された風土記という書物に書かれております。

八岐大蛇を退治した素戔嗚尊はご存知でしょうか。この素戔嗚尊が旅をしておられる途中、蘇民将来、巨旦将来という兄弟のところへ宿を求められました。弟の巨旦将来は、裕福であったにも関わらず、宿を断ったのに対し、兄の蘇民将来は貧しい乍らも喜んで宿を

提供し、厚くもてなしたそうです。素戔鳴尊はその御礼に、「もし、悪い病が流行ることがあった時、茅（ちがや）で輪を作り、それを腰につけていれば病にかからない。」と教えられました。数年後、疫病が流行しました。巨旦将来の家族は病に倒れ、絶えてしまいました。茅の輪を腰に付けて災いから身を守る風習が出来、江戸時代になると次第に輪が大きくなり、いつしかその大きな輪をくぐって災いを除けるという神事になった訳であります。すこし話は逸れますが、三重県の伊勢に行きますと、多くの家の玄関に年中注連飾りが付けられています。その注連飾りには札が付いていて、「蘇民将来子孫家門」や「笑門」と書かれています。これもこの神話が元となった魔除け、災い除けのひとつなのです。

このように、現在行われている様々な神事や風習には、全てにその由来となる神話や言い伝え、歴史がございます。一つ一つの起源を知ることによって、それに臨む際の気持ちも変わって参ります。

この間、日本の大学生の団体が参拝に来られました。その際に案内をした職員から聞いた話を紹介します。

「皆さん、天孫降臨や天の岩戸開きの神話はご存知ですか。」

シーン。誰一人として手を挙げません。

「じゃあ、稲葉の白ウサギや、八岐大蛇の神話は。」

ポツポツと三、四人が手を挙げます。

「では、アダムとイブの話、ノアの箱舟の話は知ってますか。」

ハイイ。なんと、ほぼ全員が手を挙げました。

どうでしょう。大学に通い、高等教育を受けている日本人の学生です。自分達の生まれ育った國の神話を知りません。しかし、外国の神話はよく知っているのです。

「ではこれから先、自分たちの生まれ育った國の神話を学ぶ必要があると思いますか。」
シーン。そしてポツリと一言。

「現実的でない。」

悲しいですが、まさにこれが現状なんです。

神話は現実的でない、科学的でないから学ぶ必要がない…、なら外国の神話は現実的で、科学的なんでしょうか。アメリカでは大統領の即位式では聖書に手を置き宣誓します。それ程大切に行っているし、学んでもいます。他の國でも然りです。皆自國の神話や教えを大切にしています。

誤解のないよう申し上げますが、この学生達は何も悪くありません。自国の神話や正しい歴史を教えず、外国の文化や歴史ばかり教えている教育そのものが原因なのです。これはなにも学校に限ったことではありません。地域や家庭教育でも同じことが言えます。

例えば二月十一日の建国記念の日。もとは紀元節として初代神武天皇が即位されたこの日を建国記念の日として祝う休日ですが、一体どれ程の先生が、どれ程の親が、この休日の意味を教えているでしょうか。教えるどころか、知らない大人が多いのではないのでしょうか。

有名なイギリスの歴史学者アーノルド・トウインビーは言いました。

「中等教育を終える頃までに、自国の神話を学ばなかった民族は例外なく滅ぶ。」
えらいことです。

教育制度を変えるのは大変ですが、地域や家庭での教育を変えていくのは可能です。地域では神社やお寺で、家庭では親から子へ：折にふれ神話や歴史、伝統文化を教えることで、自分の生まれ育った國を愛する心「愛国心」を持った子を育てていきましょう。

補足になりますが、先に申し上げた神職が、別の日に国際大学に通う外国の学生達を案内した際、同じように質問しました。自国の神話は勿論、稲葉の白ウサギ、天の岩戸開き

といった日本の神話も知っていたそうです。現在は国境が無いと言われる程、国際化が進んでいます。その中で、自国の神話や文化を紹介することが出来ない人間が、どうして他国の人間と交流を深めれるのでしょうか。国際化に対応させようとして、我が子を、日本語もままならない内から英語教室に通わせていませんか。もちろん英語を学ぶのも大切な事ですが、まずはしっかりと学ばせた土台づくり…、真の国際人になるためにも、小さい内に日本のことをしっかりと教えるべきではないでしょうか。

大げさな話ではありますが、日本が滅びない為にも、またこれからの子供たちのためにも、まずは私たちが自国の神話や正しい歴史を知り、伝えていきましょう。

それでは、茅の輪の前にご整列下さい。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

女史二人

小林 晴 美

本日、和田岬婦人会の皆様には「地元探訪」というテーマのもと、最初に当三石神社をご参拝頂き誠にありがとうございます。

当神社は、神功皇后様をお祀りしてございますが、皇后様はご聡明でお姿も大変美しく、かつ雄々しいお方であらせられました。熊襲平定のため九州の地にご滞在の折、夫である仲哀天皇様が急逝されました為、天皇のご遺志を継いで、熊襲がはむかうのは朝鮮半島の各国の後ろ盾があるからだとし、臨月の身重でありながら自ら大元帥となって大軍を率い朝鮮半島に渡り、新羅・高句麗・百済を征服し我が国の勇威を海外にまで示されました。

これ程の女性は、皇后様以来今日に至るまで我が国にはいらっしやいませんが、近代日本のパイオニアとも称される女性二人のお話をしたいと思います。

まず一人目は津田塾大学の創始者、津田梅子女史です。彼女は明治四年、わずか七歳の

時に日本初の女子留学生としてアメリカへ渡り、十一年間をすごしています。この留学は、当時の黒田総理大臣が女子教育に熱心で、「一国の将来を築くのは、母親の見識にある」との思いから留学が日本の女性の為に役立つと考え、政府高官らが率いる欧米巡察使節団の中に、女子五人が留学生として加えられたのでした。その中の一人が津田梅子女史でした。

留学を終え帰国した彼女は、当時の日本の女性達が、自我の目覚めもない数え年十四歳の頃から無理やり嫁がされ、夫の言いなりで朝から晩までこまねずみのように働かされ、子供を産み男性に都合の良いように育てるだけの母親となる一生を送っている姿を見て、これが本来の女性の生き方ではないと強く思いました。男性とも自由に意見を交換し、お互いに助け合い、男性とは違う女性の立場から発言をするアメリカの女性のように、男性と対等な地位を獲得する為には、女性の解放をもめざした女子の高等教育・職業教育が必要であると考えました。

そこで留学の経験を生かし、英語を教える学校をつくり、英語を修得させて英語を手段に働く場を与え、経済的に自立し社会での発言力を持って男性と対等な立場に女性を引き出そうとしました。

明治三十三年、梅子三十六歳の時、現在は「津田塾大学」となる「女子英学塾」を創立し女子教育の先駆者となりました。

「教育は立派な校舎で育つものではなく、個人的接触による師弟の人格の与え合うものから育つものだ」と開校の挨拶で述べた通り、ごく普通の日本家屋を校舎としてわずか十人の塾生でスタートし、学生は学力に応じて個人授業に近い形で教えを受けました。

梅子は、十二人の姉妹弟の次女でもあったため小さな妹弟の面倒をよくみた人で、明るくオープンな性格の上、私利私欲が無くとても質素で、アメリカ生活が十一年もあったのに普段は地味な着物を着ていたそうです。そういうお人柄を慕い口伝えて全国から生徒が集まり、七年後には生徒数が百四十人となり塾は益々発展し続けました。

梅子は、アメリカ留学中に洗礼を受けたキリスト教徒ではありませんでしたが、授業で聖書を文学として必修科目にはしましたが、宗教として講義することはなく入信も進めませんでした。信仰に関しては、「神の恩寵の欠如を感じることもあるが、神に身を委ねるのは心地良いことだし、もし信仰を失い無神論者になったら、この世はどんなに空しい暗いものになるだろう」と言っておられます。

そして梅子女史が一番素晴らしいのは、「英語をしゃべることは何でもない。日本人で

あることを忘れるな、日本の精神を忘れるな」と教えたことです。

結婚については、日本の男性は妻に従順を求めるだけで、少しの愛情も尊敬も持たないのだから結婚しなくてもかまわないと、女子の高等教育に終生全身全霊を傾けた人でした。もうお一人は、女性の権利獲得のため生涯奔走し続けた思想家であり、作家であり、評論家でもある女性解放運動家の平塚らいてう女史です。

らいてう女史は、梅子女史より二十年程遅く生れていますが明治時代の女子教育が、女は女らしくということで行儀作法中心の良妻賢母教育であることに反発し、そのような修身の時間をボイコットするという学生でした。

らいてうも、梅子同様当時の女性達が、男性にただ隷属して生きるだけで人間性が失われていることを憂い、人間として個人として目覚め、その自我を全的に開放する精神革命が必要であると考えました。

そこで明治四十四年二十五歳の時、同志を集め女性達だけの手で作った女性専門の雑誌『青鞥』を発刊いたしました。この事は、当時としては画期的な出来事で世間を驚かせました。

その創刊の辞で、らいてうは、

元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。

今、女性は何である。他によつて生き、他の光によつて輝く病人のような蒼白い顔の月である。

私共は隠されて仕舞つた我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。

（後略）

と書きました。この言葉は当時の世間に大きな反響を巻き起し、永く人々の記憶に残ることとなりました。彼女は元始の女性を太陽に例え、明治時代の女性を月に例えたのであつて、母系社会の崩壊に伴い、家父長制が出現して男子の専制と共に婦人の隷属が始まり、次第に婦人の人間性が失われていく現実を、打破しなければならぬとの思いから書いたのです。

この『青鞥』出版により、彼女は新しい女として世間の注目を集めてから、益々女性の権利獲得のため活動の場を広げていきました。

結婚については、妻には財産の所有権もなければ子供に対する法律上の権利も持っていない（大正の始め離婚した場合、子供は夫側に渡して妻は家を出なければならなかった）夫の姦通は罪なく、妻の姦通は罪とされた。そのような不条理な制度に服してまで形式的

な結婚はしたくないと、らいてうは愛する人と共同生活を始めました。

やがて彼女は二児の母となり、自己の内に母性を実感すると同事に、母性が尊重されていない現状の生活に苦悩し、「物を産み出す労働には賃金が支払われるのだから、次世代を生み育てる労働に対しても経済的価値を認めるべきである」と主張しました。そして、子供が母の手を必要とする期間、国庫が母の仕事に対して報酬を支払うべきであると、母性保護を訴えたのです。このことは近年になり、出産手当や児童手当が支給されるようになり、保育園や児童館等が設けられる基になったのだと思います。

又、女性が政治にかかわって活動することを全て禁止した政府に対して、女性も政治的・社会的に自由を確立させなければしないと主張し、昭和に入り参議院議員となった市川房枝と共に、婦人参政権運動を展開しました。

その後も「生きることとは行動することである。ただ呼吸することではない」と反戦・平和運動等、終生行動し続けた女性活動家でした。

以上、女性の地位向上の為に足跡を残されたお二人のお話をさせて頂きましたが、皆さまにはいかがお聞き届け頂けましたでしょうか。少しでもこれからの人生の参考となったならば幸甚に存じます。

私の話しはこれで終わりますが、皆さまはこれから兵庫大仏や兵庫城址等、色々な処を廻られる予定と聞いております。どうぞお怪我のないように、今日の予定を安全に全て終えることが出来ますようお祈りいたします。

(兵庫県 三石神社 権禰宜)

銀ねむの木

工藤智恵

本日はようこそお参りくださいました。私はこれまでたくさんの方の遺族様からお話を伺ってきました。その中から、ある英霊の奥様の歌集から歌に込めた思いをお話したいと思います。

大東亜戦争末期に激戦がくりひろげられた硫黄島は、今ではまるで何ごともなかったかのように青い海に浮かんでいます。白い波が打ち寄せる海岸線を上空から見つめていた、一人の婦人が自衛隊機から降り立ちました。

俊枝さんは戦後数十年を経てようやくこの地に来ることができました。ご主人様、卓三さんが戦死なさったこの島を、これまでどれほど訪れたいと思ったことか。手には卓三さんの好きだった、煙草の「朝日」と子供たちの写真。俊枝さんは煙草を草むらに供えて、「あなたの好きな朝日です、お好きなだけ召し上がってください。子供たちは立派に育てまし

た。あなたとの約束ちゃんと果たしましたよ。」そう心の中でつぶやきました。

俊枝さんにとって戦後は長くもあり、短くもありました。辛いこと悲しいこともたくさんありました。卓三さんのことが思い出されて、眠れぬ夜もありました。そんな日々を俊枝さんは歌に詠んできました。その歌集の題は「銀ねむの木」としました。硫黄島を覆う銀ねむの木。銀ねむはもともと、この島の植物ではありません。この地を占領した米軍が日本の兵隊さんの御遺体を覆い隠すために上空から種をまいたのです。この木の下には今でも多くの英霊が故郷に帰る日を待っていらっしやいます。

銀ねむと　紫の花咲く玉名山に　み霊安かれと　古里の水を撒く

卓三さんと過ごした数年間は、一男一女にも恵まれ、何不自由のない幸せな暮らしでした。

しかし、戦局が悪化した昭和十八年のある日、市役所の職員が突然家にやってきました。その手に握られていたのは召集令状。俊枝さんは渡された赤紙を胸に卓三さんの職場に電話を掛けました。気が動転してしまって、その時電話口でいったいどんな会話を交わした

のかは覚えていません。

出征する日は春風が嵐のように砂埃を舞い上げていました。卓三さんは俊枝さんの手を握ると家を出ていきました。

吾子背負い 召されゆく夫 見送りき 桜吹雪の 行列の中

浜田連隊で一年の訓練を終え戦地へ向かう前日、俊枝さんは子供たちを連れ面会に訪れました。卓三さんはまだ幼い子供たちを残していくことを、とても心配していました。

「子供たちのことを頼んだよ。」その最後の言葉を俊枝さんは胸に深く刻み込みました。卓三さんがどこに向かうのかは分かりません。軍事機密なので知らせることもできません。そこで俊枝さんは、

「向かった先が北だったなら葉書の上の方に、南だったら下の方にインクを垂らしてくださいね。」と頼んでいました。

戦地から葉書が届きました。

内地は師走の月だのに、こちらは毎日温暖の日が続いて居ります。もう霰が降るでせう、毎日炬燵生活の山陰の寒空を想像して居ます。

達郎、智子も見違えるほど大きくなったことと思いますお正月にでもなれば写真を取って元氣な姿を見せてください。：

送られてきたその葉書の下の方にはインクの染みがありました。卓三さんのいるのは南方だと分かりました。さらに硫黄島だと知ったのはその二か月後、米軍が島の形が変わるほどの艦砲射撃と爆撃の後、上陸を開始したころのことでした。

覚悟はしていたものの戦死の公報が届きました、遺骨といって渡された白木の箱を開けると中には名前を書いた木の位牌だけ。俊枝さんは子供たちを抱きしめて泣きました。

遺骨なき夫の墓所を清めをり終のさまたま如何にありしや

俊枝さんには悲しい思いを引きずる時間も余裕ありませんでした。慣れない洋裁を習い、わずかの縫い賃で母子三人生活の糧を賄いました。

大晦日のことでした。その日も晩遅くまでミシンを踏んでいると、幸せだった昔のこと
が思い出され、熱い涙が手にこぼれました。

「あなた、何でかえって来てくださらなかったんですか」

卓三さんに会いたい。会えないのならせめて夢の中だけでも願ったものでした。

暁の 夢路に夫の現れて 家には入らず 発ちてしまひぬ

辛い日々が続いても、耐えることが出来たのは、卓三さんの魂がいつもそばで見守って
くれていると信じていたからでした。卓三さんに会いたくなれば、松江護国神社にお参り
しました。

ほの暗き 神殿の扉 開かれぬ 軍服姿の夫のたち来

あれから七十一年たちました。それでも、毎年桜が咲くころになるとあの時のことを思
い出すのです。

花咲けば　　またも思い出す　　駅頭の　　雑踏に消え　　征きにし夫

祖国のために尊い命を捧げた英霊のために感謝の祈りを捧げたいと思います。またご主人様亡き後、懸命に家庭を守られた奥様方がいらっしゃったことを決して忘れないようにしたいと思います。

（島根県　松江護国神社　欄宜）

みなと祭

菊池重忠

塩竈は古くから拓かれた港のまちで、風光明媚な歌枕の名所としても知られてきました。その街並みを見守るようにして一森山の小高い頂に鎮座する鹽竈神社。古くから東北鎮護陸奥國一之宮として、朝廷をはじめ庶民の崇敬を集めておりました。しおがまの神々は海につながりが深く、漁業の守護をはじめ、産業開発等の神として崇められています。みなと祭を含め、塩竈では三度、御輿渡御が行われています。それらは、氏子三祭と呼ばれ塩竈の発展を願い、行われてきました。

日々のまつりや大小の神事は神職を中心として執り行われますが、一方で氏子らによって創始され、受け継がれてきた祭。この御輿渡御には次世代をになう稚児行列をはじめ、三百名を超える供奉行列が付き添います。

氏子三祭の一つ帆手祭は、天和二年（一六八二年）に始まった歴史ある祭。塩竈が大火

にみまわれ港が衰退し、火災の鎮圧と景氣の回復を祈ってははじめられたお祭りで、三月十日に行われます。

二番目の渡御、花まつり。江戸中期から続くこの祭りは、作物が実らず、氏子が鹽竈神社に祈願したところ、氣候も順調となり、作物もよくなったことから、感謝の意を込めて始まったといわれています。四月第四日曜日に行われます。

そして、三番目の渡御、塩竈みなと祭の始まりは、戦後間もない昭和二十三年のことでした。地元塩竈の復興と市民の元氣快復を願い、戦前のような活氣を取り戻そうと、東北初の御輿海上渡御が行われ、祭礼の日を何度か変えながらも、平成十七年からは『海の日』に決定し、東北の夏祭りの先陣をきるお祭りとなりました。

ところで、鹽竈神社の境内には、志波彦神社も鎮座しています。

三月・四月で行われた渡御では、鹽竈神社の御輿だけでしたが、みなと祭は志波彦神社御輿も巡行いたします。黒漆塗りの鹽竈神社御輿に対して、志波彦神社御輿は朱漆塗りでまとめられ、共に重さは一トン。そして、この三度の御輿渡御をご奉仕しているのが、氏子青年会。氏子たちは各お祭りの一週間前から禊行に入ります。神の御霊を背負う氏子たちは、『宮司さん、神職さんよりも一番近くで御輿が担げるという、「うれしさ」・「責任の

重さ」を、常々ここに持ちながら、神さまに不敬のないように、手足となって立派な御輿渡御を常々心がけてゆきたい。そして、少しでも清らかでありたい』と願い、日々の罪・穢れを落としてゆきます。

さて、祭前日に行われるメインイベントが花火大会。約七千発の花火が打ち上げられます。

街で花火が打ち上げられているころ、神社ではしわひこさま、しおがまさまの御霊が本殿から御輿にお移りになる準備がはじまり、街の華やかさとは別に、厳肅な空気が漂います。御霊が本殿から御輿に移るまでの間、境内の全ての灯りが消え、『おー』という声とともに、かみさまが本殿から御輿へと暗闇の中お移りになります。御霊が移されてから朝までは、塩竈の宮町に住む住民が、番小屋を建て御輿を見守ります。これも長い歴史の中、途絶えることなく続いてきたしきたりです。

祭り当日は、御輿を奉安した二隻の御座船が、日本三景松島湾を舞台に大小百隻からなる供奉船団を従えて、壮大な海上絵巻を繰り広げます。

そして、何より印象的なのが、海上渡御より戻られた志波彦神社・鹽竈神社の二基の御輿が市内を巡行された後、表坂を御同列にて上がられていくお姿。重さ約一トンの御輿を、

氏子の担ぎ手が最後の力を振り絞って高さおよそ五十メートル、二百二段のそびえたつ表坂を上り詰め、大勢の参拝者より沸き起こる歓声と拍手にて迎えられる光景。この長い石段を上るとき、人々は感動を覚え一体感が生まれるのでしょうか。いつの時もわたしたちに深い感動と勇気をあたえてくれます。

表坂で御輿をお出迎えしていた御老人がおっしゃいました。「いつも上がってくるところを見ると、涙がこぼれる」また、ある人は「改めて、しわひこ様・しおがま様の力を感じる」と、祭りに参加した学生は、「みんなで一緒になって、盛り上げられるいい機会」と、いきいきとした表情で語ってくれます。

祭りを支えていただく警察・消防・交通指導隊等の人々。御輿を奉迎される市内町内会の人々。沿道からお賽銭が投げ込まれ、手を合わせ祈る人々。

街に住むものは、神さまがおりてくることに、感謝する。神さまの手足となって、信仰する人々の元へ奉仕する氏子。それを支えている街。まさに、「神人一体」。

神さまと人が一体となるのが、塩竈みなと祭なのかもしれません。

祇園の厄除素麺

ゝ三味線を通じてゝ

下村知大

本日は、私の長唄三味線の経験を通じて、八坂神社『祇園の厄除素麺』を紹介させていただきます。

さて、改めまして皆様、八坂神社『祇園の厄除素麺』をご存知でしょうか。神社と麺類の関連は多く、例えば、出雲大社の近くには出雲蕎麦、伊勢神宮の近くには伊勢うどん、金刀比羅宮がごいます香川県は讃岐うどんで有名なうどんの県であります。特に、素麺におきましては大神神社の鎮座いたします奈良県桜井市は、日本国内では素麺発祥の地とされており、三輪素麺は大変有名であります。

しかし、実は、八坂神社も大変素麺と関わりの深い神社なのです。八坂神社は、慶応四年、神祇官達により八坂神社と改称されるまで、祇園社または感神院と称していました。その祇園社の南北朝時代の記録であります『祇園執行日記』の康永二年七月七日の条に「丹波

自り素麵ノ公事が免除之間、一兩年不上、仍チ素麵ノ儀沙汰之アリ、坊人宮仕等少々來タリ」とあり、これは文献上での素麵のはじめと云われております。また、鎌倉時代の書物『簗簗内伝』にも、痛みや苦しみから逃れたいと願うなら、五節句の祭礼を正しく行わなければならぬとあり、五節句に合わせた行事食を蘇民将来に教えたとされています。特に、七夕に素麵を食せば八坂大神様のご加護により病から逃れられると記されています。蘇民将来は素羹鳴尊様をお助けになりました神様でございます。素羹鳴尊様はそのお礼に茅の輪をお授けになりました。それ以降、蘇民将来の家の者は皆、病にかかることはなくなりしました。他の家の人たちにも、そのご加護をお受けいただく為、蘇民将来の子孫を名乗るお札を持てば、伝染病から免れられるという信仰が広がりました。また、素麵の「素」の字は、八坂神社のご祭神素羹鳴尊様の神の名にちなむ「素の麵」と考えられております。この祇園の厄除素麵をより多くの皆様に知っていただき、無病息災、健康長寿のご加護をお受けいただきたいという思いから、平成二十七年の七夕（八坂神社では旧暦の八月七日でございますが）よりふるまい素麵を始めました。ふるまい素麵では、神職による八坂神社と素麵についての解説が行われた後、ご参加の皆様に厄除素麵をお召し上がりいただき、古の信仰を引き継ぎ、蘇民将来の子孫になり、八坂大神様とのご神縁を深めていただ

きます。この始めるきっかけの一つとなったのが、サブタイトルにもあります長唄三味線であります。

さて、少し話が変わりまして、私の長唄三味線のお話をさせていただきます。私が長唄三味線に出会ったのは中学一年生の時であります。当時の担任の先生が長唄三味線今藤流の師範であったのです。特に部活なども考えていなかった私に、先生からの「今年から長唄三味線部をつくらないか」という言葉が始まりです。何気なく入部したのですが、第一期生として活動を始め、先生の熱いご指導をいただき高校卒業までの六年間、長唄三味線に励みました。

しかし、大学に入学してからは、三味線を触ることはなくなり、八坂神社に奉職してからも弾く機会はなく、山口県の私の実家に三味線はずっと眠っておりました。

ところが、再び三味線を弾く貴重なチャンスが訪れました。昨年、祇園の厄除素麺を唄った和歌が当社の欄宜によって作られました。

一、伊勢はうどん　出雲はそばで　鶴と亀

祇園の素麺　厄除長寿

蘇民将来之子孫也　蘇民将来之子孫也

二、七夕に 厄除祇園の 素麺を

はじめツルツル あとはカメカメ

蘇民将来之子孫也 蘇民将来之子孫也

この歌をより多くの方に知っていただく為、三味線を使って曲に出来ないかと当社禰宜よりお話をいただき、駄目もとで私の師匠であります恩師に作曲を依頼致しますと、快く引き受けて下さり、長唄『祇園の厄除素麺』が誕生しました。八坂神社の神職と山口県の母校の恩師によって一つの曲が生まれたのです。

神様からのお導きでございます。

この曲は、平成二十七年第一回ふるまい素麺にて演奏されました。さらに、恩師の粹な計らいにより母校の高校で年に一回行われます長唄三味線の定期演奏会でもこの曲が演奏されました。私も、長唄三味線部OBとして参加をさせていただきました。神様によって結ばれたこのかげがえのないご神縁に私は感謝を致しております。

最後に、今年も八月七日の七夕に、平成二十八年第二回ふるまい素麺が行われ、当社禰宜による素麺の講演、そしてこの長唄も披露をいたします。祇園の厄除素麺を知っていたく事はもちろんであります。この行事は、古くより伝わる祭礼の意義、神道の信仰に

触れていただくきっかけになると私は思います。お越しになった皆様も蘇民将来の子孫になりご加護をいただき、これは現代の平和への第一歩となる事を私は願っております。

ありがとうございました。

(京都府 八坂神社 権禰宜)

お母さんは何処に行つたの

河本文夫

徳目に、五常という言葉があります。人としての道、守るべき徳を説いた儒教の教え「五常の徳」。孔子、孟子が説いた、仁・義・礼・智に、信を加えてまとめられたものを五常といいます。

そのうちの仁が最高位の徳であり、人間が守るべき理想の姿といえます。その字の成り立ちは、にんべんに二と書き、乃ちあなたと私の関係を意味しており、その間に必要なものは相手を思いやる心と言えるのではないでしょうか。

それゆえ、日本の天皇は歴代、お名前に仁を用いておられます。乃ち真心と思いやりを持ち誠実に人として接しなさいと申され、また自らも実践されているわけですね。

さて、今から紹介する話しはニッポン放送をキーステーションに放送されてるテレホン

人生相談の中からです。

相手に対する思いやる心とは何か、愛するとは何か、どうしても自分中心に物事を考えてしまいがちであることを考えさせられた話で、ここに紹介したく思います。時間の関係で簡潔に話します。

パーソナリティーは臨床心理に造詣深い加藤諦三先生と、回答者は幼児教育研究家の大原敬子先生です。

ブルブルと電話が鳴り、加藤先生が出られます。

「どうされましたか？」から始まり、歳、家族構成などが聞かれます。

三十代の男性からの質問です。奥さんが、ボーナス支給日に、ボーナス全額持って家を出て行ってしまった。というのです。

ところが、最近五歳の子供が、

「お母さんは何処にいったのか？」

「お母さんはいつ帰ってくるの？」

と事あるごとに聞くので、私としてはどのように答えていいか分からない。

といった相談です。

あー、それは大変ですね。

「じゃ、今お子さんは、だれが？」

「幸いなことに近くに両親がいるので、見てもらっているので、職場にも行けております」

「しかし、奥さんはなぜ、家を出られたのですか」

どうも経緯から、男の人が出来たような事が判明。

概要が掴めたところで、

「それでは今回、素晴らしい先生をお呼びしてあります。」と、大原先生に代わり、

「お子さんの大事な時期、それは大変ですね」

「いいですか、幼い子供にとってお母さんは、大変大事なものです。母親がいなくなると一般にその喪失感、女の子より男の子のほうがダメージが大きいのです」

「男の子にとってお母さんは、非常に大事なものです。しかし、世の中には幼いころ、事故や病気等で、お母さんお父さんがなくなつて、片親という逆境の中で立派になったお子さんもいらつしやるんです」

「そこには、お父さん、又はお母さんの深い愛情があるんですね。この愛情が難しいの

ですけど、そこで少しでも、貴方にできることをして欲しいんです」

「いいですか、小学六年生までは、お母さんはいいお母さんだったということで、子供の心が救われるんです。この世に生を受け、最初に抱いてくれた、お乳を飲ませてくれた、肌の温かみを感じた、それはお母さんなんです。自分を全身全霊で守ってくれる、それがお母さんだったはずです。たった一人のお母さんなんです。そのお母さんがいなくなった。だから、お子さんはおかあさん！おかあさん！と言ってるんですね」

「但しそれを、お父さんやお母さんは、裏切られた夫や妻は、許せないからという理由で夫や妻を否定するんです。いいですか、自分の感情でその子の前で否定するんです。それは自分の感情なんですね。子供の立場からではないですね。」

子どもにとっては、世界でたった一人のお母さんです。そうたった一人のお母さんなんです。そのたった一人のお母さんを否定され、そのことで震えて一番おびえ、地獄に落ちるのは子供なんです」

「いい人が悪い人かは、子供の心がしっかり根付いた時、自分の心で判断できるように

なった時。その時判断した場合、全くトラウマにはならないんです」

「あなたにお願いしたいことは、あなたにとって憎い妻かもしれませんが、言いましたように子供には何の罪もないんです。ですから、お子さんのために、二つのことをお願いしたいんです」

「まず最初に、リビングにあなたの奥さん、乃ちお子さんにとってのお母さん。そのお母さんの写真を置くことができますか……きついですか」

暫く沈黙が続きます。

………

「ちょっと自分としては、……ちよつときついです……でも、子供のためになるなら、子供のためになるのなら」

と、相談の男性はむせびながら答えます。

………

「よく決心されましたね」

………

「さ、次です。いいですか」

「食事の際なんか事あるごとに、○○ちゃんのお母さんは、やさしいお母さんなんだよ」

「お母さんは、○○ちゃんのことが一番好きなんだよ、きつと帰ってくるからね」

「これはお母さん好きだったよね。○○ちゃんも食べようね」

「またお風呂に入った時なんかもいいですね。お母さんに関すること。何かにつけ、事あるごとに話しかけてください」

「そう語りかけることにより、子供の心に、自分を愛してくれるお母さんが、心のなか
にできあがるんです。実際にそばにいても、『生まれてこなければ良かった』と言うお母
さんがいるよりも、捨てられたお母さんでも、『素敵なお母さんだよつ、○○ちゃんを一
番好きなんだよ』と言ってくれると、子供は自分の心の中に、すてきなお母さんをイメー
ジできるんですね。いつかこのお母さんが迎えに来てくれる。お母さんが僕を見てくれ
ている。子供は、その気持で力強く立派に生きていけるんです」

「小学五、六年生までは産んでくれたお母さんは、いいお母さんだったということの子
供の心は救われるんです。夢を持ち続け、強く生きていく事ができるんです」

「でも此のように語りかけるのは、小学五、六年までで結構です」

「そして中学にもなると、本人も、男と女の機微を解ってきます。『あー、お父さんは、あのように言ってくれたけど、実際はろくでも無い母親じゃないか。』と理解してきます。しかし自分の心で理解したのであれば、全くトラウマには成りません。しかし、大好きなお父さんが、お母さんを素敵なお母さんと、小学六年まで言ってくれた、自分の本心を欺いてまで僕のために、そんな、そんな優しい素敵なお父さん」

「きっとお子さんは、一生あなたに寄り添って生きていってくれますよ」

と、電話の向こうでは、男性も嗚咽をしながら返事をし、最後には大原敬子先生も涙声に変わっておりました。

なんと、素晴らしい回答でしょう。

私は県教に身を置く者として、もしこの様な相談を受けたなら、どの様に導けたであろうかと思ひながら、この素晴らしい回答に頭が下がる思いでした。

ご清聴ありがとうございました。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

国際神前結婚式後の挨拶

松野実和

この度はテイラー家と松野家のご結婚誠におめでとうございます。

本日はお二人の晴れの挙式を日本の伝統文化を継ぐ神道式にてご奉仕できたこと、とても光栄に感じております。

また、今日のこの挙式は、お二人がそれぞれの生まれ育った国の文化や習慣、価値観に誇りを持ちそして受け入れ合うことで、古来の神道式にてご奉仕が叶ったことにも大変意義深いもの感じております。

神道とは、二六〇〇年以上続く悠久の歴史の中で日本人の日常生活に密着する形で培われ継承されてきた伝統的な宗教もしくは習慣の中にある日本の心の基になる道です。

今では、新郎新婦の信仰に関わらず、キリスト教式で結婚式を取り執り行うご夫婦が多い中、お二人に於かれましては、これから共に生活をされる日本の神様にその結婚をご報

告し、神様とご夫婦、またご親戚一同でこの幸せを分かち合うことができましたことを心よりお喜び申し上げます。

本日神様に捧げました祝詞の中では、まずお二人をお生み下さったご両親と命を繋いで下さった先祖への感謝を込めて、ご結婚することになったご報告を致しました。

そして大変めでたいこの節目の日をご夫妻始め、ご家族と共にご神前にお参りできる喜びをお伝え申し上げました。その上でこれからお二人が子孫にも恵まれ、生涯を通じお互いに敬い労りあつて明るく平和でかつ愛情に満ち溢れたご家庭と末永く繁栄しますようにお祈りをさせていただきました。

神道式の結婚式の特徴として挙げられるのは、新郎新婦は神様にしっかりと向き合い、そしてそれを見守るようにご両家のご家族が互いに向かい合うという形です。

また、神事の中で盃をご夫婦そしてご親族の方にも、三献の儀、親族固めの盃として、盃を交わしていただきました。

日本では、古くより盃を交わすということは、仲を深める、同じ仲間、一族としての関係を強固にするという意味がありまさに本日皆様には神様の大前で一族としてのこのご縁を確認していただきました。

いずれの形もこの結婚がご夫婦のみならず、ご両家のご家族が同じ家族として結ばれるという共同体としての和の心を象徴しているのではないかと感じています。

また、神事の中では、お二人そしてそれぞれのご両親に玉串と言われる常緑樹の枝である櫛と共に神様に祈りを捧げて頂きました。

神道式の儀式では、枯れてしまう花はお供えをせず、常に緑を保っている常緑樹をご神前にお供えます。それは神道では、「常若」といつて常に魂が若々しく瑞々しいことを大切に考えるからです。常に魂を若々しく保つためには、日々の行いの一つ一つが正しく積み重ねられていなければなりません。例えば美しい花は、土台となる根がしっかりと張り、茎や葉が伸びたその先にあるものです。私達人間も同じで瑞々しい新鮮な気持ちを抱き続けるためには、足元を固め、家族としてのそれぞれの役割を考えて一つ一つに感謝し新鮮な気持ちで生活することが不可欠です。

今日捧げて頂いた玉串には、お二人は今と変わらない瑞々しい想いで生涯を共に過ごせますようにという祈りが込められています。

そしてそのような瑞々しい櫛が供えられた神棚を家の中心、感謝と祈りの場として神棚とお祭り頂ければ、心豊かな生活、明るい家庭作りに繋がるのではないかと思います。

さらに、祝詞の後には「誓いの言葉」として神様に終生変わらぬ愛をお誓い頂きました。日本に古く伝わる古事記や日本書紀といった神話の中には、個性豊かな神々が幾度も話し合いを持ってその困難を乗り越え、お互いの特性や知恵を生かして力を合わせることで平和で秩序ある社会を築く場面が度々描かれています。

日本は、人々が奪い合って作られた国ではなく、神々が譲り合って作られた国です。そして美しい四季と豊富な水、豊かな土壌に恵まれる中、稲作を中心に先祖達が助け合い支え合うことで栄えてきたのがこの日本です。

この上は、どうかお二人には本日の祝詞、そして誓いの詞の通り、楽しいときも病めるときもお互いの個性と知恵を生かし心を合わせ、譲り合うことで明るく清らかなご家庭を築かれますよう、そして代々に継ぐ子孫と共にご両家がいつまでも瑞々しくますます繁栄しますよう末永い幸せを心からお祈り申し上げます。

これをもちまして本日の神前結婚式を滞りなく執り納めさせて頂きます。
本日は誠におめでとうございます。

I would like to begin by conveying my sincerest congratulations to the Taylor and

Matsumo families upon this union of John Taylor and Koharu Matsumo.

It is my great honor that I am able to serve this wedding ceremony in a Shinto style; reflecting the traditional culture of Japan.

This is deeply meaningful because it has only been brought about by the acceptance of each other's culture, customs, and values, while still maintaining pride in your culture. It is thanks to this mutual recognition and respect to each other's culture, that I am able to hold this ceremony in the traditional Shinto style today.

Shinto has been considered a traditional religion of Japan since when the faith came into existence spontaneously over 2600 years ago, and it has continued to have a deep influence on the Japanese way of life.

Despite this, many couples in modern times chose a Christian style wedding ceremony, regardless of their own faith.

Thus I am all the more delighted to be able to inform the Kami (deities) dwelling here in Japan of this joyous news and share our happiness with the deities which

eternally watch over and protect this happy couple, and the all the friends and family which have gathered here today.

Within the norito prayer I read before the Kami today, I reported to the Kami our great gratitude for the parents who brought John and Koharu into the world and raised them into the fine young man and woman they are today. I conveyed our joy with which we gather here on this auspicious day to pray for the continued happiness and success of this new couple.

The prayer conveyed our hopes for a bright and peaceful life, blessed with offspring and filled with respect for each other and the warm love of family down through the ages.

In a Shinto wedding, the bride and groom steadily face towards the Kami, while their families, watching over the couple, face towards each other.

This symbolizes the harmonious spirit of marriage, for in Shinto, marriage is not

thought to be only between husband and wife, but also to be a union binding both families together into a single community.

Furthermore, during the ceremony the bride and groom as well as both their parents offered up a prayer along with the evergreen branches of the Tamagushi. Rather than flowers which are soon to wither, it is these evergreen branches, which forever retain their verdant coloring, that we offer in Shinto.

In this way, Shinto cherishes what is called "tokowaka", or literally "eternal youth", and asks us to keep our souls eternally youthful and fresh. In order to do this, we must accumulate right and honest actions day by day.

A flower must first have deeply planted roots and send forth stem and leaves before it can produce its fragrant blossom.

In the same way to keep our souls young and fresh, we humans must plant our feet firmly, consider our respective roles as a family, and continually renew a feeling of gratitude in our everyday lives.

Thus the offering up of the Tamagushi today includes a prayer that this new couple

can spend their lives together with an unchanging youthfulness of the soul.

I believe that the verdant Sakaki branch, which is placed before the Kamidana at the center of the home, becomes a place of gratitude and prayer which connects us to our making of a cheerful household and a rich spiritual life. With the vow which was sworn after the Norito prayer, the Kamisama has received your lifelong unchanging love as an oath.

The ancient chronicles of Japan hand down to us the deeds of many different deities. Often, the deities overcame difficulty by each of them contributing their own wisdom during discussion and then joining together to utilize each of their many different talents. In this way, they were able to build a peaceful and stable society.

Thus Japan was not born from the struggles of men, but is a country created through the discussion and mutual compromise of the Kamisama.

With the help and support of our ancestors, Japan has been able to flourish with rich soil and abundant water that nourishes the rice throughout the beauty of the four seasons.

Finally, I pray with all my heart that the two of you work together and rely on each other's individual talents and wisdom in times of joy and in times of sickness. I pray that you build a bright and pure family through discussion and compromise. I pray that for generations unto generations, together with your descendants, both your families will eternally flourish and prosper more and evermore, to have many years of happiness filling your hearts and souls.

With this, I bring the wedding ceremony to a close.

My sincerest congratulations to you both.

Thank you.

(青森県 八幡宮 宮司)

若者と神さま

小笠原 佐

早速ですが、ここで皆様にひとつ問題です。この日本の「中心」は何処でしょうか？

この問いに対する答えは、一般的には四つあるそうです。一つは、政治経済の中心であり、天皇陛下の居られる皇居の置かれている東京都千代田区。一つは、日本列島を経緯度を用いて地理的に見たとき諸説ありますが、東経一二五度と北緯三五経度の交点となる「日本のへそ」として有名な兵庫県西脇市。一つは、総務省統計局の国勢調査によって求められる、現在の人口重心点である岐阜県関市。そして、もう一つが私の故郷でもあります青森県にございます東北町です。

陸奥の 奥ゆかしくぞ 思ほゆる つばの碑 外の浜風

最行法師の歌です。この歌に登場する「つぼの碑（いしぶみ）」とは、征夷大將軍・坂上田村麻呂が蝦夷征伐で陸奥へ進撃した際に、弓の筈（はず）で「日本中央」の文字を掘ったとされる石碑のことで、平安時代より広く知られ多くの歌人らによつて東北を指す枕詞として詠み込まれてきましたが、その碑が何処にあるのか、正確な場所については長く不明のままでした。

この日本中央の碑が、青森県内最古の神社と云われ、また古くより「千人の人間で以て石を引き、其れを七尺掘つて埋め神社とした」という伝説の残る千曳（ちびき）神社のすぐ近く、青森県東北町坪集落にて一九四九年に発見され、晴れて青森県は「日本の中心」となったわけであります…と、胸を張つて言いたいところではありますが、実際には発見後行われた調査でも本物のつぼの碑であるという確証は得られず、残念ながら未だに断定には至っておりません。しかし、この日本中央の碑は明治天皇にまで氣にかけて頂き、一八七六年の東北巡幸に際して宮内庁が青森県に命じ搜索させた過去があり、この一点だけをとりても青森県人にとっては大変な誉れであり、太古に思いを馳せるに足るロマン溢れる地域の宝として大切に保存されております。

さて、この最行法師の歌をつい先月お参り頂いたある方に、ご神前にてご披露頂きました。お参りを頂く朝に、迎えにあがった道中にてお立ち寄り頂いたこともあり、感慨深いものがありました。

また、それと同時に、私自身が上京した時に、友人達より「どこから来たの?」「青森ってどんなところ?」そんな質問を幾度となく受けた時、その答えの一つとして、また話の種としてこの「日本中央の碑」のことをよく話していたことを思い出し、懐かしい気持ちにもなりました。

人に聞かれ、その問いに答える為に、自分の生まれた故郷の事を調べることで改めて知り、そして自覚する。今になって思えば、そのきっかけを有り難くも頂戴していたんだなと思います。

私の故郷、下北半島の田名部には山車（だし）の文化があります。田名部のお祭りの行列には神社の御輿が出て、その露払いとして神社周辺の五つの町内から五台の山車が出ます。このお祭りこそ地域の誇りであり、年に一度の晴れの舞台であります。山車を牽く五町内の人間は、幼い頃より「引き子」として山車の綱を引き、学校にあがる年齢となれば山車に乗り込み囃子を奏でる「乗り子」となり、青年になれば山車の運行を取り仕切る「組」

と呼ばれる組織に見習いとして所属することを許され、数えの四十二歳で迎える定年まで、町内の山車の運行のみならず、年間を通して地域の為に力を尽くします。特に、この組の長たる「組頭（くみとう）」はまさに町内の顔であり、お祭りの花形であり、地域の子供達はその背中に憧れて育ちます。

また、下北半島は地域の伝統芸能として能舞神楽を有しており、国の重要無形文化財の指定を受けております。青森県全体として見れば、県庁所在地の青森市またりんごで有名な弘前市を含む県の西側津軽地方においては津軽神楽が盛んです。これは津軽氏四代藩主信政公の霊を慰めるために当時の神職が江戸・京都に神楽を学び作り上げたもので、神職自らが太鼓を打ち笛を吹き舞を奉奏するものです。

下北半島においては、能舞神楽は地域の氏子为中心となり能舞保存会を組織し、その技と伝統を受け継いできました。お祭りとなれば、まずは神職が祝詞をあげ、神事滞りなく済めば次いで地域の若者为中心となり祈禱舞が奉奏されるのが決まりです。

話は逸れますが、下北半島も例に漏れず過疎化が進み、後継者不足に悩んでおります。そんな中にあっても「あと一人おやま（下北半島においては恐山を指し、亡くなることを意味している）にあがれば、お祭りに神楽あげられなくなる」と冗談にならない冗談を言

いながら、どこの集落も絶えることなくその技と伝統が受け継がれてきたのは、神社のお祭り、そこに奉奏する能舞神楽こそが地域の誇りであり、地域社会の中心であった何よりの証拠だと言えます。

集落の一つ一つに、その集落の長を兼ねた師匠がおり、それに習い奉仕する若者たちの組織があり、部落ごとに継承・発展をしてきた背景がある為、どの集落もいい意味での特色を持ち、また故に切磋琢磨しながら今に至る迄、連綿と受け継がれてきました。

下北半島の若者は、山車を曳くことでお祭り奉仕する長老方先輩方の後ろ姿を見て育ち、また能舞神楽の手振りを学ぶことで神様に頭を下げ手を合わせる事で、ごく自然に神さまを感じる機会、そして実際に触れられる機会に恵まれている。本当にありがたい地域なんだと気がつきました。

かく云う私もお祭りが大好きで、上京してから情報が入ればあちらこちらと足を運びましたが、参拝者の賑やかな様子を見ても、提灯の灯りを見ても、さらにはお囃子を聞いても、なんだか物足りない気持ち、寂しい気すらしていたのは、それがただの物見遊山に過ぎず、本当の意味で参加していた故郷におけるお祭りとの繋がりとの違いによるものだと気づいたからでした。

私は故郷を離れることで、故郷を学ぶきっかけを頂戴し、より一層に故郷を知り誇れるようになりました。「夢破れて山河あり」という言葉があるように、故郷は偉大です。その偉大な故郷を学ぶこと、そして故郷に続く伝統文化を学ぶこと、そのことこそが、本当はお近くに居てくださり、いつでも見守っていてくださっている氏神さまに気づき、感謝する一番なのではないでしょうか。

私は、故郷は夢破れて帰るところではなく、夢を持ち故郷を離れる若者たちの何よりの心の支え、さらには遠く離れても常に見守っていてくださる氏神さまそのものであると思います。この偉大な氏神さまの為、偉大な故郷の為に、そして地域の若者にその有難さを伝える為、神主の立場として出来ることが少しでもあれば、常に力を尽くしたいという思いでおります。その思いを述べて、私の講話とさせていただきます。

(青森県 田名部神社 榎直)

みそぎ修法会

西場 俊介

皆さま、こんばんは。本日はお忙しい中、椿大神社みそぎ修法会へお集まりいただきありがとうございます。私は、椿大神社・権禰宜の西場俊介と申します。ただいまより『みそぎ修法会』について、この会の歴史とみそぎの意義をお話しさせていただきます。

椿大神社では、四月・十月の二ヶ月を除いた毎月十一日、年間で十回、御一般の皆様修行の場として、みそぎ修法会を開催しております。みそぎとは、滝行。滝に打たれる修行でございます。健康な方であれば、どなたでも御参加いただけます。本日から初めて御参加された方でも大丈夫です。お集まりいただいている皆様の中には「椿大神社のみそぎに行かなければ一ヶ月が始まらない」と言うような熱心な方が大勢いらっしゃいますし、全国各地の神社の神主さんもたまに研修に来られるような、その道のプロが集まる会でもございますのでご安心下さい。

それでは、一度「鳥船行事」と申しまして、みそぎを行う前の作法について実践していただきます。皆様、ご起立下さい。（起立していただいて、作法の説明を行い実践する）

「ありがとうございます」どうぞご着席ください。このまま行いますと十分以上はかかりますのでその後の作法は割愛させていただきます。

そもそもどういった会なのかと申しますと、今から六十年ほど前、昭和三十年四月、椿大神社の先代宮司が、十年間を目標としてみそぎ修行に入ったことから始まります。私が生まれる前の話でございますので、詳しくは椿大神社の歴史書「椿大神社二千年史」から抜粋してご紹介いたします。

この本によりますと、毎日深夜十一時から一時にかけてみそぎを行い十年間続けられたそうです。私も、神社の職員として十年目を迎えますが、その間一日も欠かさずみそぎを行ってきたのだと考えると、そこには凄まじい精神力が感じられます。修行を始めて三年が経ったある日、宮司がいつものように滝に打たれていると、青年やご婦人たちが五、六人集まって見学しておりました。宮司は滝から上がり「何ですか。」と聞きますと「滝行（みそぎ）を私達にも教えて下さい」と懇願してきたそうでございます。宮司は、自分のお願いごとが叶うように十年の願を掛けて行っている修行なのだから、大勢では出来ない

と断ったのですが、彼らは翌日もその翌日もその次の日も毎日訪れて頼んできたので、その熱心さに圧倒されて「それでは日にちを決めて一緒にみそぎをやるうではありませんか」と昭和三十四年四月より毎月十一日のみそぎ会が始まったとのことです。当時は先代宮司も三十代でたいへん元氣でありましたので、みそぎの一時間前から説明を始めてみそぎが終わると朝四時ごろまで神道の話をして、ご自宅に帰宅するのは夜が明けて一番鶏がなぐ頃であつたと書き記されており、現在行っているこの修法会は深夜零時頃に終わりますので、皆様ご心配いただくなくても大丈夫でございます。

現在では毎月百五十名近くの方が参加する会に成っておりますので、椿大神社でみそぎを行った人は今や全国に数万人はいることになります。先代宮司も十年の願掛けで始めた修行が色々な人の同意を得てこのような会に発展するとは思ってもいなかったみたいで大変驚かれたそうでございます。

それでは、みそぎをすることの意義とは。ここからは私なりの考えでお話しますが、冬場には水温がマイナス何度にもなるような滝の水に体を入れる事もある修行が我々人間には必要なのか。正直な事を申しますと、十年前の入社当時の私でしたら「職員だから仕方ない、入らなければ行けない立場だからやるしかない」と思って、雪や大雨の中体を震

わせながら滝に打たれていた日もありました。しかし、その考え方がみそぎを続けて行くにつれて徐々に変わり、そんなことは微塵も思わなくなっていたのです。なぜなのでしょう。それは、このきびしい環境に耐えて修行することで、どんな逆境にも屈することのない強い精神力がつくられ、その行為を喜びと捉えられるようになったからです。毎月みそぎを行い、自分自身から生まれる高慢さや執着心という邪念を、一生懸命祓うのです。そうしてみそぎに没頭することで、つまらないことの一切を取り払い、私を健やかな気持ちにさせてくれるのです。だから今では滝に向かった時は誰よりも大きな声で「よろしくお願いします」と言い、このように「えいっえいっ」と（実際の滝に入る際の動作を行う）しっかりと作法を行うことで、滝のエネルギーを誰よりもいただけるような心構えで臨んでおります。私が先導をして滝に入られる方は、私に負けない声でみそぎに臨んでください。

最後になりましたが、椿大神社の神様・猿田彦大神さまは「行（つまり修行）」の神様でもあります。一聞は一見にしかず、そして一見は一行にしかず。何でも実践することが大切です。ぜひこのみそぎ修法会でみそぎを実践していくことの楽しさや喜びを感じてください。御静聴ありがとうございます。

老いを生きる

中 木 屋 豊

今年もたくさんの方にお参り頂き敬老祭のご奉仕ができました。最高齢は重信さんですか。おいくつになられましたか。そうですか、九十五歳ですか。元気にお参りできるんですから、すごいです。これからも長生きしてお参りください。

さて今元気で申し上げましたが、元気でないときは病気です。病んで無い時に、お会いした時は、元気に挨拶されると思います。物事がうまくいくと、人間関係も良好になります。おはようございますとか、こんにちはと明るく言うことが出来ます。この明るさこそが大事なのです。

反対の暗いを考えると、わかりやすくなります。物事がうまくいかない原因は、暗い考え方、暗い表情、暗い雰囲気、暗い言葉にあります。前向きでなくなり、思考がどんどん内側に向かいます。些細なことで怒り出し、つい身近な人に当たります。いつも思い悩み

「なんて自分は駄目だろう」「どうせ自分なんて」と、心の中は自分の事ばかりになります。他人に向かう怒りと、自分に向かう悩みが日常的に交錯していくと、精神科を受診しなくてはならなくなります。心配でたまらなくなる。これが高じると、心配性になって、その人の性格になってしまいます。

でも明日の天気ですら、思いどうりにならないのに、完璧な人はいませんから、悩んでも仕方ありません。ではどうしたら心に「明るさ」を持ち、日々の生活が送れるのか。第一には、自分を自然に順応させることです。人は自然から離れれば、離れるほどに不自然になります。まず早寝早起きの生活と、より自然な食生活が大切です。第二は、言葉の国ですから、明るい言葉を使う。決して否定的な言葉を発しないことです。言った通りになつてしまうのです。最後に自分の中にある天性を呼び覚ますことです。小さな子供は天真爛漫で、無邪気な心を持っています。天性を呼び覚めます。そのためには、幼い子供たちとの触れ合いが大事です。お孫さんひ孫さんと遊ぶことです。近くにいらつしやらないなら、他人の子供さんたちと触れ合いましょう。面倒を見るといふより、子供に触れることで、自分の中の天性を蘇えらせるのです。意識するだけで、明るさを引き寄せてくれます。

「明るさ」を心の真ん中に置く生き方は、実は日本人の生き方そのものです。昔太陽の

事を「今日様」と呼びました。「今日は、お元気ですか」と言う挨拶は、「あなたの心の中の太陽はお元気ですか」という意味です。すると受けた方は、「お陰様で…」と、神の加護、天然自然の恵みや、多くの人たちの力添えによって、元気に生かされることに、感謝の返事をします。左様であるなら大丈夫ですね。またお会いしましょう。左様ならと去っていくのです。昔からすべての日本人が、太陽によって天然自然のあらゆるものが、生かされている実感を持っていたのです。

神話の天の岩戸によると、太陽、つまり日の神天照大御神様がお隠れになると、世の中が乱れに乱れたと書かれています。周りの八百万の神様たち、お一人お一人も神としてすごいお力をお持ちですが、でもその力を発揮することが出来ず世の中が乱れたのです。実に「今日様」によつて、すべてが生かされている証であります。ちなみに英語のグッバイは、ゴッドバイ、神様がいつもそばにいてよい人生をと願って言っているから面白いですね。

さて話は変わりますが、チベットに学校を作る活動をしておられる、大阪在住のヤンジンさんのお話をしましょう。チベットは六〇〇万人が、遊牧生活で生計を立てます。十一人兄弟の九番目に生まれたそうです。努力を重ねて、長兄の献身的援助で、中国四川省の

音楽大学を民族差別に屈せず無事卒業しました。卒業記念コンサートで、あなたはチベツト人ですか、と声掛けられた人が、現在の旦那様齋藤秀樹さんでした。そして、現在さまざまな音楽活動をしているが、学校づくり頑張っておられます。きっかけは、ある日義母と一緒に料理をしながら、日本に生まれてよかったですね、貧しいチベツトは大変ですといった時、普段優しい義母が怒りました。満州から命からがら逃れてきたこと、貧しい生活だったことを聞いた時、ヤンジンさんは、信じられない思いだったそうです。あくる日父に、どうして日本が発展したのか、聞きました。「教育」だろうなの答えを聞いた時に、チベツトに学校を作って援助したいとの、スイッチが入ったそうです。永い人生を送られた皆さん、人生は平坦でしたか。苦しさ、貧しさの中、必死で生きてこられたと思います。体験が少ない子供たちに、今いかに恵まれているか、感謝することの大切さを語りながら、自分たちには天性を蘇えらせる、「共育」で、今日用があり、今日行くところのある、必要な老いを生き抜いてください。

（鹿児島県 稲荷神社 宮司）

大東亜戦争はアジア解放戦争だ

菅原隆志

本日は戦没者慰霊祭に、大勢の方がご参拝下さいまして、誠に有難うございます。

今日は「大東亜戦争はアジア解放戦争だ」と言うことで、皆様に少しお話ししたいと思います。

さて皆様は、小学校・中学校、また高校・大学等で、大東亜戦争について、どの様に学び、また心に留めて居ることでしょうか。

まず、大東亜戦争と言う言葉、これは皆様には馴染みが薄いかも知れないのですけれども、学校では太平洋戦争と言う名前で教わったかと存じます。

この戦争は、日本の卑怯な真珠湾攻撃に端を発し、そしてアジア（東南アジア各国）を無謀にも侵略し、広島・長崎の原爆の投下で敗戦したと、そう学校で教わった事と思います。しかし、これは真っ赤な嘘であったと言う事が、最近いろいろな調査で分つてまいりま

した。

一番重要な資料と致しまして、この昭和十六年十二月八日の朝日新聞夕刊に載っていました『帝国政府声明文』です。

これは二〇〇九年に札幌在住の雪氷学者である安濃豊博士が、市立図書館のマイクロフィルムから発見しました。

私は昨年、神職青年会の講演会で、この先生が講師と言うことでお話しされ、大変びっくり致しました。

この新聞の上の方には天皇陛下の『開戦の詔勅』が書いてあります。そして真ん中には、いろいろな戦地での状況が書いてあります。

そして、一番下の所には『帝国政府声明』と言うことで、政府の開戦における声明を述べてあります。

前半はアメリカ、イギリス等が、経済封鎖をして、大変困っていると、そして中程には、「而して、今次帝国は南方に武力進攻することになりましたが、決して東南アジア住民に対して敵意が有るからではございません。ただ、米英の植民地政策を排除し、独立国家に戻し、一緒に繁栄して行こうと願うからであります」と言う事で、現地の住民が戦争目的を了解

しました。

また、この地域は国民では無いのです。それと言うのも、国として認められていたのは、タイ王国しかございませんので、あとは欧米諸国の植民地の住民と言う事でした。

この戦争目的を掲げて、日本は戦時中、ビルマから始まり、フィリピン、自由インド仮政府、また、ベトナム、カンボジア、ラオス、インドネシアと、七か国におよぶ国を独立させることが出来ました。これは戦後ではございません。戦時中に日本軍が独立させた国です。

この国々は戦後、旧宗主国である欧米諸国が舞い戻って来た時に、現地住民とその国に残った日本兵によって、更に独立を維持するため戦ったのです。

こう言った文献から学びますのは、我々は如何に戦後GHQ、また日本共産党、日教祖の教育によって、この我々の心が歪められてきたか。

そして、このあいだ皆様も記憶に新しいと思いますけれども、五月二十七日にオバマ・アメリカ大統領が広島を訪問し、慰霊碑の前で献花しました。それはどういう事かと言うと、「原爆投下は御免なさい」とは言わないですが、「原爆投下は間違えでした」と認めたと言う事です。

それは更に申し上げれば、オリンピックで言えばドーピングが見つかつて、ドーピングをしていましたと認めたことで、金メダル剥奪です。

この五月二十七日は、此処にいる皆様は、気付いていないかも知れませんが、日本がこの戦争に、大東亜戦争に勝利したという事ではないでしょうか。

そして今日、この戦没者慰霊祭に際しまして、英霊の方々が、この会場にも大勢来て居ることでしょう。

我々は胸を張って、アジアの為に独立戦争を共に戦って勝利したという事を、提灯行列で祝おうじゃないですか。

会場が、ちょっと静かになりましたけれども、さてフィリピンの『バターン死の行進』と『南京大虐殺』これに共通している事を、皆様何か知っている方は居りますか。

「はい、でっち上げ」まあ嘘とか、でっち上げとも言います。

「東京裁判で出てきた」まあ、それもそうですね。

実はこの『バターン死の行進』と『南京大虐殺』で共通している事は、一番の大將が敵前逃亡したと言う事です。

バターンでは、マッカーサーが魚雷艇に乗って敵前逃亡し、アメリカ兵が約八万人も投

降した。

蒋介石も敵前逃亡して、残された兵隊は、住民の衣服を剥ぎ取って殺した。

我々は、この日本を誇りに思い、世界平和に貢献して、人種平等を実現した国家として、これからも大切にしていこうではございませんか。

本日は、戦没者慰霊祭につきまして、大勢の方に来ていただきまして、本当に有難うございました。

(札幌市 琴似神社 榎宜)

英霊が繋いだパラオの奇跡

田川 伊吹

皆さん、パラオ共和国という国はご存知ですか。

知っている方は手を挙げてみてください。

結構知っていますね。

恐らく、昨年、戦後七十年にあたり天皇陛下、皇后陛下がパラオ共和国へ戦歿者を慰霊しに行幸啓遊ばされたのをテレビやニュースを見て初めて知った方も多いのではないのでしょうか。

少しだけ、記憶を巻き戻して頂きたいのですが、現地の子供達が日本国とパラオ共和国の国旗、そしてペリリュー島の州旗を振って奉迎していた場面は覚えていますか。

実はその国旗をパラオに持っていく際にお祓いしたのが当神社でした。

このご縁は本当に偶然で、世間の注目が集まっていた頃、地元の新聞紙でパラオに足し

げく通い、遺骨の収集や戦跡の調査保存などに尽力している方が青森県にいるという記事を見かけたのです。

加えて遠き南洋の地で百二十名近くの青森県人が玉碎したということと、奉迎にあたりペリリユー州知事から両国の手旗製作の依頼があり寄付を募っているということが書かれていました。

それまでは大東亜戦争の激戦地であった場所だとは何となく知っていましたが、実際にどんな激戦地で、現在はどうな状況にあるかなどはほとんど知りませんでした。

ところが、その記事を読んだ瞬間、「あなたも手伝いなさい」という神様からの声が聞こえたように感じ、すぐさまその人物を調べて連絡を取ったところ第十四師団ペリリユー島戦車隊遺族会青森分会事務局を務めている方でした。

寄付活動を手伝っていくと段々と現地に赴いて御英霊に顔を合わせて慰霊をしたい気持ち湧き起こり奉迎に同行させてもらうようお願いしましたが、残念ながらホテルは全部埋まってしまいその時は海を渡れることは叶いませんでした。

それでも国旗が完成した際にお祓いしたものを持っていきたいという強い要望を受け、出発直前にご祈祷を執り行い手旗一式が奉納されました。

その後はいつかタイミングが合えば慰霊の旅へと思いながら、少しでも多くの方にパラオの地で起きた青森県との深い関わりを知ってもらうため、様々な場所で事務局の方に講演をしてもらえるよう手配をして活動しました。

そうこうして一年が経とうとした頃、同じくパラオ共和国に思いを馳せる人が急きょ現地にむかう事になったため同行しないかとの連絡があり、突然のことでしたが即決して行くことにしましたが、実はその予定が前後数日ずれていれば社務により慰霊へ向かうことは不可能でした。

今回、事務局たつての願いもありアンガウル島への慰霊も予定にいました。

アンガウル島は激戦地であったにも関わらず海が荒れやすく島へ渡ることが困難なため、ペリリュー島に比べるとあまり慰霊がされていない現状があり何とか御霊を慰めたいとのことでした。

この慰霊の旅には普段交流もあった青銅座像で日本一の仏像を誇る青龍寺の住職も同行することになり、恐らくパラオ共和国では初めてとなる神仏合同での慰霊祭となりました。いざ現地に到着すると南国特有のジメツとした暑さが体にまとわりつくような場所でしたが、慰霊祭は本島のバベルダブオ島、ペリリュー島、アンガウル島の三島で十か所前後

は回りました。

慰霊碑や墓地だけではなく、トーチカや洞窟などに至るまで空気が変わるところはほぼ行いました。

早朝から日が落ちるまで戦跡をたどり慰霊を行うため、多くの場所では略式で、神仏合同の箇所もあれば手分けして神式、仏式と分けて行うこともありました。

パラオはスコールが激しく、突然降ったりやんだりするのですが、不思議と雨に降られたのは一、二か所のみで、それ以外は直前まで大雨が降り準備を始めるとピタッとやみ、終わるとまたザーザーと降っていました。

特に天皇陛下・皇后陛下が慰霊をされた西太平洋戦没者の碑では直前まで大雨が止まず、中止を考えたところ突然止み、いざはじまると雲が徐々に開け西日が射して焼けるような眩しさとなりました。

更に帰路では日本で見たことのないようなくつきりとした虹が眼前の海に掛かり、その光景に英霊の涙が晴れたのかなと思うと湧き起こる感情の涙を堪えるのに必死でした。

また、ペリリュー島に渡る際には一枚一枚英霊の名前を付した紙を海に流して海上慰霊を行いました、百二十枚も流しながら一枚も乱れることなく本島へまっすぐ流れていく

姿に、兵隊さんが規律をなして歩いているようで漸く帰って頂けたのかと本当に嬉しく、
込み上げるものがありました。

他にもキリが無いほど様々なことがありましたが、世界一美しい海ともいわれるこの綺麗な海を眼前に眺めながら戦ったその想いは、一部が騒ぐただ命令されたからやりましたなんて、そんな軽々しい思いでは絶対にできないと強く確信しました。

国のため、家族のため、そして未来のためという、強い思いが無ければあれだけ美しい海を眺めながら華と散る覚悟なんて決められるはずありません。

戦争とは絶対にしてはいけないし最も愚かな行為で卑劣なものです、戦わなければ何一つ守ることが出来なかったその時代に、命を賭して守り抜いた御英霊に、今、手を合わせないという行為は最も愚劣な行為です。

今あるこの豊かな生活、そしてそれぞれが唯一無二であり子々孫々と繋がれたこの命を戴いているその有り難さを今一度噛み締めて思いを紡いでいかなければならないのではないのでしょうか。

パラオ共和国で起きた様々な奇跡は子孫である私たちに向けられた御英霊からの必然の優しさであったような気がします。

実は後日談が驚くほどの発見なのですが、これはまた次のお祭りにてお話しさせていた
だきます。

御清聴ありがとうございました。

（青森県 廣田神社 宮司）

被災地の神職として

榊原 裕一

本日は当神社に御参拝頂きまして有難うございます。また、震災から五年が過ぎても被災地に心を向けて頂いていますこと重ねて感謝申し上げます。

さて、皆様は震災から五年たった陸前高田市をどのように感じましたか。順調そうに進んでいると感じますか。それともまだまだ時間が掛かりそうだなと感じますか。瓦礫は既に片付き、山を崩し土を運び、かさ上げされた土地がいくつか見えます。しかし、地元の人間からすると五年経ってもあまり進んでいないと感じます。

この復興工事は本当にこの土地に合った計画なのか。大規模な工事が出来るからといって地形を大幅に変えていいのか。そう思う話がたびたび聞こえるからだと思います。

いま、高台住宅地にすべく削っている山についてこんな話を聞きました。

その山は愛宕山と言い、山の中に愛宕神社がありました。神社と言っても小さな祠よう

なもので地域の人たちだけでお祭りをしていました。

その地域のある方が、高台の工事に伴い愛宕神社を動かさなければならなくなったことをある神職に相談したそうです。こういう事情だが動かしてもいいのかと。

その神職は、確かに高台の住宅地は必要だが神社を動かす事には神職として賛成は出来ない、というような答えを返したそうです。

その後どのような話が市とあったかわかりませんが、結局神社は動かされ山を崩す工事が始まりました。

きちんと地盤調査をしてから工事が始まったそうですが、もう既に計画の延長が二回もありました。そして今も山を崩すために発破作業を毎日続けています。

計画が進まない理由は、愛宕山が周りの山に比べ頑丈な岩盤を持った山だったからです。調査したにも関わらず思い通りに進まない工事は費用が嵩んでいきます。

ある地元の方が、ここには元々五百五十軒程しか家がなかったんだから、愛宕山を崩すのに掛かっているお金をみんなで分けてしまえばもっと早く復興出来たのではないかと。笑い話のように話していたり、またある方は工事の遅れとそれに伴う費用の増加こそ祟りではないかと言っていました。

そのような話を聞きたび私もその通りだと思いました。

そして、むかしから林業や農業に携わっている方ほどこういう話をよくしていました。こういう方々にとつて愛宕山が岩盤質で周りの山より頑丈であることは昔から当たり前に言われていたようです。

そういう自然を相手に仕事をしてきたここのご先祖様たちには、何かの理屈なのか、直感なのか分かりませんが、その山の本質を察していて、だから祠を造り愛宕山と名付け、敬っていたようです。

このような科学の発達していない時代の日本人の感覚から生まれた、地名や言い伝え、風習、伝統といったものはもつと目を向けるべきものなのかもしれません。

復興工事は今にして思えば、外から来た有識者だけでなく、地元の人に意見を聞いて計画を立てればもつと違ったものになっていたと思います。

少なくとも、なかなか進まない工事をなかばムキになって続け予定以上のお金を掛けることはなかったかもしれません。

本日お越しの皆様がの地元にも様々な地名があると思います。山の名前、川の名前、道の名前、地域の名前、それぞれに意味やいわれがあると思います。是非、帰られましてその

ような話を聞く機会がありましたら、つまらないなとか、科学的でないなとか思わず、心にとどめて頂きたいと思います。

それがもしもの時、皆様の助けになるかもしれませんし、これからますます発達していくであろう科学の後悔しない使い方、自然とのつきあい方の手掛かりになるかもしれません。

そして万が一のもしものが起こったとき、それまでの準備が結果を大きく左右すると思います。その準備のなかに自分の地域の事を知ることを入れて頂ければと思います。

陸前高田市はまだまだ復興の道半ばですが、何か一つでも皆様に支援のお返しとして得るものがあれば嬉しく思います。

本日は遠方より御参拝頂きまして有難うございました。

(岩手県 今泉天満宮 榎宜)

社家として神社とどう向き合うか

萩 庄 宏 爾

我が国日本は現在、人口減少と少子高齢化の急速な進展に歯止めがかからず、昨年の「合計特殊出生率」が一・四六、二十一年ぶりの高水準、生まれた子供は約百万六千人で五年ぶりに増加したものの低い水準に変わりはなく、平成六十年には日本の総人口は一億人を割って九千九百十三万人となる見込みが発表されております。その影響を受けて十年後には日本の神社の約四割が消滅してしまうと危惧されております。

その影響を真っ先に受けると懸念されるのがまさしく私が現在奉職しているような氏子の皆様方より貴重なお金を維持費として頂戴し護持運営している地方神社であります。

現在、当神社の氏子数は人口が一万二千人に対し、氏子数が千二百戸ですが、ここ数年より生活水準の高い都会への移住者の町離れや、一人暮らしの高齢者の死亡、介護を余儀なくされ遠方家族のもとに引っ越して行かれる方等…戸数が減少すると共に氏子数も年々

減少傾向が加速の一途を辿っていることは否めない状況にあります。

この様な現状からみても地方神社の運営は非常に厳しい状況にあり、神社収入だけで生活することは難しく他の職業を本業とし神職を副業として捉え氏神様をお守りするといった生活をしている方が殆どであると思われます。

先代宮司にあたる私の父も同様で小学校教員をする傍ら神社に奉仕しておりました。ですから私が物心ついた時には父は神職よりも学校の先生だという印象の方が強く、神社の印象はと言うとキャッチボールが出来る位の広い敷地にお社が建っていて、時々父が変わった衣装（狩衣）を着て年中多数のお客様がお見えになり、祭の日には一緒にご飯を食べたり神楽を見たりする楽しい時間がある家庭……と言った印象程度しか思っていないませんでした。

私が成長するにつれ、社家として代々受け継がれてきている家柄なのだと徐々に感じるようになってきたもののなかなかそれを受け入れることが出来ないまま神職養成大学に進学しました。神職資格を取得し奉職した後も結果の見えない仕事内容に充実感が見いだせず、社家を継ぐ事が自分にとって足枷だと感じることも多々ありました。

そんな気持ちを変えさせてくれたのが私の師でもある盛岡八幡宮宮司からの「境内に出

て掃除をしてみなさい。」という一言でした。毎日辛いと感じながら行っていた掃除ですが、いつの頃からか石畳に詰まった枯葉を取り除いた後のハッキリと浮き出て見える参道や、ほうき目が立った境内にすがすがしさを覚えたり、朝霧に映える苔の緑を美しいと思ったりと今まで見えなかった景色を感じる様になったのです。心の安らぎを抱くようになったことにより神社に対しての向き合い方が私の中で変わってきた気がします。また、数年前に自宅が火災にあった際、多くの皆様に助けていただきました。地域の皆様のつながりの大切さを実感したことをきっかけに、もっと地域に関わり恩返しをしたいという気持ちを持つ様になっていったのです。自治会や消防団など地元の活動に積極的に参加するようになり、その活動の中で氏子の皆様と交わされる会話の中で、幣束の付け方や神饌の並べる順番、喪に服す期間等：様々なご質問等を頂戴する機会が増えてまいりました。氏子の皆様がもっと神社を身近に感じて頂けるよう、歴史や文化を伝え、時代の変化に捉われることなく神社がそこにあるという安堵感を与え続けていくことこそが社家としての大切な務めではないかと思える様になったのです。

先に述べた少子高齢化による人口減少に対して歯止めをかけることはなかなか難しいことかもしれませんが。しかしながら神社を絶やさないことに関しては何とか防げる問題なの

ではないでしょうか。現代社会において宗教離れが加速してる事が神社消滅の原因とも言われ、特に若年世代の神社への意識の希薄さは目に余るものを感じます。日々の挨拶の仕方や言葉の乱れ、神棚の無い家の増加などからもそれは見えてとれます。それは目まぐるしく変化する現代社会がそうさせてしまったのかもしれませんが。

この混沌とした社会を生き抜いて行く為に今まさに必要な事こそが、日本人の古き良き家族の心豊かな生活の中から見い出せるのではないのでしょうか。人生儀礼や年中行事の意義、祭りの大切さを若者世代の皆様にはんの少しでも興味を持って頂き心にゆとりを感じて頂けたら氏神様が消滅することは防げるのではないかと信じております。

今後とも絶えることなく地元の氏神様として人が集う神社であるために社家としてどう向き合っていくのか……。まだまだ道半ばではありますが、社家として産土社を後世に繋げるという強い責任と誇りを持ってご奉仕させていただいております。地元に対して愛情を持ち、地元の素晴らしいところを伝えていきながら氏子の皆様と共に地域発展の為に歩んでいくことこそが社家としての第一のテーマと捉え日々精進していく覚悟であります。

(岩手県 松澤神社 権禰宜)

御霊とともに

佐々木美津子

平成二十七年十月十八日、陸前高田市矢作町天照御祖神社の五年式年大祭を斎行いたしました。大祭は五年に一度のため東日本大震災後初めてです。

神社で神事を行いみこしが出発『復興に祈りを』と書かれたのほりを掲げ行列は、気仙川をさかのぼり東日本大震災で傷ついた地域をしずしずと進み町内で大被害を受けた島辺地区公民館跡地へむかいました。町内外の人々が駆けつけ拍手で迎えてくださいました。

矢作町は、陸前高田市の中心地より山あいので春夏秋冬と美しい景観で市の三分の一の面積をもつ静かな町です。津波が押し寄せた島辺地区は、陸前高田市の中心から約三キロ位離れております。気仙川を遡上した津波は、震災検証報告によりますと最大浸水高「十二メートル」住宅被災七十戸二十七名が亡くなっております。

震災後、お祭りに対する地域の様が変わり、大祭が出来るか出来ないかの瀬戸際でありま

した。祭りを担う若い人が、震災で職場を失い、東京、横浜方面へ出稼ぎにそして震災で亡くなっているのです。

そして更に震災で家族や親族が亡くなり、又、家が流され壊されて心の傷が大きく『祭りどころでない』という人が多く総代・世話人の中にもこのような考えの人がおりました。総代さんに何度と集まって頂き、『祭りをすることにより沈みがちな地域の人々を元気づけ前向きに歩ませたい、特に津波犠牲者の御霊に復興へ歩む姿を示す場でもあること』を必死でお願いいたしました。

こんな時だから……。

この機会を失ったら……。

そして実行委員会をたちあげたのは祭りの一年前でした。総代・世話人・各地区の祭組頭に集まって頂き会議を重ねましたが一向に進みませんでした。今まで経験したことのない祭りへの取り組みにあせりが出てきました。眠れぬ夜が続きました。こんな時亡くなつた主人だったらどのように進めるのだろうかと写真にむかって問いかけることもしばしばでした。こんなとき会長さんが「地区に出向き、祭りの趣旨の説明をしよう」と言つて下さり地区の会議に参加しました。おしみなく足を運び地域の人々と話しをし、地域の人々

を信じました。

理由はどうかあろうと祭りを斎行しようと力強い言葉を頂きました。でもまだ決めずにいる地域もあり頭の痛いところでしたが、めげずにお願ひしました余興の練習がはじまり太鼓の音が聞こえる秋の夜、まだ意思を決めずにいる地区もあり全地区の祭り組が参加を決めたのは、祭りの一か月前でした。

ホッとしました。うれしかったです。

岩手大学の学生が夜の練習に盛岡からかけつけてくださいました。又京都のボランティアアグループが参加して下さいました。力強かったです。保育園児の五歳から八十二歳のお年寄りまで……。ようやく町に祭りムードが盛りあがり十月十八日を迎えることが出来ました。

当日は秋晴れの良い天気でした。

『御霊のみなさん見てください。気仙川に清らかな流れが戻り、さけも遡上してきました。地域のみなさん明るく元気に睦ましく復興へと歩んでいきましょう』と。

余興奉納には『天の岩戸』を披露した生出地区の神楽連をはじめ虎舞や唐傘踊りと言った各地区の郷土芸能・手踊りの女性や子供達、祭りに華やぎとにぎやかさを添えました。

町内外から集まった観客は、たおやかな唐傘踊りや勇ましい虎舞をにこやかに見守り、アクロバティックな風流あばれ神輿に拍手をこのうち大黒舞とあばれ神輿のメンバーが祝いの餅をまきいっそう観光客を喜ばせました。

五年に一度の式年大祭、震災をまたいての開催となった今回の祭り、復興を祈願し市制執行六十周年を祝う神輿渡御、地域のみなさんによる神楽・七福神・虎舞や唐傘踊りの郷土芸能・そして手踊り披露など、これまでのメイン会場だった矢作小学校には仮設住宅が建ち並び、多くの宝物を失った寂しさに、最初は実施があやぶまれた祭り。

震災で犠牲になった御霊のみなさん、地域のみなさんが心一つになり派手さはないけど、小さな町の町民総出のお祭りとして盛りあげて下さった五年式年大祭、大変うれしく涙があふれました。

今後共地域のみなさんそして御霊とともに五穀豊穡・地域の安泰を願い女子神職としてご奉仕に勤しむ決意です。

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

心 掛 け

芦 原 高 穂

今回は心掛けと題してお話をさせていただきます。

昨年の平成二十七年春の選抜高校野球で準優勝を果たした東海大四校ですが、北海道の高校野球と申しますと二年連続優勝を果たし今もアメリカ大リーグで活躍している田中将大投手を擁した駒大苫小牧高校を思い出しますが、それに続く成績を残されたわけですが、この対戦相手でこの時は準決勝で対戦した埼玉県の浦和学院高校がありました。

実はこの高校とはその前年秋の明治神宮野球大会で準決勝に進んだ折対戦しておりました、この時は東海大四校が〇対十で六回コールド負けを喫しておりました。

わたしもこの時は、テレビで観戦していたのですが、「こりやだめだ」と半ばあきらめの境地で見えておりました。

この時（コールド負けを喫した時）チームの空気は最悪で、宮崎隼人主将は「雰囲気はどん底だった」といいます。

浦和学院との違いは何なのか選手達同志で時間を掛けて話し合いをして出した答は、野球はもちろん私生活に至まで、「隙を作らない」事だったそうです。挨拶、時間厳守、寮のスリッパの整頓、時折ほころびがあった基本事項が徹底されました。

そればかりか、日課である朝の散歩で選手達は必ず一つゴミを拾って持ち帰ることも決めました。

大脇英徳監督は「小さなゴミを見つけて拾えることは、野球の視野を広げることに繋がるといっておられます。

日常生活の細かな部分まで目配りする意識が状況判断の力を磨いたのです。技術面で隙を作らないため、もう一度基本動作を体にしみこませた。

明治神宮大会で浦和学院相手に3失策をした守備陣は、この試合では無失策、冬場のゴロを捕球する姿勢を見直し、硬球より弾みやすい軟球を使って守備を鍛えた効果が現れました。富田選手は「昨秋の一失策した借りを返せた」と胸を張ったそうです。

対戦した浦和学院森監督は「昨年秋に対戦したチームとは全く別のチームになっています

した。」と驚きを隠しませんでした。

厳しい練習は勿論のこと日常のなかに勝利の種を見いだしそれを実戦した実例と言えるのではないのでしょうか。

如何に日々の過ごし方が大切であるかと言うことを物語っています。

こうしたことは、野球に止まることなく日常の生活でも当てはまることであります。

茲に神道文化叢書に納められている岡田米夫先生の残されました『神道百言』がありますが、その中で 江戸時代の神道家であり、伊勢神道の研究と晩年外宮権禰宜に補任された度会延佳は、著書『陽復記』の中で、――玉串を持ち、神語を唱る事などは、祭庭等の儀式、これも又神道の一事にして尤も重しとする所なり、されど此の事ばかりを神道と思うは、天を管の穴より覗きたるに等し。管の穴より見たるも、天にてなきにはあらねど、それのみにてはあまりにせばき事也。一事として神道にあらずと言うことなし――と書いておりますが、惟神の道というものが如何に日常のなかにあつて、平素あるいは、生活のあり方が問われていることを説いているのであります。

よく企業の安全祈願の依頼があつた時お話しさせていただくのですが、企業における安全とは、言うまでもなく、正に繁栄への第一歩であると言っても過言ではありません、そ

の安全に事業が推進されることは、そこに務める従業員の皆様のみならず多くの協力業者の皆さんの心掛けに依ることでもあります。

よく就職のことなどで、将来の安定や安全のために大企業や公的機関への就職を希望されると思いますが、実際安定していると想いますが、しかし、そこに務め一定の業務を果たすことで、職場に貢献することを求められていることもあります。しかも法人たる企業が社員や従業員を保護することは出来ないと言っても過言ではません。

従業員が業務を通じて会社を支えているのであり、そこには安全なる業務の遂行が絶対不可欠であるわけです。

安全に事業を行う事で初めて事業所たる企業は繁栄し、そこに務める従業員職人出入りする関係者に糧として配分されるわけで有り、業種を問わずこの原理は共通するものであると思います。

さて、一対二十九対三〇〇という数字があります。

統計上の大事故の背景を示す数字として紹介されることが多いわけで、皆さんも幾度となく耳にされていることと存じます。

数字に多少の違いはあれども、一般に大きな事故の背景にはこうした数多くの小さい事

故や事故の危険を感じさせる出来事があるといわれて居るわけで、その日常の業務や生活の有り様がそうしたことに繋がりがねないという現実、心しておかなければならないというわけであります。

これはハインリッヒの法則ともいわれ、アメリカの損害保険会社の調査副部長であったハインリッヒが五千社に及ぶ調査によつて提唱されたと聞いております。

一名ヒヤリハット理論ともいわれておりますが、こうした日常のなかに重大事故の種が眠っていて、そうした事態を避けるにはどうしたらよいかということを考えなければなりません。

それは日常的に行われるべき自己管理のみならず職場家庭の態度にまで及ぶことであります。健康管理や家族の人間関係をはじめおおよそ仕事と直接関わらないことでさえその人にとって生活の一部となっていれば関わってくるととらえなければなりません。

しかしこれを裏返して見れば先ほどお話しした企業の繁栄は従業員の安全安心からと申し上げましたが、だとすれば企業の繁栄は日常の有り様に根差しているともいえるわけがあります。

これは企業という組織に止まらず人間の生活そのものにも通じることであるといえま

す。

つまり、繁栄の種はそこかしこに点在しているのであり、それを一つ一つ拾いながら、やがて繁栄繁昌の道に入っていくということが世の中なのだといえるのではないのでしょうか。

つまり、繁栄にせよ大事故にせよ、その原因となる事柄は日常のなかに存在していて、心掛けて暮らしていくことで、結果として繁栄に繋がるわけです。

安心安全のみならず、世の中に求められていることを日常のなかでしっかりと見つけ、公への奉仕の心を持って貢献するよう志を立てること、目的化した繁栄ではなく、結果として、繁栄するということではないでしょうか。

先ほどからしつこいように心掛け心掛けと繰り返しておりますが、日常の有り様が大きな結果をもたらすということを、お互い肝に銘じて参りたいと思います。

裏をかえせば、事故の種だけではなく反対に繁栄や幸福の種も又日常のなかにちりばめられていることということです。

小さな日常的な工夫や努力又、社会への貢献といった心構えが明日への成功に繋がる道であるという過言ではないのです。

私たちは、ついつい目の前で起る出来事に目を奪われがちですが、そこにいたる道筋をしっかりと認識しておかなければならないのであります。

昨年のノーベル医学・生理学賞を受賞された大村智教授の業績は、静岡県伊東市のゴルフ場で採取した土壌から採取した微生物の研究を経てエバーメクチンという牛や馬などの家畜を対象にした抗寄生虫薬がきっかけとなり、此の薬の製品化が北里研究所の財政に取りましても正に救世主になったわけです。

この頃アフリカなどの途上国では風土病が大きな社会問題となっていました。

そこで、此のエバーメクチンを応用して何とか人にも友好なワクチンを作ることが出来ないかと研究が進められ、その結果人にも有効なワクチンが誕生しました。

此のワクチンがイベルメクチンと呼ばれ、風土病であるオンコセルカ症に悩まされる人が多く、犠牲になっていく人々を救うきっかけとなりました。このワクチンは、研究者の大村教授の働きかけによりアメリカのメルク社という製薬会社が無償でWHOを通じて苦しんでいる国々に提供され、およそ二億人の人が救われたといわれています。

この薬をつくる研究を通じて人類に多大なる貢献をしたとして、受賞された大村先生ですが、山梨県韮崎市の農家の長男として生まれ、厳格な父と優しく教養のある母に育てら

れ中学まではほとんど勉強しないで、父の農作業を手伝う毎日でしたが、普段口数の少ない父でしたが、作業の合間を見ては馬の扱いや、うなぎを捕ってはうなぎの生態、あるいは稲や野菜の育て方など自然と身につきました。

大村先生は、「農作業でやっていることは、化学の実験をやる時や、作業の計画を立てる時とよく似ているところがあります。どちらも将来のことを考えて計画を立て、何かあった時はすぐに変更してやることは農業も同じです。農民は自然科学者だと思うことがあります。」といっておられますが、こうした経験が微生物研究に向かわせたのかも知れません。ご両親は智少年に「農作業を言いつけましたが、決して「勉強しなさい」とはいわなかったそうです。

父である恵男（よしお）氏は農業一筋で、間違ったことが大嫌いで、PTA会長や農地改革や市町村合併でも奔走しましたが、蔭で通信教育を通して、「高等講義録」三十冊以上が残されていたそうです。

母の文子さんは、戦前は小学校の音楽教諭として務め、家では夫である父を手伝い、同時に養蚕も祖母と共に取り組んでいたもので、ゆつくり休んでいる姿を見たことがなかったそうです。実家は同じ山梨県中巨摩郡田の岡村の神社を守る神職で、地主でもあり郡長や

官選村長などもつとめた家柄、文子さんが丙午の生まれを按じて、甲府高等女学校から山梨師範学校に学ばせ、結婚出来なかった場合の自立の道と考えられていたそうです。

どちらの家も誇り高く、教育に熱心な家柄であることはご理解いただけると思いますが、終戦を迎えお母さんはそれを契機に、教員の職を辞して、本格的に農業に従事されるようになり、公職のため出掛けがちな夫に代わり田畑を姑と共に鋤持ち籠を背負い、農地解放のため手伝い人のいなくなった大村家の農業を守られました。

元々研究熱心で、実家で養蚕や農作業の手ほどきは受けましたが、しつかり者の姑に農業から養蚕にいたるまで、みっちり仕込まれ、それだけではなく寝る前に必ず日記を書き、記録を取ることを忘れませんでした。そこには其の日の作業と蚕室の温度や状態を克明に記録したと言います。そして、無駄を省き病気を防ぐため桑の与え方などの研究記録でした。

そしてその記録に従い作業の予定や仕事の手順を考え改良していったそうです。

そのお陰もあって、マユの検定にはいつも合格し、村で一・二を誇る成績だったと言えます。

そうした母の研究熱心な取り組みが大村少年に乗り移ったように感じる事があると言っ

ておられます。

正に研究としての息の長いコツコツと積み上げていく親の姿をそのまま受け継がれたわけですが、一貫して貫かれているものそれは、世のため人のためと言うことでは無いでしょうか、公に或いは困っている人々の役に立ちたい、助けたいという心掛けこそがそうした研究を通じて多大なる成果として、微生物の発見や新たな有機化合物を見つけ出すことにつながりました。

こうして見ていくと大村智教授の家系を辿ることで、親代々の積重ねさえ感じるのです。生真面目に、公のため農業という分野において日常的に創意工夫を、積み上げたその花を咲かせた大村智教授が結果としてノーベル医学生理学賞はじめとして各種の褒章叙勲に繋がったわけでもあります。

平成二十五年十月第六十二回式年遷宮は、天皇陛下のお許しのもと、国民総奉賛のもと、立派に斎行されました。

此のお祭りは神宮の神官がよく言うのは「遷宮は二十年に一度の大神嘗祭です。」といえます。どういうことかと言いますと、毎年行われる神宮きつての行事である十月の神嘗祭は、その年の新穀を大御神様にお供えする行事ですが、毎年の行事の延長に遷宮祭が斎

行され、その神嘗祭は毎日齋行される日毎朝夕大御饌祭という一日に二回齋行されますが、あの伊勢湾台風の折にも、強風と豪雨に倒され参道をふさいでいた木々をかいぐりながらも、決して休むことなく齋行された大切な祭です。

我々にとって食事は命をつなぐ大切な行為であり、神様に献げる毎日のお食事としての日毎朝夕大御饌祭は、正に命のお祭りでもあるという事です。

此の祭りも毎日行われる神嘗祭なのであり、その心は正に二十年に一度の大神嘗祭たる式年遷宮に通じていると言っても過言ではありません。

日常的な日毎朝夕大御饌祭と二十年に一度の式年遷宮はそうした意味で繋がっている行事であり、これは、私たちに何を物語っているか、日常と晴れの日には極めて密接な関係があるというわけですが、心掛けというものと、目の前に起こる現象とが密接に関わっていることにも通じるのであると教えているのではないのでしょうか。

(北海道 旭川神社 宮司)

国際化された〃神道〃

山本行恭

皆様おはようございます。椿大神社は先代宮司の時から、非常に国際化という動きを活発にしておる日本では珍しい神社だと思っております。

昭和五十九年に東京都にあります立正佼成会の大聖堂で第二十五回国際自由宗教連盟（IARF）の日本大会が行われました。その時の名誉会長が立正佼成会の開祖である庭野日敬先生で、実行委員長を先代宮司の山本行隆が務めさせていただきました。そういった経緯があり私と神道講演事務局長・大竹も二週間ほど東京に出張しておりました。その大会後、デイスカバリージャパンといって、日本のあちこちを周るツアーがあり、団体で椿大神社にお越しになった際、椿会館で外国人約八十名と懇親会を開き、皆様が非常に楽しんでおられました。その折に、先代宮司が当時権禰宜であった私に向かって「椿大神社はいいよアメリカに神社を造るから、この山本行恭を行かせる」と皆様の前で仰い

まして、私は驚いてしまって、そんな話は聞いていなかったのですが、先代宮司も氣が高揚しておりまして、外国人の前で見栄を張ったのでございます。

そうして、急に昭和五十九年七月に使命を帯びて、昭和六十年五月二十七日に単身赴任で渡米いたしました。アメリカのカリフォルニア州にストックトンという小さな農業町があるのですが、なぜそんな所に行ったのかというと実はそこにフラハティ一家が住んでいて、その方々は立正佼成会が奨励した学生達に英語を教えるという仕事をしており、椿大神社ともご縁がありますことから、アメリカに行くならばこの家に寄宿させてもらいなさいという先代宮司のお計らいにより、一年半生活をさせていただきました。もとより英語は高校時代に習ったきりで、しゃべることが出来なかったのです。しかし不思議なもので、人間というのはこのような境遇に置かれると英語をしゃべることが出来るようになっていくのでございます。見様見真似で英語に取り組みながらも、目的であるアメリカに椿大神社を造ること、また、自由宗教連盟北米大会が三年後にあり、その後の参拝を企画し交渉してくることを託されたのであります。ということは、北米大会までに神社を造らなければならぬわけです。これは私にとって大変な試練でございました。

アメリカには、ユニテリアン・ユニバーサリスト・アソシエーション(UUA)という

有名な団体組織がありまして、トーマス・ジェファースンといった歴代の大統領もそこに名を連ねておりますが、そのような組織の方々のお宅を訪問して色々なお話をさせていただきました。様々な場所に宿泊し、食事をいただきながら、多くの方とのご縁を結ぶことに奔走し、そうこうしているうちに神社を造るという大願を実行に移す時が来ました。

寄宿しているフラハティさんの家から、毎日自転車であちらこちらを周って土地を探索しました。そんな時、フツと良いところを見つけまして、今でも覚えておりますが、パシフィック大学の近所に三百坪の土地があったのです。すでにアメリカ人が住んでいる家が建っていましたが、前後に庭があり、後ろの庭は二十五mプールがすっぽり入るぐらいの土地で、それが売りに出ていたので、すぐさま日本から先代宮司にお越しいただいて実際に見てもらい、承諾を得て土地を購入しました。いよいよ神社を建立するという方向性が一気に固まってきて、測量を友人のブラジル人に頼み、日本から材料を切り出して運んでもらいました。参道のための砂利を現地の石屋から集めて、アメリカ人の大工を新聞で頼み、面接をして、日本の神社を造るのは初めてだから是非やらせてほしいと乗り氣な大工を雇って、毎日十人程が参道の工事を行いました。そのうちに日本から社殿が、鳥居が、手水舎が、どんどんどんどん運ばれてくるわけです。早朝三時頃にロサンゼルスから運

ばれた神社が町中を走ると、近所の家からは「なんなんだこれは！」と、苦情が来て叱られるのではないかと思いましたが、第二十六回国際自由宗教連盟北米大会には椿大神社から約八十名の崇敬者がやって来るのだから、何が何でも神社を造らなければいけないわけで、仕方のないことです。

そうして、ついに完成が近づき、先代宮司と一行が現地に来られた時に、私の電話が鳴りました「大変だからすぐ神社に來い」何が起こったのかと思いい行ってみると、石の鳥居が倒れかけていました。これは一大事だと、すぐに大工に電話し、ロープを張って倒れないようにと指示を出しました。石で出来ていますので、倒れたら割れてしまします。明日が竣功式という時に大工事を夜通しさせて、もう一度鳥居を持ち上げ、石を詰めてしっかりと足場を造って、なんとか竣功式に間に合うといった非常に厳しいことをやってのけました。

昭和六十二年六月に、第二十六回国際自由宗教連盟北米大会がスタンフォード大学で開催された後、日本から来た方々をお招きし、椿大神社アメリカ分社の竣功奉祝祭を盛大に執り行いました。これで私の任務は二つの目的を終えました。昭和六十二年七月に神社と境内のすべての完成を見届けて、九月に日本に帰って参りました。すでに、椿大神社の中

で後継の職員が決まっており、アメリカで一緒に業務を行ったのちに「後は頼んだぞ」とすべてを託して帰国しました。その職員は五年勤続し、次の職員は七年、次は三年と、どんどん発展的に日本の神社というものを世界に広めていったのであります。その中で、IARFやUUA関係の方たちも大勢参拝され、様々なご紹介をいただきました。全米を白衣と袴で三十社ほど巡りながら、神道の話を見せていただくこともありました。「笏とは何か」など身近なことから神道についての質問が飛び交い、説明をしていくうちに、日本の文化について徐々に興味を持つていただきました。私が帰国してからは、十年間、毎年アメリカ分社のお祭りをする際に現地の職員とともに奉仕させていただきました。日本では、佐伯正一先生の「神道の国際化」という講演を拝聴させていただく機会があり、感心はあったのですが、私もアメリカで神社を造って帰ってきた後なので、失礼ながら、机上論よりも実行だと思っておりましたから、そのお話も基礎として吸収しつつ、私の講話の一部となるようにあちらこちらでお話をさせていただきました。

さて、ここに持参した資料をご覧いただいて、実は日本にウィルチコ・フロリアンという外国人神職がおります。この者は、名古屋の上野天満宮で神道の勉強をさせてもらいながら住み込みで働く中「君は神主の資格を取れるかもしれない」と言われ、オーストリ

アでもう一度日本の勉強を行ってから、國學院大學の専攻科を卒業しました。東京・渋谷の金王八幡宮にも五年ほど務めております。このダイヤモンド社が発行した本に『神道の迷宮』という特集記事がありますが、ここに彼の記事が堂々と載っております。私は彼と話す良い機会がどこかにないかとずっと窺っていましたが、そうしているうちに三重県津市にある野邊野神社に養子に入ったとの情報をもらいました。

椿大神社には結婚のご挨拶で来られ、対談が実現しました。その際に芳名帳にご記帳いただきました。日本語が上手でしたが、それよりも筆を使って上手に記帳する彼の字を見て、これだけ書道のできる外国人はそうはいないと思いました。どうしてこんなに字がうまいのかと聞くと、金王八幡宮で朱印を毎日書いていたと答えました。渋谷の神社です。毎日すごい朱印の量をこなして、書き続けているうちに上手くなっていったとのこと。やはり境遇というものは、人を作っていくとあらためて思いました。そうして二時間ほどの対談と食事を行い、境内や授与所なども紹介しました。その折にフロリアンから「神社に参拝者が来ない」という本音を聞いて、日本で初めての外国人神主で、日本語も祝詞もすべて出来るのにそれを發揮する環境にいないのは勿体ないと私は思いました。早速メールを交換し、椿大神社がアメリカに分社を持っていることを幸いにして、外国人

との交流が非常に多いので、その際にあなたを招くから是非来てくださいと伝えました。このような交流があれば、樺大神社に来た外国人のためにもなります。神社職員には五、六名英語を話す者もおりますが、やはり外国人同士が話し合う方が、当を得ています。会話もストリートに入ってきて、わかりやすいのです。今では何度も交流をさせてもらっています。

現在日本中に大勢の外国人がやって来て全国各地の神社をお参りする中で、日本人のためのテキストとして、神社本庁が作った外国人参拝者向けの小冊子があります。皆様も持っていると思いますが、なぜ今こんなものが出回るのか、それはニーズがあるからです。ニーズがあるということは、これから先は日本独自のオリジナルの神社だけではだめだということです。パリにも神社があります。ブラジルにもあります。神社本庁の管轄している所もあるようですが、このように日本の文化を大いに発信していくということでお互いに啓蒙して行かなければならないのです。北海道・旭川神社の芦原先生がいらっしゃいますが、札幌に行ったらもう外国人だらけですよ。東京都内もそうです。その方々に「神社ってなんですか。」と聞かれて我々が説明できるようにしておかなければなりません。そこで、役立つのがこの小冊子です。これは神社本庁でもらえますので、私もいくつでもいただい

て、配ってあげればいいと思います。そうすることで神道の流れをわかりやすく説明できるのですから、それがまた次の方へと伝わっていくような流れを作らなければなりません。また、そのために我々神職が大いに動かなければならないのです。

幸いにして今年の伊勢志摩サミットでは安倍総理のお取り計らいと思いやりで各国首脳が神宮にお参りされました。その記事に關しても資料として添付させていただきました。素晴らしい記事が書かれております。記事の中には、各国首脳からのメッセージも載っております。これは瑞垣の二三四号、今年の初夏号として出版された雑誌の一部で、皆様方もご承知と思いますが、敢えてこれをお配りしましたのは、日本という国名がこれぐらいまで全世界に波及したということを伝えたいわけでございます。サミットに参加した首脳が、やはり日本には素晴らしい文化があるのだと実感したのですから、我々もまたその文化を世界に向けて発信していくべきなのです。このウィルチコ・フロリーアンが一生懸命に行っている神明奉仕に対して私たちが彼の氣持ちを汲んで、次の方向性に導いて行かなければならないという時代がもうそこまでやって来ています。だから今さら国際化された神道などと言わなくても結構です。もうすでに世界の方々は知っているのですから、その知っているという現状を我々が捉え切れていないことがあるのではなからうかと思うわけ

でございます。

沖繩に波上宮という神社があります。そこは、外国とも近い場所ですから、ツアーでよく外国人がやって来ます。聞くところによると、台湾人が日本に来たら必ずここに寄るようになっていふとのこと、台湾と沖繩との交流が進んでいる証となっています。このように沖繩に遊びに来る台湾人が必ずお参りするという行為がほとんどと普遍して行けばどうなるのか、そこに我々が啓蒙という形で踏み込んでいく事が出来れば彼らの考えや感覚は変わっていきます。

神道というものは、世界に対して喧嘩を売ってやろうなんてことはしません。非常に幅広い寛容性を持っています。奈良時代に仏教が伝来して、日本人がそれを排斥したという歴史はございません。それどころか仏教的神道というものを生み出して、吉田神道といったように日本人の文化をより深めてくれたのです。以前、椿大神社の禰宜が女子神職会に参加し岐阜の神社で研修を行った際、お坊さんの講演を聞いて目から鱗が落ちるような体験をしたそうです。それは、お坊さんが「我々仏教が今日まで発展したのは、根源に神道があるからです」と言った事で、それを聞いた私は良い事を言う人がいるのだと思いました。

つまり神道とは万物の根源であり、そこから儒教・仏教が日本の歴史の中で成り立ったということとあります。日本人の中には「神道」や「我が国」といった考えに拘りすぎる方々がいることも事実であり、その考え方に対して今さら言挙げすることもございません。しかし、言挙げしなければいけない状況なのです。神道は言挙げするものではないという考えは昔のもの、今は言わなければ理解してもらえないのです。そこには、英語も必要です。我々がもっと果敢に攻めていかなければ、本当の日本の文化というものをわかっていただけないのです。そうすることで諍いや戦争がなくなるはずです。世界に冠たる神道という文化があるからこそ、未だに戦争を七十年以上していないという毅然とした歴史が作られていくのです。また、アメリカ合衆国のオバマ大統領が伊勢志摩サミットに出席したということも非常に重要な事です。これによって日本とは安心立命な国なのだということが世界に広げばと願っております。

椿大神社の崇敬者がつい先日、アメリカの分社に行ったそうでございます。平成十三年にアメリカのストックトンからシアトル郊外に移っておりますが、そこは森が深く、まさに日本の神社と同じような境内となっています。奉職者は、合氣道家であり、日本の文化に触れて椿大神社の門を叩いてからは、先代宮司のもとへ神道を学ぶために十年間通い続

けました。神職としてのスキルをマスターした彼の祝詞はすべて日本語です。ただ、参拝者には米国人が多く、祈願句だけはわかりやすいように英語で言っております。彼がアメリカの神社に勤め始めた当初は、日本人の方が多く参拝されていたそうですが、今では米国人の方の参拝が大半となっているとのことです。米国人参拝者が、七五三や初宮詣の際に着物で祈祷に来られるのです。それは彼が毎日裏山でみそぎを行い、神道に真剣に向き合っているからこそ成し得ることでございます。

我々もそこに訪れて交流を深めることによって、彼もまた今年の十月に日本にやって来ます。その翌年はグループでお越しいただくとも聞いております。交流はすでに始まっています。もっともっと積極的に往うことを旨とし、またその場にフロリーアンなどの外国人も呼ぶことで奥深い交流が出来るという期待をしております。

私は厳密に国際化をどうこう言うわけではありませんが、今なお日本の対応が非常に遅いとは思っております。こういう状況では、世界の人々にあまり喜ばれないのではないかと思います。

折角このような方々が大勢日本に来ていらっしゃるのであれば、それぞれの文化をお互いに啓蒙出来るような場所を作ってあげることも我々神職としての大事な使命と捉えてお

ります。参加者の皆様には釈迦に説法でございますが、是非色々な分野でご啓蒙いただきたい、我々もじつとしていないで動くことによってまた新しい文化を撰取し、それを次へと繋げていけば面白い方程式が出来あがると思つているところであります。

是非、お互いに精進させていただきたいと斯様に思つております。以上で私のお話を終わらせていただきます。

ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

(三重県 椿大神社 宮司)

上杉鷹山公のご敬神

落合 偉 洲

アメリカ合衆国第三十五代大統領に就任したケネディは、日本人記者の「最も尊敬する日本人は」の質問に対して、即座に「上杉鷹山」さらに「自分の政治家としての理想像」とし「アメリカも大事な時であるから、私も十分頑張りたい」と。そこにいた日本人記者団の誰も上杉鷹山を知らなかったという。

鷹山公は、宝暦元年（一七五一）、日向高鍋藩主秋月種美公の次男として江戸屋敷に誕生。宝暦十年（一七六〇）、米沢藩主上杉重定公の養嗣となる。明和四年（一七六七）、重定公の隠居により十七歳で第九代米沢藩主となる。天明五年（一七八五）家督を治広公に譲り三十五歳で隠居した。

十七歳で米沢藩主となると「受次て 国のつかさの 身となれば 忘るまじきは 民の父母」という和歌を詠んでいる。明和元年（一七六四）八代藩主重定は藩財政難により幕

府に版籍奉還を検討、巨額の借金があり、返済に何百年かかるか不明という状況で藩主になつてゐる。米沢藩の知識無く、藩政改革に反対の老臣が多数いた。そんな中、猛勉強を開始して、藩政改革に着手した。

藩政改革の目的は、藩民が富むために行うもの、藩主や藩士がぜいたくをするために行うのではない。藩民とは藩士、農民老若男女の区別なく藩内に住む人間すべてである。病人や年寄りを労わり、子供をよく導き、米沢の地に適した産品の振興に努め、自力で財政再建を目指す「民の幸は、君の富なり」という愛と信頼を基本の愛民思想である。

鷹山公は、藩内よく視察した。温泉場に製塩所を開き、笹野観音前の老人の彫物を笹野の一刀彫として奨励し、池や沼に鯉や鰻を飼育、領民の栄養を確保した。田にも鯉を、糞は稲の肥料にと考えた。

ある日、若い鷹山公は、家臣一人を連れて藩内を視察していると、雨が降ってきた。老婆が慌てて外に干してある稲の取り込みをしていたので、家来とともに手伝った。老婆は、後日お礼に餅を持参したいと。鷹山公は断つたもののそれでは、お城の北門にと。餅を持参し、そこで手伝った若き侍が殿様と家臣である事を知り、殿様と再会することになる。

鷹山公は、それを喜び、銀五枚下賜。

彼女は、そのお金で足袋を作り、手紙とともに嫁いだ娘に送っている。その手紙と足袋が、米沢市内の宮坂考古館に現存している。その手紙は、カタカナで書かれているが、内容はその通りである。

一筆申し上げ参らせ候 あれから音沙汰無く候間 達者で稼ぎおるものと思ひおり候
おらえも達者でおる安心なされたく候 秋稲の散切り干ししまい 夕立がきそうで氣を
もんでいたら 二人のお侍 通りかかつてお手伝い受けて 刈り上げ餅上げ申す 何処
へお届けするかと聞いたら お上屋敷北のご門からいうて おるとの事 それで福で餅
三十三丸めて持つて行き候ところ お侍どころかお殿様であつたので 腰がぬけるばかり
でたまげはて申し候 そしてご褒美に銀五枚を頂候 それで家内中と孫子残らずに足
袋くれやり候 おまいの子 まつのにもやるから お殿様より拝用物として大事に履か
せられべく候 そしてまめに育てらるべく くれぐれも願ひ上ぐ候

トウベイ ヒデヨ

十二月六日

おかのどの

なほ申し上げ候 まつの足に合わぬ時わ 大事にしまいおかるべく候 委細正月にお

いでの時話すべく候

鷹山の改革協力者は、「城の中で仕事がないので、暇を貰い新田開発を申出」許可、鷹山自身籍田の礼をした。開墾後数年間の作物は免税にした。その後多くの藩士が、小野川のほとりをはじめ処処に散っていった。改革ムードが藩内に浸透していった。

明和四年十七歳で藩主となった年の八月一日人知れず、米沢の上杉家氏神春日神社に使いを派遣し社殿内奥深くに誓詞を奉納した。

1 学問はこれまで通り怠らず務めます。

2 武術も同様にします。

3 民の父母の語は家督の際、歌にも詠みましたので、この事は第一番に大事にします。

4 上の者が驕らなければ、下々は危うくなく、又、民の幸せのために費用が要るが、費用をかけなくても幸せになる事業を興せば、君民共に幸せになれるという言葉は、日夜忘れないようにします。

5 言行が一致しなかったり、賞罰が、不正、不順であつたり、無礼のない様慎みます。右の事をこれから堅く守り続けます。もし怠慢することがあつたら忽ち神罰を受けて、永く家運が尽きる事になつても覚悟致しております。

右お誓い致します。

名前の下の花押に血判あった。

この誓詞は九十九年後の慶応元年に春日神社の本殿から発見された。また同年九月六日には米沢の氏神白子神社にも誓詞を奉納「藩建て直しの為に、大儉約を行って、中興したいとお誓い致します。この決断を怠る様な事がありましたら、忽ち神罰を頂きます」この誓詞は一三四年後の明治二十四年に白子神社の神職が御殿の中で発見した。

鷹山公の改革は、自分の生活から食事は、一汁一菜。衣類は全部木綿。奥女中五十人を九人に減。藩主の服食費一千五百両を二百九両に減額、藩政改革は藩民を富ませるため藩民全員の協力が必要とし、自助 互助 扶助の三助を説いた。「藩主、藩士は民の僕」「藩民は藩政府に対し何が協力出来るか考え実行する」というのは、鷹山公の言い出した言葉である。

明治二十七年、内村鑑三は『代表的日本人』を（英文）で発表した。「新日本建設者西郷隆盛」「封建領主 上杉鷹山」「農民聖人 二宮尊徳」「部落教師 中江藤樹」「仏教僧侶日蓮上人」を紹介している。

一九六一年（昭和三十六年）一月二十日十二時五十二分、ケネディの大統領就任演説が

始った。その演説の中で、「そこでアメリカ国民の皆さん、アメリカが皆さんに何をしてくれるのだろうかと問うことはやめていただきたい。反対に自分が国のために何ができるかを問うていただきたい」 And so, my fellow Americans: ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country,

ワシントン D・C を出てメモリアル橋を渡った所にアーリントン国立墓地がある。そこにケネディ大統領の墓があり、その平たい墓石にこの言葉が刻まれている。ケネディの大統領就任演説は、全体がとびっきりの名文で、その中でもこの部分は名言中の名言とされアメリカ国民の心深くに刻まれている言葉である。

ケネディが、「上杉鷹山」の名を口にして、あの名演説の下敷きに「藩民は藩政府に対し何が協力出来るか考え実行する」という鷹山公の思想が見えてくる。『代表的日本人』を読んでいることは、まず間違いないと思うのである。

鷹山公は明治五年、上杉謙信公と共に上杉神社に祀られた。大正元年には、別の社殿が造営されて、松岬神社に祀られている。

(静岡県 久能山東照宮 宮司)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	参事	参事	副会長	副会長	会長
木下久榮	河本文夫	鍵三夫	小野日隆	井出舜	生寫經和	荒木眞幸	芦原高穂	佐古一洌	村田和之	山本行恭	戸内康雅	落合偉洲		
大江八幡宮 宮司	宮尾八幡宮 宮司	志波彦神社鹽竈神社 宮司	八坂社 宮司	諏訪神社 宮司	松尾大社 宮司	月山神社 宮司	旭川神社 宮司	松尾大社 名誉宮司	長束神社 宮司	椿大神社 宮司	心清水八幡神社 宮司	久能山東照宮 宮司		

幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	幹	事務局長
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	

佐々木美津子	鈴木明子	谷田勉	中木屋豊	塙東男	松吉宣和	宮川脩	宮田修	村瀬佳子	山下裕嗣	山田一孝	山村稔晴	山元義清	大竹久雄
--------	------	-----	------	-----	------	-----	-----	------	------	------	------	------	------

天照御祖神社 宮司	立木神社 権禰宜	劔緒神社 宮司	稻荷神社 宮司	笠間稻荷神社 宮司	乃木神社 宮司	福井県護国神社 宮司	熊野神社 宮司	長束神社 権禰宜	白山神社 禰宜	静内神社 宮司	高知大神宮 宮司	老杉神社 宮司	椿大神社 禰宜
-----------	----------	---------	---------	-----------	---------	------------	---------	----------	---------	---------	----------	---------	---------

神道講演全国大会のあゆみ

大 会		開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講 話 集
第一回	東京大会	昭和四六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第二回	広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回	伊勢大会	昭和五四年八月二七～二九日	神宮会館		猪瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回	九州大会	昭和五八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第五回	みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回	伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回	東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第八回	宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回	愛媛大会	平成五年七月一九～二一日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回	東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖國神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回	北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第一二回	広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	

	大 会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講 話 集
第一三回	伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一洌	嶋田 達久	追憶
第一五回	東京大会	平成一一年九月九～一日	全国神社社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回	愛媛大会	平成一二年八月三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回	石川大会	平成一三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回	鹿児島大会	平成一四年八月二～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回	愛知大会	平成一五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二〇回	鳥根大会	平成一六年七月一三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回	宮城大会	平成一七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回	北海道大会	平成一八年六月二三～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朝北のいぶき
第二三回	奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回	伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回	茨城大会	平成二一年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の祈り
第二六回	山口大会	平成二二年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ

大会	第二七回	第二八回	第二九回	第三〇回	第三一回
	沖繩大会	愛媛大会	京都大会	石川大会	伊勢大会
	平成二三年六月二一～二四日	平成二四年八月二八～三〇日	平成二五年六月二一～二三日	平成二六年六月二一～二三日	平成二七年七月一三～一五日
	波上宮	石鎚神社	京都府神社庁	白山比咩神社	椿大神社
	大会会長	末安 大孝	十亀 興美	田中 恆清	村上 和臣
	実行委員長	村田 和之	佐古 一洌	佐古 一洌	落合 偉洲
	事務局長	畠田 明彦	畠田 明彦	畠田 明彦	大竹 久雄
	講話集	魂の島から	愛比賣の睦び	平安の念ひ	御みちびき

あとがき

第三十二回神道講演全国研修大会 東北大会 実行副委員長

神道講演全国協議会 副会長

山 本 行 恭

(椿大神社 宮司)

未曾有の大津波被害に苛まれた東北・みちのく地方を中心とした岩手県で、第三十二回東北大会が被災者の慰霊と、一早い復興を念じて「みちのくのいのり」として開催されました。

参加者は、北日本を中心とした若い青年神職も多く、元氣溢れた氣魄ある講演を堂々とされました。

近年は、少子高齢化と共に更なる波が押し寄せています。それは神職不在・氏子不在という過疎化問題であります。そんな中で、まずは神職自らが流れを止めるくらいの勢いが必要ならば、永遠に歯止めが効かないと思われます。

求められているのは「我が国は神国なり」という往古からの自負心です。

神道講演は、上手だとかの問題ではなく、魂を奮い起こすほどの生力いきぢからで氏子崇敬者との心を「つなぐ」ことにあるのです。

結びにあたり、素晴らしい大会に惜しまぬ御尽力をくださいました東北地区神社庁長様を始め、会場を御提供賜りました盛岡八幡宮・藤原隆麿宮司様他職員の方々に深甚なる敬意を表し感謝御礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

講話集 みちのくのいのり

—第三十二回 神道講演全国研修大会 東北大会—

発行 平成29年7月1日

編集者
装幀者
— 神道講演全国協議会事務局

印刷所
製本所
— 三重県いなべ市北勢町阿下喜二六七—
共栄堂印刷株式会社

発行所
神道講演全国協議会

〒五九〇三五 三重県鈴鹿市山本町一八七一
TEL〇五九(三七二)一五一五(代)
FAX〇五九(三七二)一六六八
椿大神社社務所内

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

【チャグチャグ馬コ】

チャグチャグ馬コは、岩手県滝沢市と盛岡市において毎年六月の第二土曜日に実施される祭り。

古来より、牛とともに農耕にかかせない家畜であった馬の勤労を感謝する祭りで、大型の優秀な馬「南部駒」の産地として知られる南部藩において日頃の労働の感謝の意味を込めて、旧暦の五月五日に村民が鬼越蒼前神社に馬と共に参拝し、その無病息災を祈願したのがチャグチャグ馬コの起源とされている。

滝沢市の鬼越おにこしやげん蒼前神社から盛岡市の盛岡八幡宮まで、華やかな馬具を纏った百頭を超える馬が約十五kmの距離を鈴の音を響かせながら四時間かけて練り歩く。

昭和五十三年に、無形民俗文化財に指定され、チャグチャグ馬コの鈴の音は、平成八年に環境省（当時環境庁）の「残したい日本の音風景百選」にも選出された。

昭和三十三年からは新暦の六月十五日に開催されてきたが、平成十三年以降はより多くの人に参加しやすいよう、六月の第二土曜日に開催されている。

